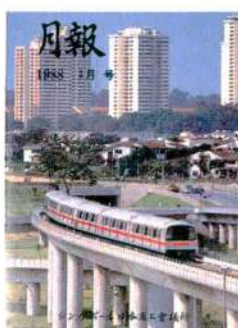
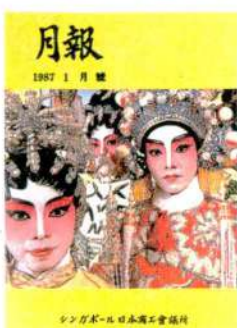
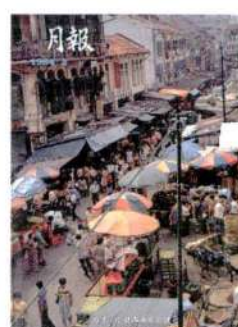
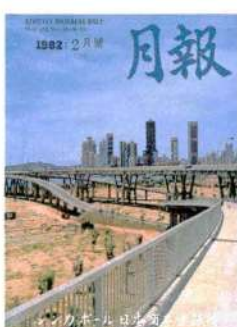
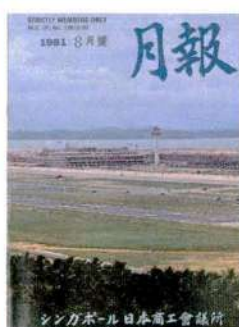
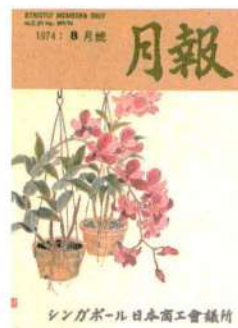


月報

1990

3月号

20周年特集号



〈 目 次 〉

創立20周年記念特集号(3月号)

「創立20周年記念号」発刊にあたって	シンガポール日本商工会議所 会頭 野口 滋	1
祝 辞	駐シンガポール日本国特命全権大使 山口 達男 閣下	4
MESSAGE	BG (RES) Lee Hsien Loong Minister For Trade and Industry	6
祝 辞	日本商工会議所 会頭 石川 六郎	7
MESSAGE	Mr Philip Yeo Chairman Singapore Economic Development Board	8
MESSAGE	Mr Alan Yeo Chairman Singapore Trade Development Board	9
「創立20周年記念号」 の編集発行にあたって	広報委員会 担当理事 加藤 武彦	10
特別寄稿 「シンガポール日本商工会議所設立時 の思い出」	PANA NEWS 陳 加昌	12

～ シンガポールーきのう、きょう、あした ～

1. シンガポールの回想と将来	14
2. シンガポーリアンとのふれあい	47
3. シンガポールでの楽しみ (パート1)	62
4. シンガポールでの楽しみ (パート2)	85
5. シンガポールでの駐在生活	99
6. シンガポール事情 (パート1)	120
7. シンガポール事情 (パート2)	139
歴代会頭名	166
シンガポール日本商工会議所・会員数の推移	167
シンガポールの経済指数	168
広報委員会リスト	177
「20周年記念特集号」に寄せて (広報委員会・委員)	178
編集後記	187



シンガポール日本商工会議所 「創立20周年記念号」発刊にあたって

シンガポール日本商工会議所
会頭 野口 滋

会員企業の皆様と共に、シンガポール日本商工会議所のハタチの記念すべき日を迎えることができましたことを心からお慶び申し上げます。

シンガポール日本商工会議所は、現在のシンガポールがマレーシア連邦から分離独立した4年後、1969年に産声をあげました。設立時の会議所は、現在の中華総商会の中にオフィスを仮住いし、69社の会員によって発足致しました。この年は偶々日本企業のためEDBが東京に投資促進局を設置した年に当たります。

その後、シンガポールが独立後の幾多の困難を克服していく中で、チェンバーも1977年には現在のCPF（中央厚生年金）ビルに移転し、ようやく一人歩きする時期を迎えました。この間、1971年にジュロンに日本庭園が完成し、同年に日本とシンガポールとの間で航空交渉が妥結するなどその後の両国民の交流促進を活発化させるフォーマルな口火が切られております。また、1972年には日本のデパートが初めてシンガポールに登場し、その後のシンガポリアンの消費行動に少なからず影響を与えたことはご高承の通りでございます。さらに、1976年には現在、全日制の海外日本人学校の中でNO.1の規模を誇るシンガポール日本人学校の新校舎が完成致しておりますことも銘記すべきことの一つではなかろうかと存じます。

70年代を通じて9.4%の成長を遂げたシンガポール経済の拡大と歩調を合せて、チェンバーの会員数も着実に増加の一途を辿っております。会員数が100社を超えたのが1972年、200社を上回ったのが1976年で、その後の1979年には300社の大台に乗っております。その後、80年代初期の高成長が持続する中で、年代中ばには高賃金政策をはじめとするいくつか

の要素が重なり、1985年に建国以来初めてのマイナス成長を経験致しました。86年、87年と賃金凍結・抑制の時期を経て、政府の景気刺激策が効を奏し、併せて日本円の高騰、米国経済の堅調な拡大と相俟って、再びシンガポールへの諸外国投資が増え、1988年には73年以来15年ぶりと言う2ケタ成長を達成したことは皆様のご記憶にも新しい事であると存じます。

この間、シンガポールにおける製造業投資に占める日本の地位が86年、87年、88年と3カ年間続けてナンバーワンにランクされておりますことは誠に喜ばしい事であると同時に、当地における日系企業のプレゼンスの増大に伴い、企業活動が経済遍重から地域社会との調和並びに融和を自覚すべく軌道修正を図らなければならなくなった時期とも重なっております。

80年代の終りを締めくくる89年の経済成長率もカゲってくるとは言われておりましたが、時を追うごとに上方修正を重ね、通年で9%台に達したと言われております。一般にシンガポールの適正成長率が4~6%と言われておりますことからみて、80年代を通した成長率が一時不況を経験したとは言え、7.1%を達成した事は時宜を得た政策の実行とそれを十分に認識し、かつ下支えした民間企業の皆様の努力の成果であると確信致しております。

80年代を通じて会員企業数は1982年に400件を超え、85年に450件へと順調に拡大致しましたが、86年度末にはシンガポールがマイナス成長となったあおりを受けて、創立以来初めて会員数が前年をワリ込む事態となりました。その後は前述の通り、シンガポールが再び成長率を高めて行く中で日系企業の投資機会が増え、会員数も再び増加の一途を辿り、1990年1月時点で552社へと拡大致しております。この間、1988年5月にはチェンバーのオフィスを10年8カ月住みなれたO P Fビルから現在のM A Sビル（シンガポール金融通貨当局）に移転し、創立20周年の記念すべき日を迎えることになりました。

青年期を迎えたシンガポール日本商工会議所の現在の姿がありますのは、その誕生から幼年期さらに青年期への移行の過程で、我々の先輩諸氏が地域社会に受け入れられるべく日々ご苦勞を重ねて来られた結果であると存じます。同時に、現在わがチェンバーが世界屈指の海外日本人商工会議所の一つ

であるとの名声を謳歌できますのは、今を支える会員企業の皆様お一人お一人のご協力の賜であると深く感謝申し上げる次第でございます。

ここに、上梓させて頂きましたシンガポール日本商工会議所「20周年記念号」は日夜ビジネスに励むかたわら時に日本を想い、またシンガポールを愛してこられた民間外交の諸氏の方々の声が集大成されております。幸いにしてシンガポール20周年にめぐり合うことのできました喜びを会員企業の皆様と共に分かち合いたいとの企画で本紙を発刊させて頂きました。ご投稿頂きました各位並びに本誌編集発行にあたり多大のご尽力を頂きました会議所広報委員会メンバーの方々に対し、末筆ながら深く感謝の意を表する次第でございます。



祝 辞

在シンガポール日本国特命全権大使
山 口 達 男

シンガポール日本商工会議所が創立二十周年を迎えられ、このたび、その月報の記念特集号が刊行されるにあたり、一言お祝いの御挨拶を申し上げます。

御高承の通り、シンガポール日本商工会議所は、シンガポールがマレーシア連邦から分離独立してまだ間もない1969年に、日系企業の利益擁護と日星経済関係の良好な発展を促すため設立されました。

この間二十年の日星経済関係の発展をふり返ってみますと、両国間の貿易額は約十六倍、投資の累積額は五十倍以上と飛躍的に拡大を遂げ、現在、日本はシンガポールにとって貿易相手国として全体の15～16%、投資国として全累積投資額の約25%、最近年の毎年の投資約束額では実に約40%を占めるに至っております。

もちろん、今日の真に友好国と呼ぶにふさわしい両国関係が築かれるまでの道のりが、常に平坦なものばかりであった訳ではなく、かつてはいわゆる血債問題等対日非難の運動が時として盛り上げ、日星関係そのものを危くする恐れすらありました。こうした問題に対処するに際し、シンガポール日本商工会議所は実に目覚しい活躍をされ、更には問題の再発防止と友好促進のため、対日理解を進めるために献身的な努力を続けられ、日星友好関係の促進に多大の貢献をしてこられたことに対し、改めて心から敬意と謝意を表する次第であります。

さて、このところシンガポールは二十世紀末までに先進工業国の仲間入りを果たすとの目標を達成するため、製造業と関連サービス業との有機的連携を図り、「世界のトータル・ビジネス・センター」を目指す方向へと経済政

策の転換を行っておりますシンガポール政府のこの新政策の展開は、我が国における産業調整の進展と折から軌を一にしており、我が国企業にも多くの新しいビジネス・チャンスを提供して来ました。近年の我が国企業のシンガポール進出は、誠に目ざましく、米国を抜いて第一の投資国になるに伴い、商工会議所のメンバーも増加の一途を辿っていることに御同慶に堪えません。

激動の1989年が過ぎ、20世紀最後の10年を迎えましたが、東西の冷戦構造から、海図のない未踏の多極構造へとシフトし、市場論理に立った経済と技術優位の時代に入った今、生産、金融大国となった我国の前途には、かえって多くの不確定性とリスクが待ち構えていると思われるなりません。冷戦の氷が破れた後には、各国の利害に基づくナショナリズム、地域紛争、宗教人種面の争いが頭をもたげる危険があり、南北問題が解決のモメンタムを失って益々の引きならない問題となる可能性もあります。

グローバに化した我が国の経済力の具体的現われが、皆様が代表しておられる各個別企業の市場を求めての活潑な活動に他ならない訳であります。皆様方におかれましても、世界の中の日本、国際社会に貢献する日本という観点を常時視野の中に置かれ、自国が、また、自社が外国から客観的にどう見られているかを想像力をもって洞察され、日常の企業活動にその観点を生かされることを希望して止みません。

世界地図の中で日本とそれを雁行して追うアジアNIESとASEANは光り輝く成長地帯であります。これをより拡大した米国を含むアジア太平洋協力の次元にまで地域協力を昇華し、高めて行けば、米、ECとの対決コースを回避し、新たに実り深い開放されたグローバルな協力の世紀を開くことが可能ではないかと考えます。

歴史の未曾有の一転換期に、共生とっていい程の深化した相互依存の絆で結ばれた日本とシンガポールの関係を見つめ直し、更に成熟したものとすべく、シンガポールの人々と力をあわせて行くことが我々に求められている課題でありましょう。

シンガポール日本商工会議所会員各位におかれましても、今後とも両国の発展と相互理解を促進するため更に御尽力いただくようお願い申し上げますとともに、会員各位及び貴会議所のますますの御発展をお祈り申し上げます。

MESSAGE



From
BG (RES) Lee Hsien Loong
Minister For
Trade and Industry

Over the last two decades, economic relations between Japan and Singapore had grown considerably. Japan is now our second largest trading partner, and total bilateral trade has increased more than fourteen times to reach \$26 billion in 1988. Japan is also a major investor country in our manufacturing and service industries. Cumulative investments by Japanese companies in Singapore has increased to more than \$4 billion, accounting for more than 25% of foreign investments in Singapore.

The Japanese Chamber of Commerce and Industry, Singapore (JCCIS) has played an important role in strengthening commercial and industrial relations between Japan and Singapore. The JCCIS has helped to further the understanding of the Japanese business community on Singapore, and strengthened interaction between Japanese companies, and Singapore government agencies and local companies. I am confident that the JCCIS will continue to play an important role in enhancing bilateral economic relations between Japan and Singapore.

I wish the JCCIS a happy Twentieth Anniversary, and every success in the years ahead.

A handwritten signature in dark ink, appearing to read 'Lee Hsien Loong', with a stylized flourish at the end.

LEE HSIEN LOONG



祝 辞

日本商工会議所
会頭 石川六郎

シンガポール日本商工会議所の創立20周年を心からお慶び申し上げます。

シンガポール日本商工会議所は、1969年に僅か69社の日系企業により設立されましたが、その後の日本企業のシンガポール進出の増大に伴い順調な発展を遂げられ、今日では559社の会員を数えるに至っておりますことは、慶賀に堪えません。又、この間活発な事業を展開され、在星日系企業の発展のみならずシンガポールの経済開発と日星両国の関係強化並びに友好親善に多大の貢献をされて来られました。これも偏に歴代の会頭はじめ役員並びに会員の皆様方のご尽力の賜であり、深甚なる敬意を表する次第であります。

ご高承の通り、日本経済の国際化と日本企業のグローバル化の進展は加速化の方向にあり、日本企業の海外進出も更に活発化していくものと予測されます。しかしながら、他方日本の海外投資が、急激に拡大していく中で、投資摩擦問題の顕在化の懸念も出てきており、今後日本企業にとって、現地産業社会や地域社会との調和を図っていくことが一層強く求められると思われれます。その意味において、日系企業と現地産業・地域コミュニティを結ぶパイプ役としてのシンガポール日本商工会議所の役割と責務はますます重要かつ大きなものとなってきております。

シンガポール日本商工会議所におかれましては、この記念すべき20周年を契機として、思いを新たにされ、日星両国の架け橋として一層ご活躍されますことを切に願って止みません。

終わりに、シンガポール日本商工会議所の発展と役員並びに会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げお祝いの言葉といたします。

MESSAGE



From
Mr Philip Yeo
Chairman
Singapore Economic Development Board

I am most pleased and honoured to join the Japanese Chamber of Commerce and Industry, Singapore (JCCIS) in celebrating the 20th anniversary of its foundation in Singapore. On behalf of the Singapore Economic Development Board (EDB), I congratulate your members on this happy occasion.

The EDB established its first Japan office in 1969 in Tokyo to promote investments from Japan. As a result, we have succeeded in attracting substantial investments from Japan to Singapore to manufacture a wide range of products for the world market.

During the past two decades, Singapore had certainly benefitted from Japanese direct overseas investments. As at end 1987, Japan was the second largest manufacturing country in Singapore, after the United States of America. Cumulative manufacturing investments by Japan in terms of gross fixed assets stood at over S\$ 4 billion. However, in terms of investment commitments, Japan overtook the US as the largest foreign source of investment in 1986 and remained at this top position for three consecutive years.

The JCCIS, now celebrating its 20th anniversary, has made significant contributions to the economic development of Singapore. For the past two decades, the strategic partnership between Singapore and Japan has evolved along with Japanese companies in their globalization efforts. This global strategic partnership will continue to benefit both Singapore and Japan.

The Singapore economy, after more than 25 years of economic growth, aspires to be a developed country by the 1990s in terms of education, skill level, range and sophistication of economic activities. To help realize this aspiration, the EDB intends to further promote Singapore as a Manufacturing and Services centre for global corporations. Many Japanese MNCs have responded by reconfiguring their activities in manufacturing, marketing, research and development and supporting services to make Singapore their Total Business Centre in this region of the world.

Economic growth in Asia is expected to continue to be strong in the 1990s. Singapore continues to welcome Japanese investments under the new strategy of achieving sustained growth as a high value-added Manufacturing and Services centre and a key node for global and Asia-Pacific business networks.

We look forward to working closely with the JCCIS to further strengthen the existing excellent relations between our two countries for new challenges and new innovations in the 1990s.

MESSAGE



**From
Mr Alan Yeo
Chairman
Singapore Trade Development Board**

For the past two decades, Singapore has enjoyed a steady growth in trade with Japan. With an average annual expansion rate of 16%, Japan remains until today amongst Singapore's top three trading partners.

It is noteworthy that there has been an increasing acceptance of Singapore-made products and services by the discerning quality-conscious Japanese consumers. Such exports which include electronics, jewellery, furniture and food and beverage increased by almost one and half times in the last five years. This trend is expected to continue into the 1990s.

Although such exports constitute only a small portion of the total trade between the two countries, the scope for expansion is tremendous.

The Singapore Trade Development Board and other government agencies will together with the private sector continue to aggressively promote Singapore's exports to Japan as well as attract more Japanese companies to base their international trading activities in Singapore. The expanded use of Singapore as an international trading hub will boost bilateral as well as multilateral trade. We are pleased that Japanese companies are already responding positively to our Approved Oil Trader Scheme and the yet to be implemented Approved International Trader Scheme.

I urge the Japanese Chamber of Commerce and Industry (JCCIS) to also play an active part to promote two-way trade. Much can be done by the Chamber to improve Japanese companies' awareness of the potential of buying more from Singapore and trading in Singapore.

With its aim to promote commercial and industrial relations between Singapore and Japan and with its track record of having actively promoted a close and harmonious relationship between the Singapore government authorities and the Japanese business community, I am confident that JCCIS can contribute significantly to the next decade of growth in Singapore-Japan trade.

I congratulate the JCCIS on its 20th anniversary in Singapore and I wish it every success.



『創立二十周年記念号』

の編集発行にあたって

シンガポール日本商工会議所
広報委員会 担当理事 加藤武彦

1969年8月22日、創立総会が開催され、シンガポール日本商工会議所が、産声をあげました。

会議所設立後、5ヶ月の準備期間を経て、1970年1～2月合併号として発刊された『月報』の創刊号は、総ページ数15ページ、ガリ版刷りで、初代会頭、佐藤周輔氏(三井物産)の『巻頭之辞』に始まり、名誉顧問、奈良靖彦シンガポール大使の寄稿による『国際化時代』という一文が掲載されている等、応時の在星諸先輩の活動ぶりや、国際情勢を知るうえで、このうえなく貴重な資料として保存されております。あらためて、創刊号を手にとってみますと、時代の変化の激しさに、隔世の感を禁じ得ません。

『月報』創刊の1970年といえば、日本で初の『万国博』が大阪で開催され、日本の国際化の幕明けを告げる、記念すべき年でもありました。

企業のグローバル化の先兵として、来星された、諸先輩の手によって、20年前産声をあげた『月報』は、その後、幾多の変遷と試練を経ながらも、多数の先輩の手によって生まれ、今日の立派な『月報』に成長いたしました。

昨年八月、会議所創立20周年記念事業の一つとして、『月報』の記念特集号を発刊することが、理事会で決定され、広報委員会がその大役を、お引受けすることとなりました。

広報委員会メンバーで、編集の基本方針を検討の結果、20年の節目に相応しく、かつ、今後10年先、20年先、あるいは30年先に、在星されているであろう後輩会員の皆さんから、丁度創刊号がそうであったように、往時の状況を知る貴重な資料であると、云われるようなものを作ろうという、結論に達しました。この目的に副った内容のものにするためには、数多くの在

星会員の語部に登場していただき、シンガポールについて、つぶさに語っていただくのが、一番良い方法ではなかろうかということになり、早速各方面に寄稿を依頼いたしました。

本日、お届けいたします 20 周年記念特集号『会員の声』は、このように多数の語部の皆様のご協力を得て誕生いたしました。

本誌に玉稿を、寄稿下さいました皆様に、この誌面をお借りしまして、厚くお礼申し上げます。

本誌が、後世の会員各位から、所期の目的を達するような評価を受けることが出来ますならば、広報委員一同、これに過ぐる喜びはございません。

特別寄稿

「シンガポール日本商工会議所設立時の思い出」

PANA NEWS

陳 加昌
チン カーチョン

記念誌刊行に当って「日本商工会議所発足当時の思い出を」とのご依頼を受けたが、同会議所発足の1969年を含む60年代後半は、シンガポールにとって、まことに記念すべき国家独立の創生期であった。

シンガポールは65年8月、マレーシア連邦から離脱して独立を達成、マレーシア連邦時代に表面化した、第二次大戦中のシンガポール市民虐殺について日本の責任を追求する「血債問題」も日星両国政府の精力的な交渉で解決（66年12月）した。63年に同問題が発生して以来緊張していたシンガポール国民と在留日本人の関係も、椎名外相の訪星、独立記念日に日本からの花火寄贈（66年）、「日本占領期受難人民慰霊碑」の建立、佐藤首相の訪星（67年）、三木外相の訪星、リー首相の訪日（68年）など両国関係者の地道な努力の積み重ねによって次第に親善友好の雰囲気となった。

シンガポール日本商工会議所が発足した当時には、そうした両国の緊張と融和の関係があったことを、今日の会員諸賢にも記憶して置いていただくことは決して無意味ではあるまいと思う。

さて、日本商工会議所の設立について、私の記憶の中では、表面に立って活躍され初代の正副会頭になられた三井物産の佐藤支店長、I H Iの桜井氏、東銀の松本氏及び吉田大使の奔走の他に陰の協力者として設立を促進しお膳立てをしていた時事通信の村上支局長のこと（当時、新聞関係は時事及び共同通信二社）を一筆書き加えたい。

同支局長は、67年11月に着任されたが来星するやいなや、私に対して世界各地にある日本商工会議所の定款、規約のコピーを見せて「商工会議所を設立するとすれば、シンガポール側にはどんな問題があるだろう」と質問されたのを記憶している。当時は、まだ在留日本人、日系企業の数も少なく、一部の日系企業に労働問題が発生したり、マレーシア・シンガポール両国関

係も政治的、人種的な対立があったりして、会議所設立の努力はなかなか実を結びそうにもなかった。

しかし、シンガポール政府がジュロン地区総合開発計画の一環として、日本人会に日本庭園の建設に協力するよう要請したことが、あるいは会議所設立を促す一つの契機になったのかも知れない。基本的に個人の親睦機関としての性格にとどまる日本人会では、企業ベースないし日本経済界の協力を求める必要のある大規模なプロジェクトにアプローチすることはなじまなかったようである。

日本企業の代表者の集まりで「珊瑚会」という任意団体もあったが、これも親睦機関であって法人あるいは経済界としての意思をまとめるのには適切ではなかった。

このような日本人社会の事情もあって69年に入ると会議所設立のための非公式、公式の会合がひんばんに開かれるようになった。

特に三井物産の佐藤支店長は熱心に奔走されて、シンガポールの法規に適合する組織として会議所を発足させるために、法律事務所で研究し、政府関係者の意向を打診するなどして苦勞された由を聞き及んでいる。その間、さきの村上時事通信支局長も協力されていたようであるが、ある日「あまり時間が経ったので、コピーが読めなくなってしまった」とぼやきながら、着任の際に携行した在外日本商工会議所設立のための参考資料に補筆されている姿を見たことも一つの懐かしい思い出になっている。

かげの協力者の苦勞話として更に加筆しておきたいことは大使館の篠原氏（通産省出向）がシンガポールの労働法をボランティアで翻訳、初代商工会議所長溝口氏のもとで事務をしていた大村登美子（Mrs Tomiko Tan）さんがガリバンに書いてすり当時日本から出向いて来た人々に参考資料として使ってもらっていたことなども記するに値すると思う。

1. シンガポールの回想と将来

1) 株式会社東京銀行	(早川 博之)	14
2) 三洋工業(星)私人有限公司	(佐田 光男)	16
3) 小松シンガポール有限公司	(嶋田 英輔)	18
4) Enplas Co (S) Pte Ltd	(四条 克己)	19
5) Singapore Leasing International (Pte) Ltd	(梶原 武)	22
6) 細田貿易新加坡私人有限公司	(遠山 邦夫)	23
7) 旭硝子(株)シンガポール支店	(木村 登志郎)	25
8) ミットヨ・アジア・パシフィック社	(山村 驍)	27
9) Fujitec Singapore Corpn. Ltd	(岡本 崇史)	28
10) デンカ・シンガポール	(吉澤 建)	30
11) 西松建設(株)	(小林 喜久男)	32
12) 吉川ケミカル・シンガポール(株)	(安川 一夫)	34
13) 太陽誘電シンガポール	(牧野 米正)	36
14) 新日本製鉄シンガポール事務所	(北野 秀樹)	41
15) IHI Marine Engineering	(阿部 典文)	43
16) ソニー・インターナショナル(シンガポール)	(下津 輝八洲)	45
17) ヤオハン・シンガポール社	(鹿倉 幸安)	46

シンガポールの将来

東京銀行
早川 博之

1989年の独立記念日直後に行われた、恒例のリー首相による大演説会で、同首相が、海外に移住するシンガポリアンのために発行される無犯罪証明 (good conduct certificate) の数が1988年には4707に達したことを明らかにした。年間4707家族が移民をしたことになる。

かなりあるであろうとは思っていたが、数の多さは驚きであった。

オーストラリアやカナダ等の移民先の国の方が、より多くの機会が期待できるとか、子供の教育がシンガポールでは大変だというのが主な理由のようである。

また、1989年初だったと思うが、リー首相が50年後100年後にはシンガポールという国が存在するかどうかともわからないという趣旨の強い危機感を表明したことがあった。これは、シンガポリアンが民族としてのアイデンティティーを失い、コスモポリタン化している状況を心配しての発言だった。

リー首相を中心とした当国の指導者達が、1965年の独立前後の諸困難を克服して、短期間にすばらしい都市国家を作り上げたことは、20世紀後半の世界史を飾る出来事の1つであろう。レバノンを中心地とした中東の混乱を見るとき、改めてシンガポールの人達は恵まれていると思う。

しかし、およそこの世にユートピアは存在しないわけで、成長を急いだ過程で政策的に劣後せざるを得なかったもの、気付かなかったもの等あったはずである。移民をして行く人達は、この成長の恩恵を享受しながらも、シンガポールの将来について価値観を分かち合うことができなかった人々であろうが、人間の持つ多様性と国造りとをどう調和させるか、むずかしい問題であろう。また急成長のために英語教育を重視したことは、極めて適切であったが、結果として、文化の基礎である民族固有の言葉を失い、コスモポリタン化して行く傾向が強くなった。多民族国家を治めて行くことのむずかしさ

を物語るものであろう。

シンガポールに一時的にしろ生活した者の一人として、J O O I の 30 周年、50 周年、100 周年のときも、当国が隆々たる国であって欲しいと思う。

1990 年は当国の独立 25 周年でもある。四半世紀はやはり 1 つの区切りである。今後もこれまでの経験をうまく生かし、従来同様現実的、弾力的対応をしながら、より巾のある政策が行われることを期待したい。

日本のような問題点がわかっていてもなかなか有効な政策が実行できない硬直的な国と違って、当国はこれと思ったことはすぐ実行する弾力性を持っている。楽観的かも知れないが、それさえあれば 100 年後も、この国は大丈夫であろう。

世界の歴史を見るに、国が減んだり、衰退する原因に共通するのは、時代遅れのイデオロギーや制度に固執して、新しい時代の要請に機動的に対応できなかったケースである。

シンガポールの将来も日本の将来も、それぞれ解決すべき問題は異なるものの、いつも国民により多くの希望をいだかせるものであって欲しいと思う。

VIVA JAPAN AND SINGAPORE !



SHARAKU print of KABUKI actor

シンガポール—きのう、きょう、あした

三洋工業(星) 私人有限公司

佐田 光男

ロンドンのヒースロー空港から、約二拾五年振りに赴任地のシンガポールに到着したのは、夜の賑わいが始まろうとする九時前であった。早いものであれから二年があつと云う間に過ぎてしまった。旧友に迎えられホテルにチェックインし夕食の為に外にでて吸った外気と星空は真に二拾五年前、香港から一人でこの地に転任しビクトリア・ホテルにチェックインしたあの時と何等変ることがなかった。翌朝、早速の出勤途中、車の中から見る風景は、高速道路に沿ひ綺麗に手入れされた並木路と青々と繁る街路樹を通してかい間みるコンドミニウム群には、噂には聞いていたが初めてこの国の発展振りを認識させられたものである。近代的な都市計画に基づき整備されたハイウェイをトラックの荷台に人を乗せ、多分行き先はどこかの工場か工事現場であろうか、運び去る様は一瞬この国の後遺症を見た思いであり、何故かホッとした事を憶えている。赤レンガ屋根に、サムロが行き交ひ、今から思えばブリディシュレイランド製か胴長の白バスが大きなマフラー音を立てながら疾走する姿はないが、多分、そこに瞬間的な郷愁を感じたのかも知れない。赴任当初は、本場仕込とかなんとか言われて、ニギったゴルフは、後半暑さでガタガタ、何時も持っていかれたものであるが、最近はやっと自前のペースでプレー出来る程、暑さにも慣れることが出来た。だが反面慣れるに従ひ、得も知れない焦躁感に見舞われることがある。勿論これは自分の歳のセイや常夏の気候のセイかも知れないが、新興住宅地に居を構えた気持ちにも似て、何か落付かないのである。たまたま訪れた二拾数年来付き合っている中国人のパートナーの家で、硯を見つけ『習字ですか?』と尋ねたら『ボケ防止の爲始めましてね』と云われた。以前ビクトリア・ホテル時代は小さな輸入代理店の若大将であった。しかし今はジャングリラホテル近くの高台に立派な邸宅を構え悠々自適の生活を送っているお人であるが、何んと習字に使用し

ている紙が、英字古新聞であった。今の若者の目から見ると何んでもない事かも知れないが、終戦の物資不足を経験した我々の年代にとっては、そこに苦難を乗り越えた人生をみた訳である。欧米の大都市には必ずチャイナタウンがあり我々日本人も少なからずこの恩恵に浴している訳であるが、この住人には圧倒的に広東人が多いし、国際ビジネス・マンにも香港の中国人が多い。香港と同じような条件下にあるシンガポールが今後、益々栄え、国際人として仲間入りする日もそう遠くはないが、恵まれた環境に甘んずることなく、自ら困難に打ち勝つ体力と忍耐力を養って載くことをシンガポールファンの一員として切望する次第である。



シンガポール雑感

小松シンガポール有限公司

社長 嶋田 英輔

20年前、ホテルの少ない事もあり、今はオーチャード・ブールバルになった旧オーチャード・ロードのオーチャード・コートの上階の一室によく泊った。李首相宅に近いオックスレイ路の入口にある。当時近辺には高いビルもなく、夜勿然とあらわれる屋台群も近く、そこで舌鼓をうった事が懐しく想起される。マーライオンの近くにラッフルズブレースという低屋のショッピング街があり、激しい値引き合戦をした。当時正札販売をしていたワンブライスショップがあり、その価格の15%位引いた価格を目安としていた。シェントンウェイには、すでに数棟の高層ビルがあったが今の景観を想像すべくもなかった。ベドック一帯は大林組の持ちこんだバケットホイルエキスカベータが山を崩し、コンベアで埋立地に土砂を運び、今の海浜公園等に姿を変えたのであろう。ジュロンもさかんに山を削り工業団地造成が進められていた。今貯水タンクを置いてあるあたりの山頂からの眺望からは、今の工場群などは予測不能だった。昨年12月、当地に着任し、昔の記憶は殆んど役に立たない事を痛感した。座標軸すらも描けない事にいらだちさえ覚えた。そう言えば、当時訪問したEDBの係官が語ったシンガポールの未来像が、今まさに、ここにある。激しい変化は当時すでにビルトインされ、それを只着々と20年という年月の間に実現して来たのであるか。シンガポールの市民の先見性と実行力には全く頭のさがる想いである。最近EDBの若い係官に、今後のシンガポールの姿を尋ねた所「今までの成果を、周辺諸国に拡大する。為に大いに働く市民の、全てに先進する国家」との反応があった。シンガポールはきっとそうなるだろう。若者が前向きである限りは！雲霞の如くやって来る日本の若いツーリスト達に、こうした気概を期待したいと思うのは、老いつつあるもののたわごとだろうか。

シンガポール—きのう、きょう、あした

ENPLAS CO.(S) PTE.LTD

四条 克己

常夏の国、シンガポールに初めて訪れたのが20年前の1969年11月でした。小生の駐在地はシンガポールの対岸のジョホールバールの町でしたが8月に赴任してから毎日シンガポールを小さくて汚いジョホールホテルのバルコニーから眺め、シンガポールに行く為に必要なリエントリービザの取得を日一日と待っていた事が思い出されます。それから毎日の様にシンガポールに行っていた事は誰しもが疑わない通りです。当時のシンガポールは、急成長する前の嵐の前の静けさといったところでしたが整備された道路や英国調の建物が整然と並んで非常に綺麗な所だと強く印象に残っております。これも、既に3ヶ月のジョホールでの生活環境に慣れてきた事が大きな要因かもしれませんが特に当時のブキティマロードは誰しもが運転したく成る道路でその上に車の数が少くスピード狂には最適でした。当時の交通手段のタクシーの車種は英国系のオースチン・オックスフォードが圧倒的に多く、その他にベンツとダットサン2200（今のセドリック）が走っていました。自動車の状態も非常に悪くドアに寄り掛かっていたりすると、特にコーナーリング時は外に飛び出してしまいそうで何時も注意が必要でした。その他に、俗に言う白タク（パウンチャ）もあって人が乗れるだけ乗る事が出来ました。が車の状態はタクシーよりももっと酷く途中でのエンコもままあったが車賃は安くなっていて当時の初乗りは確かS\$0.50でしたが天気によって値段の交渉が必要でした。勿論贅沢品のカーエアコンなどは付いておらず特に雨の日の蒸し暑さには閉口した事を今でも覚えています。もう一つの交通手段でありますバスに就いて話しますと当時は会社別に色を分けて、ブルー・レッド・イエロー・グリーンと有りましたが只1社の政府系のグリーンのみが日本製（UD）のバスを使用していてドアも自動的に開閉させていましたがその他の民間のバスはドアを完全に開けっ放しにして中はゴミの山で

した。今でもバスの中は汚く昔と大差ない事は寂しい限りですが車掌も老若男女とマチマチでした。街の中の車の台数も大変少ない上に道路が良く整備されていたので交通渋滞というのも無く快適に運転出来ましたが車の種類は、英国フォードのコルティナ、エスコート、ボクゾール・ビバ、ワーゲン・ビートル、シムカ、オースチン、大型車はフォード・ファルコンが主流で雨が降るとこれらの車が道路に仲良く置き去りにされておりました。皆さんが良く知っているオーチャードロードは今の様に一方通行ではなくミングコートホテルとオーチャードホテルの前の信号からマンダリンホテル付近のジャッキーボウルから合流してくる信号の交差点までが対面交通でした。その当時は未だマンダリンホテルは出来ておらず又、日本大使館も現在のナッスムロードでは無くてダイナシティーホテルの前のリドー映画館の上に領事館としてありました事を覚えております。その頃、ボーリング場はシンガポール内に3軒あり特に現在マンダリンホテルの隣りにあるオーチャードジャッキーボウルが一番格が上で外国人を中心にこんでいました。予約が無いと仲々プレーが出来ないのでその時はI H Iと言うと直ぐにプレーが出来る事が出来ましたがI H I即ち石川島播磨重工さんで当時シンガポール政府との合併にて造船場（現在のジュロングシップヤード）を建設中でダウンタウンではI H Iが大層有名でした。当時一番のナイトクラブのフラミングでは大変歌の上手な日本人の方がよく歌っており又、映画では一番有名だったのが、『トラ、トラ、トラ』の放映でシンガポール人を含めて反響は相当のものでした。当時のシンガポールの人達の娯楽は映画とカバックと呼ばれていた駐車場に夜になると屋台が集まって丁度今のニュートンサーカスみたい（現実はずっと落ちるが）な所で食べる事が上げられ今と大差ないかもしれません。ショッピングセンターで有名だったのがチャイナタウンに在りますピーボースパークで大層流行っておりました。日本人の娯楽は勿論ゴルフを筆頭に夜はナイトクラブで先程書きましたフラミング、エルアミーゴ、オアシス、と比較的新しいペニンシュラホテルのゴールデンミリオンでのブランディー・ウォーターとダンスでした。日本料理店も当時確か三軒だけで、オーチャード・イセタンの所に在りましたウイスマ・インドネシアの大和、富士屋、エクトリアルにある勘八の前身の大黒屋と思いましたが先輩諸兄のご教示が戴ければ幸いです。生活的には今よりは勿論便利ではありませんでしたが当時は全

然そんな事は感じませんでした。その他に夜の10時過ぎになると道路の一面にテーブルと椅子を急ごしらえに置いて即席の食べる所が各地に有りましたが特に有名だったのがカーペンターストリートと呼ばれたシンガポールリバーに程近い路地のキャンティーンでした。今ですと仲々非衛生的で食べられませんでしたが当時は美味しく食べられた事を思い出します。

以上万弁だらりとピンボケにて過去の事を書きましたが当時の異国情緒タブリのシンガポールが今の様な立派な近代都市に成るとは想像以上で、特に政府の住宅政策は小生からみても大変羨ましい限りです。行政が国民主権というよりも利益の分配という観が強くてこれ又羨ましい限りで、恐らくベント等の高級車をはじめコンドニウム、ゴルフ、携帯電話から海外旅行と物的なる裕福さは日本以上ではないかと思えます。最後に成りましたがこの美しい南の国が一刻も早く各種罰金が排除されても今以上にグリーン＆クリーン・シンガポールに成りえる本当の意味での質的レベルアップを達成する事を祈願して小生の拙い書き物を終りたいと思えます。

草々



シンガポール 雑感

SINGAPORE LEASING INTERNATIONAL (PTE) LTD

梶 原 武

私が初めて、当地に赴任したのは、今から18年前のことです。その当時のシンガポールはマレーシア連邦から分離し、独立7年と非常に若い国で、建国精神に燃え、今と違った活力が満ちていました。例えば、ジュロン地区に工場団地を整地し、海外からの工場誘致に積極的な外交活動を展開していた時期であった。又国際金融センターとしての位置づけとして、ACU (ASIAN CURRENCY UNIT) 市場の拡大に努め、外国の金融機関進出も活発化しつつある時期でもありました。

当時、ロビンソン・ロードからジュロンに行くには道路事情も悪く、半日仕事でしたが、現在はハイウェイの整備により、全く以前とは様変りと、驚いているのが実情です。

今回、12年ぶりに再度、当地に赴任し、当時と比較し、大きく変わったことを、思いつくままに10点ほど挙げて見ました。

- ①チャンギ空港の立派さ(当時はバヤルバス)
- ②ニューヨークを思わせる高層ビル街
- ③ハイウェイの整備
- ④地下鉄の導入
- ⑤通信網の完備
- ⑥人口政策の変更(当時は一家族、子供は二人を強制。)
- ⑦女性の化粧(当時はごく限られた女性のみ化粧)
- ⑧北京語(マンダリン)の普及
- ⑨日本車の人気(当時はほとんどヨーロッパ車が中心)
- ⑩路上屋台の消滅

等々、数えれば限りがありません。この一連の変化は、一面、当国の近代化の証明(あかし)となるが、一方、私個人としては、チャイナタウンとか、オーチャード・ロードにあった路上屋台の群(夜になると蟻の如く湧き出て来たものである。)が街角から姿を消してしまったことは、シンガポール、本来の味がなくなり非常に淋しい気がしてならない。

70年代中盤迄の思い出

細田貿易(株)新加坡支店

遠山 邦夫

当時、24才、1972年12月5日にシンガポールに到着。マニラ、香港、バンコックの各支店を経由しての初めての海外出張と同時に、シンガポール訪問は今でも鮮やかに、弱冠24才の男に、強く印象を与えました。

4階建ての白亜のオーチャード・ホテルに投宿。エレベータが又、古い英国式で、鉄の扉を自分で開け機械式そのものでした。

一步、表に出ると、見る物が車洋と西洋の物に満ち溢れており、オーチャード・ロードは、当時対面通行で、英国風2階建てバスが行き交い、そして日本車は約30%位いで、フォード、プジョー、オースチン、ベンツ等ヨーロッパ車が殆んどでした。

オーチャード・ロード界隈の建物も、ヒルトン、マンダリン、ミンコート等を除けば、殆んどが、中国風2階建て長屋で、活躍屋、果物屋、カメラ・ショップ等気楽に買物が出来る店ばかりでした。又、店の主人と仲良く出来得る雰囲気、のんびりした風情が何んとも言えぬ様子だったと思います。店の前でインド人が寝ておる姿も良く見られ、今では想像も出来ません。

当時のラッフルズ・ホテル、そして今は無い白亜のアデルフイ・ホテル等は、正しく当時のシンガポールの異国情調さを写しており、広いロビーに、大きな懐古調の天井扇がノンビリと回転した様は、シンガポールに居る自分の存在感を、改めて感じたものです。

当時、オーチャード・ホテルの前に、タクシーの駐車場があり、客先き廻りの際、そのタクシーを利用し、炎天下の中、エアコンは無く、汗を拭き拭き、商談に出向いたものです。当時、オースチン車が殆んどで、ボンコツに近く、ズボンに汚れが付いたり、ひどい物でした。運転手も結構、マレー人、インド人が多かったのですが、昨今中国人に代わり、これはどうも無線タクシーが原因しておる様です。無線で管理された為に、ノンビリ屋のマレー人には適さなかった様です。

日本人社会も、約2000人程で、日本料理屋も当時2軒だけで、現在も在るOKOH、そして富士屋レストランのみで、たいそう高級で、めったに行けたものでは有りませんでした。

日本経済が丁度、急成長の段階に至り、シンガポール人から良く日本経済の成長は素晴らしいと賞賛されたり、珍しがられた日本人(小生)を、パーティ内に見つけると、幾人の人達からも幹杯を頼まれ、困り果てた事を憶えています。当時は、その飲物も上等なウィスキー、ブランデーでしたから、1人豊かな気分を味わったのでしょう。唯一、アジアの先進国で有った当時の日本に対する関心は、想像以上でした。

当時のシンガポールが異国情緒に満ち溢れ、又日本人駐在員社会は、一見、特権階級的匂いが漂い、良い意味でのノンビリした雰囲気有ったと思います。自由でゆったりとしたゴルフ場と言い、小生は'77年10月まで滞在しましたが、'75年頃までは本当に、シンガポールの良き時代その物だったと思います。'83年3月に2度目の当地駐在となり、来年3月に東京に帰国しますが、'80年代は余りにも近代化され続け、東京に近づいてしまいました。しかし、ラッフルズ・ホテルだけは、今も何故か、親しみを感じます。それは生来のシンガポール時代の良さを、未だ失わずに存在しているからだと思います。

90年代はどの様にシンガポールが変貌して行くか楽しみですが、70年代、80年代とたまたま当地駐在して得た比較から判断しましても、やはり70年代中盤までの良さは一口に、筆舌に尽くし難い、異国情調の世界で有ったと懐かしく思い出す次第です。

シンガポール—きのう、きょう、あした

旭硝子㈱シンガポール支店

木村 登志郎

(1) きのうのシンガポール

私がシンガポールに初めて来たのは、今から15年前の1974年の事です。当時はまだ学生で、ゼミの教授が日本政府の対外文化協力の一環として旧シンガポール大学とマラヤ大学で各一年間、日本講座を持っていた時の事です。日本人が「エコノミック・アニマル」と呼ばれ、タイのバンコク、インドネシアのジャカルタ等で反日学生運動の嵐が吹きあれた直後の事で、日本人が自らの存在の大きさに気が付かず、又、「モーレッツ」に突走ったのもその誘因とも言われ、対外文化協力も含めバランスのとれた国と国、並びに企業と進出先社会との関係の必要性が唱えられ始めた頃の事です。マレーシアでは、依然マラヤ共産党が時々テロ活動をし、それに加えて、日本赤軍が在クアラルンプール日本大使館を襲撃したり、又、当地ではシェルのブクム島製油所行きの連絡船をハイジャックしたり、一つの激動期であったかと思います。その翌年には、米軍がインドシナから撤退し、その時、私は遇々ベトナムの上空をバンコクから香港への旅客機で通過していました。本当は、南ベトナムへも行く予定でしたが、現地情勢が急変した為、スケジュールを急転変更し、米軍サイゴン撤退のニュースは香港で聞きました。乗っていた飛行機は、設立間もないシンガポール航空の古々しいボーイング707型機(旧M S A所有機をリペイントしたもので、おおよそ今のS I Aのイメージとは程遠いものでしたが、乗務員の目が生き生きとして、サービスが比較的良かったのだけは覚えています。

当時のシンガポールは、独立(1965年)後10年目のシンガポールでした。マレーシアからの分離独立の際は、その後何年間存立しうるかを疑うものも多かったシンガポールでしたが、当時は仲介貿易を軸に成長し、又、国民政策としてはリー首相の強力なリーダーシップのもと民族融和(中国人・マレー人・インド人ではなく、皆シンガポリアンという)政策とH D B

持家政策の積極的な推進が印象に残っています。それなりに自信をつけつつあったシンガポールではありましたが、日本にとっては今と比べまだまだ存在感の薄い国で、当時在留邦人も香港・バンコックの方が遥かに多く、街を見ても、日本車を含め日本製品は余り多くありませんでした。

(2) きょうのシンガポール、あしたのシンガポール

今日のシンガポールは、御存じのように経済繁栄を謳歌している状況ですが、あしたのシンガポールを考える時に、何がキー・ファクターか個人的に思いつくのは、

- ①国民に、ほぼ十分な衣食住をゆきわたらせた現在、今後どんな「夢」を国として示せるか？（国外移住問題とも関連している）
- ②強かったベトナムの「経済倒産」とアセアン隣国の驚異的成長のもと、彼等と如何に仲良くやっていけるか？又、どのようにシンガポールの独自性を維持していけるか？
- ③1997年——香港の中国返還問題。

つい数日前、以前米国関係の仕事をしている時に知りあった米国人の友人から手紙が来ました。年末に家族で、オーストラリアに遊びに行く途中、当地にも寄るので家に来たいという趣旨ですが、彼がVice Presidentを務めている会社は、香港にアジア本部を持っていますが、当面は、香港にとどまる方針だったそうです。しかし、有能な香港職員がどんどん移民でやめていく現状に直面し、やはりシンガポールに移さざるを得ないかなとの事です、資源の無い香港にとっても、シンガポールにとっても、「人」がその運命を決めるような気がします、尚、米国人の友人いわく、シンガポールが不評なのは、季節が無いのとCNNが見れない事だそうです。

シンガポール—きのう、きょう、あした

ミットヨ・アジア・パシフィック社

山村 驍

毎年この頃になると弊社の関連会社による全世界代表者会議が催されるため、小生も日本に出張、日程の合い間を縫って本稿を書いている次第です。

それにしても随筆文のテーマを眺めて先ず思い浮かべるのはほぼ12年前にシンガポールに着任してやって来た日のこと。見送られてDQ-8機で羽田空港を飛び離って、香港経由でパヤレバ空港に到着。ターバンお爺さん運転の床がほころびたタクシーで宿舎へ直行。あの頃日本人が行きつけた飲み屋はほんの数軒、それでも、今はみんな取り壊されたけれど小さくて、安いバーは各所にあって結構南国風情が楽しめたものです。形だけの会社はできたものの、市場も小さく、その月その月を喰ってゆくだけで精一杯、とに角がむしゃらに働くだけの毎日でした。体裁も気にせずばく進できたのは、会社が創業時で遊んでいる暇が無かったこと、やはり若くて元気で聞志満々だったこと、それに何と言っても苦勞を厭わず生活を共にした家族がいたこと、だったと思い返されます。

一口に十数年と言っても中味はあれこれあるものの、社業も創成期から発展期へと無事に推移できたのも皆様の御支援あつてのことと衷心から感謝致している次第です。周りを見れば東南アジアのどの国々も、20年、10年前の姿を比べると正に隔世の感の頼もしい成長振りです。消費文化が広がり、工業化が進み、世界の経済成長センターの名の通りアジアの未来に向けて加速する姿を目の前にしています。

日本・欧州・北米・南米と並びアジアに於ける弊社もグローバル・マーケットの一極を支える地域本社として脱皮しつつあります。留まることのない道筋ではありますが、考えてみれば、欧米中心型の文化・経済パターンから、やっと回り回ってきたアジアの時代の幕明けに遭遇しているという幸運に合っているとも思えるのです。

積極的に試練に臨み、外国の地を借りて仕事をさせてもらっていることをいつとも忘れることなく、単に会社の代表というのみではなく、日本人の一員という自覚を持って、もう一踏んばり頑張りたいと思っている次第です。

シンガポール—きのう、きょう、あした

FUJITEC S'PORE CORPN LTD

岡本 崇史

十年一昔といいますが、私の来星した十一年前の事を思い出せば、正にその通りです。一番の目抜き通りとはいっても、オーチャードは安い中国雑貨を売る古風なO・Kタンをはじめとして、背の低い古い建物が並んでいて、目立つのはラッキープラザとか、スペシャリストショッピング・センター位、日系のデパートで食料品を多く扱っていたのは八百伴のみでしたから、毎週買物に行けば、必ず何人かの知り合いに出会ったものでした。基本的な日本食は手に入りましたが、現在のように、いつも日本の野菜や魚が入るなんてことは夢のようなことでした。はじめて八百伴に日本の野菜がでたときは、大変話題になり、皆で買いに行きましたし、私の友人はその大根や山芋をクアラ Lumpur へのお土産にしたら泣いて喜ばれたなんて話は今の方には信じられないことと思います。

オーチャードも、ずいぶん新しいビルが立並び、歩いている人達の服装も可成り垢抜けてきたものです。何より、変わったと思うのはテレビ放送です。私が来星した当時は、白黒からカラーテレビへの買い替えが盛んで、新聞には下取り広告がよく出ていました。白黒の番組もまだ大分ありました。今のアナウンサーは大層ファッションブルですが、その当時は地味な制服のようなものであったと記憶しています。放送時間も短かく、夕方五時頃四ヶ国語で挨拶のあと、ニュースそして、また四ヶ国語でさよなら、それから一時間余してまた放送開始でした。シンガポールで作った番組は、ほとんどなかったように思います。それに“TWO IS ENOUGH”という宣伝（例えば傘に二人しか入れないとか、ケーキを食べられないとか）も、日本から来たばかりの私は、びっくりさせられました。来星当初、日本の二十年前に逆戻りしたような錯覚に陥りましたが、現在急速な進歩を遂げつつあると思います。

こんな風に、十年前のことを思い出しますと全ての面において、今来星される方々は便利で豊かになった時に来られたと思います。しかし、その反面、この快適さに慣れ過ぎてしまっても怖いと思います。ここはあくまでも外国です。

今は目立ちすぎる程多くの日系デパートや食堂があり、日本に居る時と同じような生活ができるようになりました。住居の点から言えば、日本以上の暮らしと言えるでしょう。日本人も多く、友達にもこと欠きません。しかし、いつも心の中に、ここは外国であり、自分達を通して、ここの人達は日本を解するのである。つまり、自分達は誰もが日本の代表であるという自覚がいます。言葉使いや服装などのマナーにも、それなりの気配りが必要だと思います。どこへでもショートパンツとサンダルでは、品性が疑れます。言葉にしても、例え日本語でも解する人が多い国ですから、人中で話す時は注意が要ります。また、私のアパートの親日家の老人が、「この頃来る日本人はシンガポールの住人と挨拶もしない」、と嘆かれるので「日本人は言葉が達者じゃないから」と弁解しましたら、「例えそうであっても、ニコリ微笑めば近所づきあいできるのに」と言われて、耳が痛かったことがあります。日本人の中にばかり居ないで、せめて近所の方と、挨拶位はかわしてほしいものです。

一人一人が、そのふるまいに気をつけて、日星間のいい関係、いい感情を保つようにしていきたいと考えるのです。

思い出す事など

デンカ・シンガポール

吉澤 建

1984年に、何年ぶりかで、シンガポールに降りた私は、空港の素晴らしさにおもわず“ここは東南アジアではなくなった”とつぶやいてしまいました。その後85年に、シンガポールに赴任し、まだ東南アジア的な所がそこ、ここにあるのを知りましたが、東南アではない部分も間違いなく増えています。

先日帰国された三井銀行の阿部前支店長が、日本はとても目まぐるしく、のんびりとしたシンガポールがなつかしいとおっしゃってましたが、私の住んでいるマンションのオーナーは、インドネシア系中国人ですが私と会うと、シンガポールは皆が急いで目まぐるしくていけない、インドネシアののんびりとした生活が懐かしいと話してくれます。この辺に東南ア理解の鍵の一つがあるのかも知れません。

私が1967年から72年迄、バンコックに駐在していた事から、タイとシンガポールとどちらが良いですか、という質問を時々お受けします。TPOで、いろいろなお答えをしています。時には会社の金で投資するならシンガポール、自分の金ならタイですよと煙にまいています。シンガポールの場合には、東南アにままだ非合理的な部分が一番少い事からです。タイは成長期で一攫千金のチャンスもある反面、説明しにくい部分も多いという事から、こんな様にジョークをお話しています。

私がバンコックに駐在していた時のテリトリーは、東南ア、大洋洲、インド大陸という広大な地域でした。シンガポールには年に2/3回はきていました。

その頃、タイらしい風景を苦心して写真をとったら、写っていた自動車がいっぱい日本製だったという別に面白くない小話を小耳にはさんでシンガポールにいきましたら、大通りは、ベンツ、ボルボ、BMW、アルファロメオと

いったヨーロッパ車が中心で、さすがの日本車もシンガポールでは少数派だと感じた事を覚えています。

その頃、ロビンソンデパートは、今の所にはありませんでしたし、オーチャード・イセタンの所にインドネシア大使館があり、その構内の民芸品売場に、時々バティックを買いにいった事を覚えています。

こんな風に思い出しているときりがありませんが、何といたってもシンガポールは20年前より、日本人にとって、住み易い所になりつつあるという事は実感として感じています。



シンガポール—きのう、きょう、あした

西松建設（株）

小林 喜久男

私の職場の近くの、ヴィクトリア・ストリートとノースブリッジ・ロードに挟まれたミドル・ロードの一角に、今にも崩れそうな廃屋の一群が並んでいて、間近に迫った取り壊し作業をひっそりと待っている。この辺は、戦前日本人街があり、あの廃屋の辺は、その昔、からゆきさんのはかない花の咲く所であったそうだ。

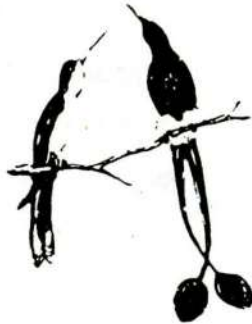
そこから五分も歩くと、土地の人々に、チョブスティック（箸）と呼ばれている記念碑の立つ所に出る。正確には「日本占領時期死難人民記念碑」で、太平洋戦争の初期、日本占領軍によって殺害された数万とも言われる市民の死を悼む碑である。長らく、中華商工会議所の代表による追悼式が毎年二月十五日に行われてきたが、昨年からは、マレー系、インド系、そして、インターナショナルの各商工会議所の合同追悼式になったと聞く。

明治の厳しい国造り期の日本の南洋進出のあだ花としてこの地に散ったからゆきさん、大東亜共栄圏建設の錦の御旗の下に斃れたこの地の人々の死を悼む碑、ともに、日本にとっての「シンガポールのきのう」を刻むものである。

きょうのシンガポールを歩くと、そんなきのうが次第に消え去ろうとしているのに気付く。あの旧日本人街のなごりを留める家並みは間もなく消え去る運命にある。記念碑も今では、周囲のそびえ立つホテルやビルに圧倒され、すっかり影がうすくなってしまった。改めて見回すと、それらの近代的な建物には、くっきりと今日の日本の存在が刻まれている。日本からやって来た私達にとって、これらの建物は当分、きょうのシンガポールのシンボルであり続けるであろう。しかし、日本人にとっての「きのうのシンガポール」を忘れまいと自分に言いきかせ、又次の世代にも伝え度いと思っている。なぜなら、多くのシンガポール人にとって「きのうの日本」はまだ厳然たる事実

として存在しているからである。

シンガポールのあした。多民族多宗教の都市国家シンガポールはこれから、どのような国造りをして行くのだろう。さまざまな青写真がひかれては書き直されているが、最大の課題は、経済の発展と成長をいかに保ち続けるかもさることながら、もう一つの困難なこと、即ち、個の独自性と自由を最大限に保障し、且つ、全体の協調と安定を実現するという千日手に近い課題のように思われる。この全人類的課題に取り組んでいるシンガポールに精一杯の声援をおくりたい。又、「あしたのシンガポール」に「あしたの日本」が、この点でいくらかでも寄与することが出来るように、微力ながら「きょうのシンガポール」で生活したいと思っている。



チャンギー雑想

吉川ケミカルス・シンガポール

安川 一夫

チャギーと云えば、今日では飛行場のことである。しかし私には別な連想がある。

ここの旧兵営や刑務所は戦争中、英・豪・蘭・印の将兵や男女民間人たちの収容所となっていた。

このチャンギー刑務所の門外に小さなミュージアムがあって、その中には俘虜となった連合軍の兵士たちの写真などをみることができる。（これらはある兵士が秘密裏に持込んでいたカメラで撮ったものである）。

私が行ったとき、1台の観光バスが門外に止っており、ミュージアムの中では何十人かの豪洲人と思われる老年の男女がしきりに壁の写真を指さしながら、感慨深か気に話し合っており、別に一部の人たちは椅子に腰を下して、何か物思いに耽っている様子であった。恐らくかつてここに収容されて苦難をなめた人たちのセンチメンタル、ジャーニーのように見受けられた。

先年、私は豪洲のパースに行ったが、この町からバスで北方のレジャーランドへ向う途中、ガイドがこんな話をした。

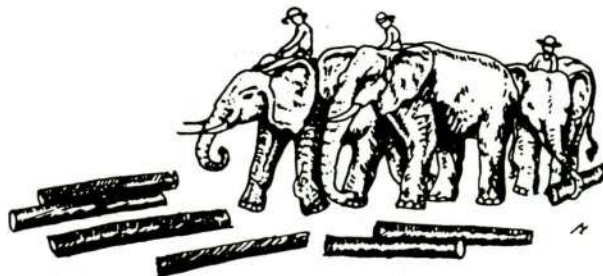
土地のデベロッパーがこの海岸一帯の漁村を買上げて、何十所帯かの漁民たちのために近代的なアパートを作ったが、そのうち2世帯だけが、強硬に入居を拒み、別の土地へ移って行った。理由はこのアパートの建材は入札により、すべて日本から購入されたものであったが、これら2世帯の主人たちはかつてチャンギーで俘虜として虐待と屈辱を受け日本に対し徹底した反感を持っており、100%日本の材料で作った家には、絶対入らぬと頑張ったためと云う。

彼らは日本軍の俘虜として、言語に絶する非人道的な扱いをうけた。これらのことは“*The Knights of Bushido*”その他に残忍な事実が細かく報告されており、こうした過去の不名誉は日本人にとって一大痛恨事というべきであろう。

俘虜虐待については、日本軍が戦陣訓で俘虜になることを恥と教え、俘虜を人間以下のものと下げすんだことに由来する。しかし日本の戦国武士の間では俘虜になることを恥としたり、俘虜をいじめたりする思想はなかった。日本軍は俘虜が敵に情報を洩らすことを防ぐため、俘虜になったら死ぬと教えた。しかし俘虜になった日本兵はもはや日本に戻れないという絶望感の中で、情報をすべて敵に洩してしまっているのである。

日本軍は俘虜になっても決して口を割らない教育を徹底しておけば、俘虜の自殺や機密漏洩の愚かさを防ぐことができたし、敵の俘虜に対し十分な人道的配慮を施すべきことを教えていたら、弱いもののいじめの汚名を彼世に残すことなくすんだであろう。

戦争は既に風化して人びとの話題にものぼることもなくなっている。しかし日本の残した汚点の一つがかったのチャンギにあったことを忘れないようにしたい。



Y子への便り

シンガポールの日本人墓地のこと

太陽誘電シンガポール

牧野 米正

拝啓、何時もこんな平凡な書き出しになってしまいますが、日本はもうすっかり秋も深まって、朝夕、そちら様名町では炬燵が必要とか、季節と一緒に感じられる土地に住んでいた時には何のためらいもなく季語が使えましたが、当地は相変わらず夏ですし、私にとって、初めての、秋を夏として過ごさなければ、と、でも体を感じる実感はやっぱり夏で、一方で、秋の便りを聞くにつけ何か忘れものをした様な、そんな淋しさを感じます。

来星して早四ヶ月余り、当地に着いたら直ぐにでも訪れたいと考えていた日本人墓地のこと、何かと忙しく思いを達する事が出来ませんでした。丁度秋の彼岸の二十四日に、来星して一年半のS君、一カ月余りのA君と三人で出掛けました。S君は約一年前に人に連れられて来たとの事でしたが、すっかり道を忘れていたため、ガイドブックの印から、とにかくP I Eを当トムソン道路からは空港に向って少し走り、セラグリーンロードに下りる為左折をし、一路セラグリーンロードを走って、次にイオチュンカンロードに乗って、少し走って町並みが途絶えたら、道路の左側にあるはずでした。ところが、多分この辺だろうと思った所は、工場造成中の荒地や、刑務所であったり、それ以外は住宅地で、どうもそれらしき気配ではありませんでした。

そこで道行く人に尋ねたり、キャンテーンに飛び込んで聞きもしましたが、皆んなこの辺りでは聞いた事がなくわからないとの事、そんなことで小一時間程さ迷った後、二人目のタクシーの運転手に、どうももっとセラグリーンロード寄りに戻った、且つ、道路の右側だと教えられました。半信半疑でイオチュンカンロードを少し戻り、教えられた所はこの辺りではないかと、フィリップス、アベニユウを左折（正常に来れば右折）、二本あった道のうち、進入禁止ではない方の道を少し行くと、やっと、日本人墓地の入り口がありました。

本当に、やっとの思いで、これも思い立ってから、今度の日曜日とは思いつつ、ついゴルフに誘われると、じゃあ今度の日曜日にと、度々の延期に仏様も怒ってお臍を曲げて、試練の時間を私に与えたようです。

車から一步園内に降り立つと想像していたよりはるかに明るく、此処にもシンガポールの夏の陽射しがさんさんと降り注いでいました。

広々とした園内に、大きな墓標から画一的な小さな墓標まで、日本の墓地を見慣れた目には、どちらかと云うと、ぽつんぽつんと、又、それぞれがひっそりと、淋しそうに、とても九百十基*の墓標が有るとは、思えませんでした。

カラユキさんのお墓が沢山ある所とか、第二次大戦の戦没者が埋葬されている所としか認識がありませんでしたが、随分古くからこの地に、今、我々が企業進出と共に来星して来たのと同様に、無論はるかに悲壮な覚悟で、又一方では夢を抱いて渡ってきて望み半ばで野の露となってしまった人達が沢山眠っているとは、訪ずれる迄は考えもしませんでした。

お堂を墓守さんに開けて貰って、先ず日本から持ってきたお線香を上げさせていただきました。続いて、案内にしたがって大戦時の戦没者、昔、家にあった古い新聞のスクラップブックの中に、密林の中を走る自転車部隊の兵士の勇姿が思い出され、当時の華やかな戦争鼓舞のニュースの、決して表面に出ていなかった悲惨な部分を、今、つけとして突きつけられた思いがしました。

戦犯として、当地で処刑、埋葬された百三十五人の人々、それぞれの理由はわかりませんがそれぞれに使命感とか義務感とか、思いと異なる結果ではなかった事と、それにしても昭和二十一年三月から二十三年四月の長き年月がその亡くなられた方々の日から数えられますが、宣告する側、宣告される側に、それぞれ多くの苦しみがあったことと、察せられます。

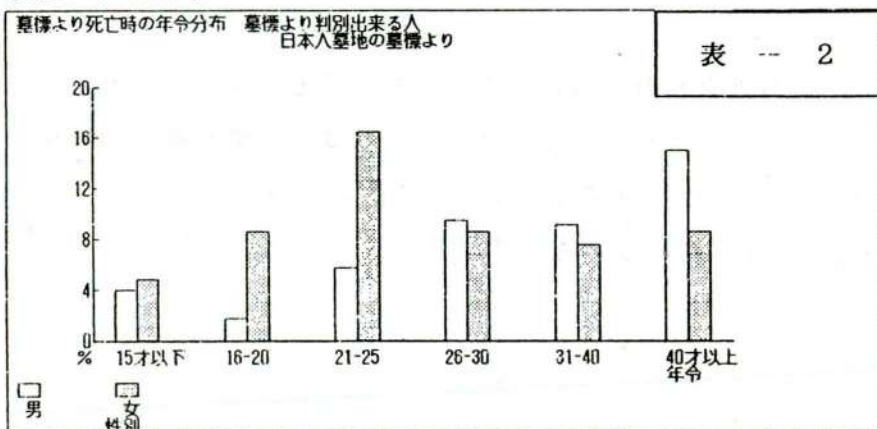
寺内元帥、二葉亭四迷終焉の碑へと案内は進みますが、先程から画一的な小さな墓標の群れが気になって仕方がありません。此等の墓標がカラユキさん達のものだろうか、それにしても随分沢山の数と思い、後で求めた「シンガポール日本人墓地」(シンガポール日本人会刊)を基にして、次の様な分

析をしてみました。もとより浅学な小生ですので、判読ミスがあって、上記書と基礎数字が異なってしまいましたが、大本の傾向はわかると思いますので、以下述べます。

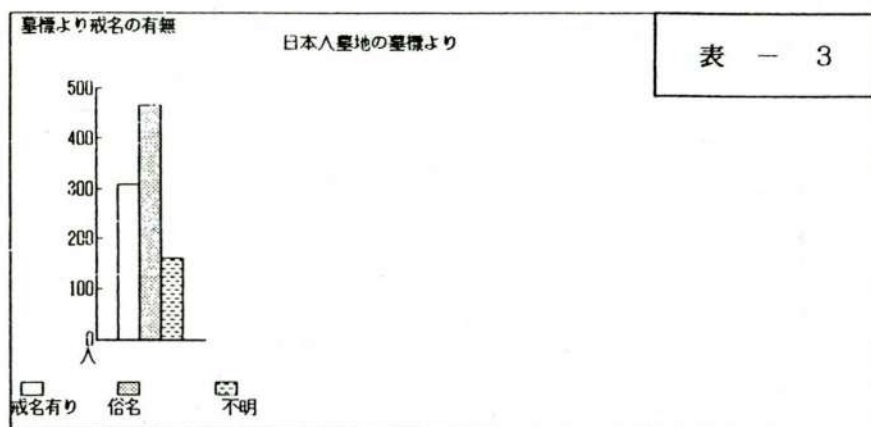
まず、別紙表-1ですが、カラユキさん（男性もいたらいいが）を想定して墓碑銘から男女比率を調べたものです。男女ほぼ半数に近い形になっています。全部が全部カラユキさんではないことはわかりますが、想像以上に女性達が多かったのがわかります。



次に一步踏み込んで、カラユキさん＝若い女性との発想で、同じく墓碑銘から亡くなられた年令分布を男女別に調べたものが表-2です。表から二十一才から二十五才の女性が多いのがわかります。前後の十六才以上と、三十才迄を含めると、この年代で大部分を占めてしまいます。それにしても、随分早死にされた事と、当時の栄養状態、衛生条件、苛酷な環境等で当地で何年も生きられなかったのだと、それが、むしろ彼女達にとって幸いだったのか、とも思われます。



表一3は墓碑銘の戒名表示の有無を調べたもので、やはり俗名表示の墓碑が多いのがわかります。宗教的に深くその戒名の意味が良くわかりませんが、戒名を付けて載いて初めて仏様の仲間入りだと意味付けするなら、今此等の人々は何処をさ迷っているのでしょうか。でも、まだ墓碑銘の残っている人々は良い方だとおもいます。当時のことですからこの墓地以外に埋葬されて無縁仏になった人も多かったのではなかったと、思いが深まります。



此等墓碑の事に最後にもう一度触れると、明治時代のものが多く有ることも資料からもわかりますが、開戦迄の年月を考えると、必ずしも明治時代に渡星した人が多いとは考えられません。明治の人達が仲間の為に多く墓標を建てたのではないかと、明治の人の優しさの様な気がします。

同じこのシンガポールに来て働いている我々、ある面では今最も恵まれている国に来て居て、でも色々な不満等が人々の心の中に出てきています。

当時の人々の苦勞を偲びつつ、今一度、私達の生活を振り返ってみたいと思いました。

最後に、此の園を離れる時、ふと傍らを見ると、鮮やかなピンクの花と薄いピンクの花が咲き乱れていました。その花はどうやら雄花と雌花のようで、墓標群の中にも寄り添う様に立っている墓標が幾つもありました。

同封の写真はその時写したもので、墓守さんがその名を

〔眠り花〕

と、教えてくれました。

朝晩の寒さに風邪など引きませんように。

敬具

引用文献「シンガポール日本人墓地」シンガポール日本人会刊



骨肉茶屋の思い出

新日本製鉄シンガポール事務所

北野 秀樹

骨肉茶（バクテー）は知る人ぞ知るシンガポールの代表料理の一つだ。

かつて、ニュー・ワールド、パークにあった骨肉茶屋は私にとって思い出の場所だ。此処は当地の鉄鋼問屋が多く集まるラベンダー通りに近接することもある。以前出張の折などよく朝食に招待されたものだ。初めてその店に行ったのは約7年前だが、その時の光景は今も忘れない。

トタン塀で囲まれた店先には、旦那衆、番頭衆の高級車が並び、これがまず異様。店に入ると、ランニングシャツ、半ズボンの店のオヤジ、擦り切れた中国服のオバサンが愛想もなく給仕する姿も当時の私にはめずらしかったが、運ばれてきた料理は朝飯のイメージを完全に覆えすものであった。

豚の骨付肉スープは、事前に聞いていたこともあり、これは良いとしても、部分不明の臓物、耳、尻尾などが荒々しく給仕された時には多少のたじろぎを覚えたものであった。大事なお客様の手前、何とが平然をよそおいながら意を決して箸をとったが、これが何と予期に反し、スムーズに胃に収まり、スープなどは何杯もお替りまでお願いすることになり、シンガポール華僑のバイタリテーの源はこれかも知れないと勝手に感心させられたりしたものだ。

この骨肉茶屋は数年前に移転して昔の場所には既にはない。時の流れの偶然であろうか、この頃を境にシンガポール華僑の方々との商売環境も多少変わってきたように思える。

まず長年お付き合いをさせてもらった華僑の人々の世代交代であろう、第二世代はやはり何ととってもドライで合理的だ。『昔からの長い友好関係を考えて』という、かつての殺し文句は段々と通用し難くなってきた。

もう一つは、シンガポールの工業化が進む中で、日本から、工業製品資材用の鉄鋼製品の輸出が極めて順調に伸びているわけだが、一方では、従来華

僑の間屋さん経由大量に買い上げいただいていた建設土木資材用の製品は相対的に減少傾向にあることも現実だ。

今後、当国は美しい近代工業国家として益々発展してゆくであろうと思われるが、華僑第二世代がやはりその主役として伝統の逞しさを発揮してゆくことであろう。骨肉茶朝食ミーティングは、忘れ難くなつかしい思い出として心に留めておくべきことであるのだろう。



海峡ドルの思い出

IHI MARINE ENGINEERING

阿部 典文

シンガポールで現在使われている紙幣はいわゆる“船”シリーズと呼ばれ、最近発行された5ドル紙幣を加え7種類が流通しています。

この中の1000ドル紙幣の裏面のモチーフとして船舶修繕工場が用いられていますが、この工場の建設が私をシンガポールに結びつける切っ掛けとなったものです。

この工場の名前はJURONG SHIPYARD、26年前にシンガポール政府との合併企業として設立されたものですが当時のシンガポールはまだ英国の植民地であり海峡ドルと呼ばれたポンドとリンクした通貨が使用されていました。1965年に独立したシンガポールは独立国としての必須要件すなわち自国通貨を1967年に発行しましたがその紙幣は“ラン”シリーズと呼ばれ従来の海峡ドルも近隣諸国の紙幣に比較してカラフルでありそのデザインの新しさは新生国家に相応したものとなっていました。勿論新旧両通貨はしばらく並存して流通していました。ところが新通貨発行后しばらくして土地の人々の間に新通貨は危い……すなわち新生国家の貨幣価値維持能力に対しての疑問が囁かれはじめました。当時庶民はタンス預金を常としていた為噂が広まると共にポンドとリンクし安全と考へられた海峡ドルを手元に残しシンガポール・ドルを競って放出することに努めた次第です。例えば買物する時支払を海峡ドルで求め釣銭をシンガポール・ドルで返すことが流行しました。

この様に金銭に対し過剰とも云える反応を示したシンガポーリアンに対し晴天の霹靂とも云うべき事態が発生しました。それは1967年11月18日のポンドの14.3%に及ぶ幣価切下げ発表です。信頼していた旧宗主国の、しかも国際基準通貨がかくも大巾に切下げられるとは……、それからしばらくの間ストレート・タイムスの社会面には海峡ドルをタンス預金として

いた庶民の被害状況が実名入りで報道され、そして銀行に預金することがいかに安全であるかがその反面教師として連日宣伝された次第です。

以上の経験は私にとっていつまでも新鮮さを失わない出来事であり 1 ドル 360 円と云う終戦後長く続いた固定為替レートに対しての疑問……すなわち私の如き技術教育を受けて来た人間に実地の経済学への開眼を求めた出来事として終生忘れることが出来ない思い出となっています。

海峽ドルからの独立を果たしたシンガポールドルはその最初の通貨“ラン”シリーズ及び 2 代目の“鳥”シリーズを経て現在の“船”シリーズへと移行していますがこの間のシンガポール経済の発展は目覚しくシンガポールドルの強力な地盤を今日見るにつけシンガポール独立時の国の苦悩を物語る 1 つのエピソードとして以上の話題を記した次第です。



SF シンガポールのあした

ソニー・インターナショナル(シンガポール)

下津 輝八洲

1990年8月、シンガポール政府と、インドネシア政府は、インドネシア土地利用条約を締結した。インドネシアの広大な島々を土地の狭いシンガポールに提供し、両国の経済発展に寄与しようというものである。

89年6月の天安門事件以来、香港の人々の国外流出は増え続け、シンガポールとしても、香港人の受入れを真剣に考慮し、従来の領土では対応しきれないとみて、インドネシア政府と協議、まれに見る短期間の締結となったわけである。

広大な島を利用することにより、知的労働者だけでなく、一般労働者の受入れも可能になり、インドネシア自体持っていた豊富な労働力と共に、サボーティング・インダストリー（部品産業）が、インドネシアの提供した、インダストリアル・アイランドで発展した。無論、リゾート・エリアとして発展するリゾート・アイランドもあり、シンガポリアンに、新しいエンターテインメントを与えてくれた。一方、インダストリアル・アイランドの経済力は、台湾の経済力と呼応して、香港を通じ、中国本土の経済活性化も寄与した。中国本土の経済活性化は、政治面にも影響を及ぼし、2010年には香港は特別自治区として扱われ、自由港としての機能を復活した。1997年に中国への返還が為されて以来、北京政府は、香港の洗脳を図ったが、経済力は、逆に中国の政治家達を洗脳し、自由港としての香港が再び、成立したのである。イデオロギーよりも、豊かさを求める人間の本能は、中国に於ても、変わらず、あの頑迷な北京政府をして、洗脳させた大きな要因は、シンガポール、インドネシアの2国間協定によるASEAN諸国の経済発展にあると、大かたの歴史家の史観である。

さて、本年2010年は、シンガポール建国45周年にあたり、日本のH-Vロケットを用いて、シンガポールに提供された土地の発射台から、初の、しかし、世界最大の通信衛星が打上げられる。

この衛星は、アセアン諸国、中国、インドシナ半島の国々が共同利用できるものである。

古き良いものへの憧れ

ヤオハン・シンガポール社

鹿倉 幸安

現代は多種多様の情報が入り乱れ、特にファッションは刻々と変化する時代になって来ている。より自由で豊かなそれぞれの感性がその高感度性を生み出し、この語らいも若いシンガポリアンの間で街のいたる所で聞け、デパート、専門店はそうした人々のファッション・センスを更に促進している様である。

私の来星した約7年前はマレー系の女性はバジュークロン、インド系の女性はサリー、中国系の女性はチャイナドレス（ゴム製のサンダルに白色のブラウス、Tシャツに黒や紺色のスカート姿も多かったが）を着た女性達を多く見かけ、それはトラディショナルな雰囲気醸し出し、私たちの目を楽しませてくれた。残念な事に今それは一部のレストランでしか見る事が出来なくなった。

時の流れの中でシンガポール女性のファッションも大きく変革をした。最近では超ミニスカート、大胆なタンクトップにきらびやかな装飾品を身につけ、パンティーストッキングをはき、化粧もたっぷりし、ハイヒールを履いたセクシーな女性がさっそうと街を歩いている。これも男性の目を楽しませてくれる事には違いないが・・・・・・。

先日、日本人小学校で開催された子供達の学習発表会を見て一つの感動に出会った。それはふだんではなかなか見る事の出来ないゆかたの着物姿で美しい日本語を使い素晴らしい演技の劇を披露してくれた。

地球規模でファッションが至る所にはびこっていく中でけっして機能的ではないかもしれないが各国の素晴らしいトラディショナル・コスティウムの文化が霞んでいき、やがて忘れられていく様な気がして淋しい。しかし、それはシンガポールでなく日本に向って声を大にして言う事かもしれない。

2 シンガポール・リアンとのふれあい

1) 関西テレビ放送	(薩摩 逸雄)	47
2) 丸紅シンガポール支店	(土谷 逸郎)	48
3) コニカ・シンガポール	(齊藤 知久)	50
4) デロイト・ハスキング・アンド・セルズ	(岡田 昌光)	53
5) JVC エレクトロニクス・シンガポール (株)	(村田 陸生)	55
6) 日商岩井 (株) シンガポール支店	(舟橋 正義)	57
7) 三井銀行シンガポール支店	(笹島 章弘)	60

セイネン
盛年 重ねて来たらず

関西テレビ放送

薩摩 逸雄

シンガポール日本商工会議所開設20周年を祝すと共に、ラレビ特派員として、当地に滞在するも、何かの合縁奇縁と言わなければならないでせう。

幼年時代にD. D. T.の洗礼をうけ人にも、おやじの玉の中にいた人にも、過去のキズ後は大きいと考えなければならないでせう。海外企業戦士57万人を越えたと言われる中に、教科書問題など氷山の一角に過ぎず、二世、三世の留学生、研修生を日本国内に受け入れに反対する後遺症は言葉に表せられない一面がある。又、東南アジアの取材を通じて、ピエンチャン浅尾さん事件、バンコック新婚さん・竹田さんの両殺人事件、シンガポールのグラン殺人事件、タングリン脅迫事件など、大小を問わず、社会記事にもリポート出来ない背景が、常に同居しているでせう。滞在者各自一人一人が平和主義者・愛国心を云々するのでもないが、日本旅券を所有する限り、常に謙虚な気持で、自己を見つめる位置に立たねばならない。シンガポールを訪問する人達が100万人に達するのにも近いと云われる中で、グループ旅行の傍若無人ぶりや、本人達は日本にいるときよりも気をつけて振る舞いをしているつもりでも、価値観や生活習慣の異なるシンガポリアンには、厳しく評価される金満日本の新しい一面が、短期旅行の一過性と形づけられないことに、直面している今日この頃であり、日本人旅行者の国際的感覚を早期に改善すべき時期に来ているでせう。

過去の先輩諸氏の苦悩が、今日の糧となり、明日への希望の火となる中で、シンガポールと言えば、N I E Sの国で、ショッピングの街と国内評価されている。企業発展のみ考えられている経済思考にも、東南アジア諸国を理解する第一歩として、シンガポールの文化・風情にふれ、相互文化交流が、新しい東風となり、試行錯誤を重ねながら、シンガポールに溶け込もうと努力をし体験れきた実績が、企業の壁を越えてシンガポール社会に日本カルチャーの理解と日本国内にシンガポールの真の感性を相互に広まれば盛年重ねて来らずの時期に25周年、30周年にも、更に50周年にも銘記すべきシンガポール日本商工会議所の実績として、シンガポール社会に貢献するでせう。今その変革期に来ているのではないでせうか！

シンガポール—きのう・きょう・あした

丸紅シンガポール支店

土谷 逸郎

思いがけずシンガポール勤務の辞令を受取り、去る3月1日夕焼けの美しいチャンギ空港へ降り立って以来早や8ヶ月になる。

15年振りの海外生活にやっと公私共に慣れて来た新米“星チョン”が少に気になっていることを書いてみる。

それは、日本人が何かと固まって生活するということ。

着任早々、一日も早くシンガポールと英語に慣れるべくあちこちのセミナーに参加したが、その一つで日本人の地域社会に解け込まない典型例として次のようなことを聞いた。というのは、ある高級アパートのテニスコートは、日頃日本人の奥様方に占領されんばかりで愛好者が多いのだが、そのアパートのコミティーが友好親善の為にテニス大会を催したところ、出場したのは殆んどいわゆる西洋人とシンガポリアンばかりで、日本人は皆無に近かった由。

今一つはゴルフ。

金曜日の午後のS I C Cの次週末予約の受付風景ではないが、ここでも日本人がゴルフ場を占領せんばかりである。ゴルフ大好き、特にコンペ大好きなのが気になる。日本でなら、年2回が精々のコンペでも、ここでは2ヶ月に一度位同じ仲間が集まって日本人だけでやっている。

又、最近タナメラ・ゴルフクラブから、特定の外国人（もちろん日本人）の比率が一定限度に達した事実が公表されたとメンバーの方から聞いた。

テニスにしろ、ゴルフにしろ我々にとって当シンガポールライフの大きな魅力、楽しみの一つで、誰しも気の合った人同士で、気兼ね無くワイワイやってるのが一番だが、やはりここは日本ではないこと、昔と違い日本人の絶対数が増えていることを、お互いに少しずつ気を付けねばと感じる次第。

日本人旅行者のことが、ショッピングのみに熱心で、歴史も人情も風物も

何も吸収しようともせず帰ってゆくといわれるが、駐在員の私もうっかりすると、これら旅行者の如く会社とゴルフ場と日本食レストランとカラオケバーで、日本人としか親しくつき合わずに任期到来ということになりかねない。折角のチャンスであるから、この社会に解け込んで一人でも多くのシンガポールの友人をつくりたいと思っている。手始めにディーパ・バリが近づいたリトルインディア探索にカメラをさげて行ってみよう。



Shichifukujin, seven gods of good fortune

シンガポールの柔道仲間達

コニカ・シンガポール

斉藤 知久

シンガポールに、赴任してまもなく私の恩師である清水正一先生（元全日本学生柔道連盟会長）から連絡があり、シンガポール柔道協会会長のムースリー先生に挨拶に行くように、との事である。赴任したばかりで多忙な日々であったが、恩師からの依頼なので断われない。又清水先生は、常々学生達が卒業するたびに時間があったら大学に稽古に帰ってくるというのはダメだ。時間を作って、帰ってこいとおっしゃっていたのを思いだした。そういう訳で、時間を作って、シンガポール柔道協会の道場にムースリー先生を訪ねた。道場では、松浦さん（帰国）池井さん（ニューオータニ総支配人）山下さん（日立造船）の3人の日本人が、先頭に立って。稽古をしていた。皆、多忙の中、時間を作って柔道の普及と自らの鍛練の為に汗を流しているのだ。柔道は、気軽に楽しめるスポーツではない。日頃充分に、体を鍛えておかないと、即、事故につながる危険さもある。そういう意味で、けっして若くはない3人（失礼）が、一生懸命、稽古に、指導に、あたっている姿を見て胸を打たれた。私は、大学卒業後、柔道連盟の紹介でアメリカの大学に2年間留学する機会があった。勉強は、さて置いて柔道の指導は、大学、高校等、自分なりに努力したつもりである。生徒もオリンピックに出場するレベルまで育った。日本に帰国後は、アメリカ大使館で、月に1～2度、稽古していた事を、除けば、ほとんど柔道界からは、遠ざかっていた。しかし3人の日本人が一生懸命、暑い道場で、（シンガポールでは柔道着を、着ただけで、汗だくになる）指導している姿を見て、自分もやらなければいけないと、使命感みたいな物が湧いてきた。かくして私のシンガポールでの、柔道が始まった。シンガポールの道場で汗を流して早2年が過ぎた。今年からは、日本武道大学を卒業したばかりの横瀬コーチ（久保金属勤務）と、京大で主将として、活躍した光井コーチ（三菱銀行勤務）の強力な助人が、加わり賑やか

になった。8月にマレーシアで、開催された東南アジア・スポーツ大会では、現役の横瀬コーチを筆頭に、日本人がシンガポールのコーチと手を取りあって、強化練習に励んだ。日本からも私の兄弟子にあたる安藤先生（現慶応大学助教授）も、応援にかけつけてくれた。生徒達も、我々の期待に充分こたえてくれた。結果は軽量級出場のオン選手、軽中量級出場のタン選手がそれぞれ金メダル。重量級無差別級出場のホー選手が、銀メダル2個。女子の部中量級出場のリム選手が銅メダルを獲得した。多いに盛り上がった大会であったが、残念な事が一つあった。日本から試合を見に来ていた柔道界のリーダー的な人が新聞記者の東南アジアの柔道に対してどう思うか？の質問に対して、この大会は、審判も選手も、レベルが低いとコメントした事だ。次の日の新聞に、この事が大きく報道され関係者は、大変憤慨してい様だ。東南アジアは、経済に於いても、スポーツに、於いても途上国である。しかし一生懸命努力している人達に、指導的立場にある人がレベルが低いの一言で、済まして良いのであろうか。会社でも同じだと思うがシンガポールの日本人は、指導的立場にいる人が多いと思う。文化、習慣の違いをのりこえて、時には、とまどい、時には、いらだち、それでも皆、一生懸命ローカル・スタッフの育成に努力していると思う。日本から短期間きて批判だけして帰る人が、どこの世界にもいる。そのたびにその国に住む日本人がつらい思いをする。それぞれの国にそれぞれの文化があり習慣がある。その異なる文化習慣を理解する器量を持ちたいと思う。幸いシンガポールの柔道仲間は、気の良い者ばかりである。学生もいる。銀行員も工場の人もある。いろんな職業の人が、畳の上で汗を流している。決して楽ではない稽古が終り、時には、近くのキャンティーンでビールを飲みながら皆で“ワイワイ”“がやがや”やる事がある。

そこには、人種も職業もない。ただ一緒に、畳の上で汗を流した者同志のみが、理解しうる楽しい時間である。やがて彼等が、さらに成長して世界に羽搏く時、いつも日本に対して、暖かい理解を表わしてくれると思う。互いが、切磋琢磨して、共に栄える事が、柔道の修業の道である事を彼等は、理解しているからだ。シンガポールで、仕事をさせて、頂だいている私も、今一度、

その事を思い起こしたい。精力善用、自他共栄、嘉納治五郎師範の言葉である。柔道を通じて、シンガポールのスポーツに微力ながら貢献できる事を、幸に思う。



シンガポール柔道ナショナルチーム（東南アジアスポーツ大会）

後列左より ホー選手 無差別級 重量級 銀メダル

リム選手 同女子の部中量級 銅メダル

オン選手 同軽量級 金メダル

タン選手 同軽中量級 金メダル

前列左より 横瀬コーチ（武道大卒、久保金属勤務）筆者、タン、ナショナルチームコーチ

池井コーチ（ホテルニューオータニ総支配人）

シンガポール—きのう、きょう、あした

デロイト・ハスキンス・アンド・セルズ

岡田 昌光

MARK CHOW WAI SHUEN (マーク君)^{サトル}に知(私共の長男・大学1年在学中)は、今年の8月、4年振りにシンガポールで会いました。マーク君と知とが、初めて会ったのは知が日本人学校中学部2年の時でした。ホームステイプログラムを通じて知はマーク君の家に泊まり、マーク君一家(父親は紳士服仕立屋を営み、母親も父親を助けて一緒に働いています。妹が一人あり、親子4人家族)と寝食を共にし、マーク君と"アングロ・チャイニーズ・スクール"に通いました。忘れ得ぬ経験をした様でした。私共も何回か、マーク君一家と食事をしたり、マーク君を私共の自宅に招待したりして、友情を深めました。知は帰国後も文通をしておりお互いの近況を確認し合っていた様でした。



そして知は4年振りのマーク君との再会で(写真参照)話は弾み、マーク君はもっと日本語を習得し、日本留学の夢を果したいと熱っぽく話しをしたそうです。マーク君は現在兵役についており、兵役が終り次第シンガポール大学に進学することになっていると聞いて来ました。

マーク君の父親が、マーク君は仕立屋を継ぎたくないことを知って、がっかりしていた様子を思い出します。マーク君と知とが将来どの様な途を選んで行こうとも、2人の心の途は同じ途の様に思います。私共はこの若い青年達がそれぞれの仕事を通じ、何らかの形でシンガポールと日本とのそして出来ることなら、東南アジアでの友好のために、それぞれの力を精一杯発揮して呉れるものと夢を託しております。



キャンプに参加して

JVC エレクトロニクス・シンガポール㈱

村田 陸生

早いもので来星して三年目を向え、毎日の喧噪の中で時間が過ぎていっているが、つきあいが長くなるにつれて若い人の気持が理解出来るようになってきた。



現在、当社では他の会社と同様にコミュニケーションを活性化するためリレーション委員会を作っている。メンバーは各部門より選出し20名程度で運営している。費用の面では自主性を図る意味でもわずかではあるがその都度会費を集めるようにしている。

その年間計画の中での楽しみの1つに野外でのキャンプの行事がある。日程的にも日本的にギッシリというものでなく、ほどほどに組まれているのがいかにも当地らしい。昨年はイースト・コーストで2日間で行ったが今年はローカルからの強い要望もあり、10月末の3連休を使いチャンギ空港に近いパサ・リス・リゾートで実施した。

冬のキャンプは日本では考えられないが、450名が海辺に面したUDMCのテラス風バンガローで寝食を共にしてみると開放感と独特のファミリーム

ードになり、それなりの味わいを感じることが出来た。スコールの中のローカルとのソフトボール、5時間に渡るディスコ、連日のバーベキュー等全員参加の日本人出向者との一体感も例年も上回った。

日頃の運動不足の解消と仕事を通じてだけでは味わえない素直なふれあいがあり、それは各々の表情の中からも窺えた。



文化の違いは変えようもないが場を与え、共感を得る機会は、これからも必要であり心しておかねばならないと感じている。

しつけが云々される当地ではあるが帰りを前にしての整理整頓を手ぎわ良く処理しているメンバーを見ていると、日常の生活の中でも段々と向上していること実感した。

シンガポール—きのう、きょう、あした

日商岩井(株)シンガポール支店

舟橋 正義

シンガポールに住んでいると、いろんな国の人たちに出合うチャンスが非常に多い。声をかければ簡単に知り合いになれる。

ある時、業界のカクテル・パーティーの帰り道、何人かが集まってオーチャード通りに面した、とあるホテルのテラスで一杯やることになった。いつも流行っている店なので相席になった。丸テーブルに付いて互に声をかけ合っ
て気が付いたが、そのテーブルには星、日、米、英、豪と国際的な顔ぶれで、まさに5カ国円卓会談となった。さすがに国際都市だけあって、このような光景はごく日常的なものだと思う。折しも、そこへ日本人の観光客を乗せた大型バスが着き、話題が日本人のことになった。皆、異口同音に言うことにはここ数年来、当地における日本人のプレゼンス（存在）は実に目覚ましいと言うのだ。



実際、ホテル、レストラン、ゴルフ場、デパート、ナイトクラブ、至る処で今多くの日本人に出会う。それもその筈、800社以上と言われる日系企業の進出で、2万人を超える日本人駐在員とその家族、そして年間100万人と言われる日本からの出張者や観光客がこの狭い国で忙しく動いていると言う。こうした日本人のほとんどは現在、この国際都市の中でほぼ満足な滞在を送っているに違いない。今や日本人というだけで不愉快な思いをしたということを経験したことはない。それどころか行先ざきで日本人は結構歓迎され、もてることが多いと聞く。ただ、捻た言い方をすれば日本人であるというだけで今や、皆お金持ちに見えるらしく、商売熱心なシンガポリアンにうまくのせられている節もあるが。とは言え、事実、今やシンガポールは日本経済の潤いを十分エンジョイしていると思う。その辺はシンガポリアンも良く理解されていて、少し位の日ざわりより自分たちの生活向上が大切ということで我慢もできているのだろう。又、政府もリー・クアヌー首相をはじめ、「日本に学ぼう！」と国民に訴え、政策的に日本人を“賛美”しているようでもある。実に幸せなムードに酔っていた時、隣のテーブルからビールの差し入れがあり、廻りの人たちも会話の輪に加わってきた。

その中に日系企業に働いているというシンガポリアンがいて、頻りに「自分は日系企業のバイタリティが好きだ！」と強調しながら、同時に「自分たちをもっと信用して仕事を任せて欲しい！」と、それはまじめな顔付きで話し掛けてきた。現実、シンガポリアンの中には、いい日本人の上司を持ったOLなどには「日系企業、好きヨ！」という人も結構多いが、一般に学歴の高い、やる気のある人ほど日系企業に対する不評が多いようだ。原稿枚数の都合で会話の一部始終は書けないが、廻りに集まった人たちの率直な胸の内は概ね次のようなものだった。

「支店長が日本人なのは仕方ないとしても、もっと自分たちもブチョウ、カチョウに起用して欲しい」、欧米系企業では支店長も現地人を起用しているところもあり、そうなれば仕事のやり甲斐も出てくるという内容のものだ。或は現地人がいなければ何もできないという仕事もあるのに、日系企業は「働かせてあげている」というような気持ちしか持っていないという不満、或は

「日本の会社は責任者以下、日本人スタッフが頻繁に変わるの、仕事の面でも、人間的な面でも折角理解し合えるようになったかと思うと、すぐ帰国してしまう」とか、「日本人スタッフはいつも日本（本社）に目を向けているが、もっと腰を落ち着けて欲しい」ということなのだ。

この古くて新しい問題は今後も各方面で議論が続けられることと思う。自分自身がその立場になると本質がよく見えてくるものだが、誰しも自分が気に入ったところで、気心が合った人たちと思い切りいい仕事をし、適切な報酬と地位を得たいと望むのは日本人も欧米人もシンガポリアンも同じだと思う。今、シンガポリアンの若い力は過去の暗い戦争の歴史の溝を埋めようとし、日本や日本人を一生懸命理解しようとしていることは事実だ。ここに住む私たち日本人もためらってはいけないうらう。

ここ国際都市シンガポールにはさらに多くの国の人たちが集まりつつある。その中でも特に日本人や韓国人など、新しいアジアの時代をつくる人波が押し寄せてきている。シンガポールの若者と接しながら、何とか彼ら仲間たちの真剣な胸の内を分かってあげたいと思う今日この頃である。



「シンガポール人の労働意欲」

三井銀行シンガポール支店

笹島 章弘

私は、職業柄日系のお取引先の総務ご担当の方と話をする機会が多いが、その際、度々話題にのぼるのが、シンガポール人の労働意識である。ところが、その意見が、シンガポール人は真面目で、責任感も強く日本人よりも余程よく働くという最高級の評価を与えるものと、逆に、責任感がなく、一から十まで日本人がチェックしないと、何も任せられないというものに、大きく分かれてしまうのは、どうしてだろうか。

実のところ、私も少し前までは後者に近い考えであったが、最近考えを改めた経緯をお話をさせていただくと共に、出過ぎた立場ながら、今後の日系企業とシンガポール人との関係について、私なりの考えをご披露させていただきたいと思う。

そのきっかけの一つは、先日シンガポール大学の日本研究学科の女学生達と話をする機会を得たことである。私達日本人の学生時代とは比べものにならない位、純粋な彼女たちの希望する職業は、責任を与えられ、自分の能力を高めることができるものというのが、第一の条件であった。もちろん、彼女たちは、一部のエリート候補生であるということを割引かなければならないとは思いますが、一般的に言っても、若い人達の自分を向上させ、責任のあるポストに就きたいという意欲は非常に強いと思う。日本人のように会社への強い帰属意識は持たないものの、責任のある仕事をしたいという意識は、日本人と同様あるいは、それ以上に強いのではないかと、学生達と話してから、私は強く感じているのである。

JOB HOPPINGをする人の相当数も、同様の考えに基づいているのだろう。先日、転職を三回経験している家内の友達にその理由を聞いたところ、答は、「前の職場では、ボスにも給料にも不満はなかったけれど、もう覚えることがなくなってしまったから別の仕事に変わりたいかった」というものであ

った。JOB HOPPINGの理由は必ずしも給料の高低でなく、特に、優秀な人材ほど仕事の内容に対する不満によるものではないかと私は思う。

現在、当地労働市場における日系企業の比重は、非常に大きなものとなっており、シンガポール人の人材が、日系企業間で移動することも少なくない。従って今後、私達日系企業が、この地に本当の意味で根付くためには、シンガポール人を各個別企業の労働力としてのみ考えるのではなく、日系企業全体として、シンガポール人の能力を一層高めることに協力するのだという意識が必要だと思う。すなわち、企業としては、「どうせすぐやめてしまうから……」という考えでなく、各人の能力を見極めつつ、その向上に協力できる様な仕事を与えることが必要だと思うのである。また、このことが社員の定着にも結びつく可能性も高いのではないだろうか。当地日系企業に働くものとして私も少しでもお役に立てればと思う。

この拙文をお読みになる方々には、人事の専門家の方も多いと思われ、この様なことは百も承知である。あるいは、全く見当違いだとおっしゃる方もあると思いますが、私の率直な意見とご理解いただき、今後ともご指導お願い申し上げます。

福

3. シンガポールでの楽しみ (パート1)

1) 伊藤忠商事 (株)	(村田 隆史)	62
2) DBS Bank	(山下 重美)	64
3) 等松青木監査法人 / TOUCHE ROSS	(高山 宜門)	67
4) 東京海上火災保険 (株)	(細田 秀之)	69
5) (匿名希望)	(1日本人企業経営者より)	71
6) HITACHI ELECTRONIC DEVICES (S) PTE LTD	(松崎 修)	73
7) 長谷川香料株式会社	(畑江 成郎)	75
8) MIURA & ASSOCIATES M.C. PTE LTD	(三浦 港治)	77
9) シンガポール松下モータ (株)	(平松 徹)	79
10) 日本石油アジア	(吉岡 亮平)	82
11) 北海道拓殖銀行	(小松 寛)	83

美しすぎる自然

伊藤忠商事(株)

村田 隆史

シンガポール人の家庭に招かれた。甥の満1才の誕生パーティだと云う。驚いたことに一堂に会した両親、兄、兄嫁、叔母たちそれぞれに話す言葉が違っていた。母親は英語も北京語も話せず娘が兄嫁の海南語を潮州語に変えて伝えていた。

三〜四種類の言葉が交錯する中で和気あいあいに行き来が始まりメイン・イベントのケーキカットがあった。1才の子供は祖母の言葉、母親の言葉、我々の話す英語で誕生日の祝福を受けていた。この一つの家族内で「多国籍」を見た感じだった。

将来この子が成長してゆく過程で言語、教育、結婚等の人生における大きな選択にこうした言葉一つにもあらわれる文化の違いがどう影響してゆくのか大いに興味のあるところだ。

新しいHDBのアパートに住み、外見はますます西洋化の方向に進みつつも、内では先祖を祀り、暦に従ってとり行われる行事や習慣にも幼い子供達を参加させている。そうした点では独自に民族文化の保存に懸命な努力が行われていると云えよう。

十年前にもシンガポールを訪れたことのある人達は街のすさまじい変化に全く驚かされる。中華街をはじめまだ街の処々に残っている古い建物の多くは何れ取壊される運命にあるという。そして近代的なビルへと建替えられまたまた美しい街として再デビューする。

こうしたたゆまぬ街づくりはこれからも続けられてゆくに違いない。

自然というものは手を入れないでいてこそ自然である筈だが、この国では自然とは造られた自然を意味している。自然に接したいならば公園に行けば良いと人は云う。そこには人工化された自然が整然たる管理の下で「ここが自然である」という顔付きで我々を迎えてくれる。

旅行者は一様に青々と繁る街路樹や建物と緑の驚くべき調和に賞讃の言葉を発する。ところがこの地で暫らく住んでいる外国人は最初の感激が薄れ、何か本当の自然に接したい気持ちにかられる。

舗装していない田舎道を歩きたい――。手の加えられていない野原で思い切り深呼吸をしてみたい――とか。

シンガポールの街づくりは経済発展のためのインフラとして重要な役割を果たして来た。今後もその重要性は変えることは無いだろう。またシンガポールを目指し追いつこうとする他のアセアン諸国にとっても、この水準に到達するにはまだかなりの年月を必要とするだろう。

こうしたすばらしい環境の中で少しでも不満をのべれば「何という贅沢を!」とお叱りを受けるに違いない。

しかしこのあまりにも美しい街づくりは一体どのあたりで終止符が打たれるのか、そして人々の間から真の意味での自然化へのUターンがうたわれるのは何時だろうか？



TORO, stone lantern

シンガポール空の散歩

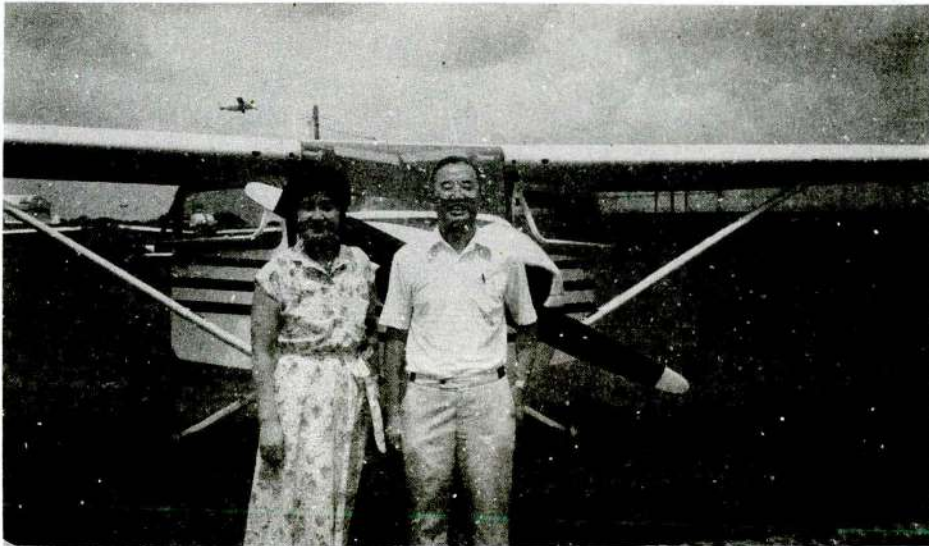
DBS Bank

山下 重美

セレター飛行場の滑走路は先端がスロープになって海に落ち込む感じだ。
セスナ機は滑走路の仮道を残してフワリと浮上する。

対岸のジョホールを斜めにのぞんで大きく左に旋回すると波一つない海上
に白い尾をつけた船がゆっくりと移動している。

島の上空に戻ると眼下に水路が陸地に切れ込んでいる。後で調べてみると
サンゲイセレーターであるらしい。



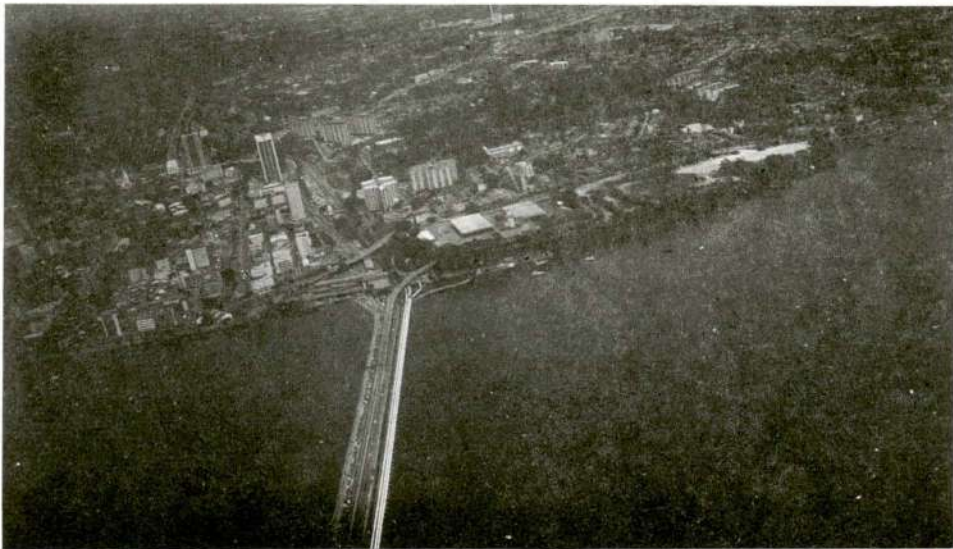
上空に達すると飛行機のスピードが殆んど感じられない。地表がゆっくり
ゆっくり後に流れて行く。シンガポールの北東部に当るこの辺りは全く緑、
緑、緑の間に白い道路が伸びてその先にアパート群がみえる。

新しい建物の連なりはイシュンのニュータウンらしい。白い拡がりの
隣の開発中の土地の赤い拡がりが印象的だ。

機は緑の中に拡がる水面に近づいて行く。2つの湖が接している。ローワ
ーピアスリザポー、アツパーピアスリザポーは地上からの眺めもシンガポ
ールで最も美しい景観の一つだが空からの眺めも仲々よろしい。深山の緑に包

まれた感じの静かな水面のただづまいはここが小さな島国であることを忘れさせる光景だ。白い道がくっきりと湖辺に曲線をつくる。湖の上を旋回すると対岸にアイランドカントリー倶楽部のコースが緑の縞模様を重ねている。

機は反転して北に向う。これも小さな島国らしからぬ高速道路が緑の中を貫いている。走る車と速度を競いながら進むとウッドランドだ。ここのアパート群も大型の棟が重り連らなって偉容を示している。高速道路のはづれにジョホール水道が河の様に見える。白いコースウエイが真直に伸びて兩岸をしっかりと継いでいる。



コースウエイの上空に達するとジョホールの町並の向うにマレーシアが広がっている。山々も連ってやはり大きい。

コースウエイに別れを告げて機は南に戻る。セレタリザポの淵に動物園を深す。

セレタリザポに沿うマンダイロードにはドラブが楽しくなる緑のトンネルを作る美しい並木路がある。

ブキテマの鉄塔が近づく、競馬場がみえる。ここも移転をしてゴルフ場に生れ変ると云う。

遠くにシテイの高層ビルが林立するが残念ながら近づかない。ジュロンやチャンギもはるかに望むだけだ。然しいづれの方向も先は海だその先はない。そうみるとやはりシンガポールはそんなに広くない。



空からもこの小さな国は多彩な表情をみせてくれる。海と船、豊富な緑、水、整備された道路そして住宅群、めざましい発展の中でも豊かな緑は大いに安らぎを与えてくれる。

一時間の空の散歩も終りに近づいた。飛行機は今度は陸から海に向かうコースで緑の中に白い短冊を置いた様な滑走路に向かって着陸態勢に入った。

シンガポールの女性

等松青木監査法人 / TOUCHE ROSS

高山 宜門

ジャパニーズ、ラウンジに勤めている女性のことではなく、私が知る唯一の（？）シンガポール女性であるところの会計事務所にいる女性を通してシンガポールの女性を考えてみたいと思います。従って、題が聊か刺激的過ぎたかも知れません。題に釣られてお読みになった方にはお詫びしなければいけません。

当地の首相を含めた男性諸氏には叱られるかも知れませんが、「シンガポールは、女性でもっている」というのが当地に赴任以来の変らぬ印象です。

植民地であった時代が永かった為か、男はあまり自分の意見をハッキリ云わず、言葉は悪いのですが、何か鵪鶉^{ヌエ}のような感じがします。しかし、女性の方は、これは意気軒昂としており、日本の昔の家長の如き尊厳と風格すら持っているようです。街をいく若いカップルをみても、男の方が半歩退って唯唯諾諾としているかの印象を持つのは私だけでしょうか。

扱て、事務所の女性です。これはもう秘書を含めて全くの専門家であり職業人です。勉強もよくしていますし、非常なる責任感に裏打ちされたハードワークをこなしています。

昼間、彼女らと接していると彼らが女性であることを時として忘れる程です。仕事の上では、誠に頼り甲斐のあるパートナーです。

しかし、一個の女性、特に妻として又は母としての立場で彼女達をみると、これは少々問題があるようです。

ある夜、残業をしている彼女達に質問したことがあります。「旦那さんや子供さんの食事どうするの。」

彼女達の一人が応えて謂く、「外食。月のうち、一二度位しか、自分では食事は用意はしません、これが普通です。シンガポールでは。」食事を通じて、というか夕食を用意をする母親の背中を通じて家族の絆や、物の考え方

のようなものが固められ、受け継がれていくような気がします。

彼女達も、大家族に囲まれ、両親より家庭の味、中国人社会といったものも含めて伝承されてきている筈です。この伝承の輪が、彼女達の年代で途切れて了うのではないか、それ故もう少し家庭を省りみるべきではないか、と常々思っています。これは、一面では彼女達の職業専門家としての力を削ぐ結果となり又労働力の確保に躍起となっている政府の方針に悖るかも知れません。従って、これは彼女達自らが解決すべき事柄で我々外国人が容喙すべきでない、と云われそうです。

唯、彼女達の子供に接する機会があれば、以上のことは私の偏見に過ぎないと悟るかも知れません、即ち、疲労から目を充血させ、それでもなお、重い荷物を背負って歩く母親に子供達は、何にかを感じ取っているかも知れないから。



シンガポール—きのう、きょう、あした

東京海上火災保険（株）

細田 秀之

当地に赴任して2年が過ぎようとしています。大抵のことに慣れました。暑い気候もビル内の強い冷房にも慣れました。パラッとしたタイ米も平気です。しかし、いまだに苦勞しているのがシングリッシュです。

このシングリッシュなるものの最初の出合いは、赴任直後、挨拶回りをすべく尋ねたビルの名前「ウォーターレイセント」です。後で「ワールド・トレード・センター」のことと判りました。

DとかTで終る単語は、例の破裂音が普通は聞きとれません。C U Tは真っ赤の「っ赤」と同じです。当初はこれが生きた英語の発音なのだ、やっと本物に出合った、と感激してしまいました。

同じような変則はC H I C K E NのC K E Nとも言えます。これは、ロックンロールの「クン」と同じ感じですが。

この変則発音はどこから流れてきたのでしょうか。シンガポールは中国系の人が多いので、そちらの流れと言う人が居ます。私は中国（といっても北京と大連）に行ったことがあります。そして英語の話せる人は正統派の発音であることを知っており、やや疑問をもっています。マレーシアでもないと思います。

マレーシアの人々の英語の発音は純粋のマレー人であれ、中国系マレー人であれ、正統で判り良いのです。先日、ペナンとKLに出張した時に、彼らの操る英語の聞き取り易さに驚くと共に、自分の英語聞き取り能力が飛躍的に上ったような気がしました。

よく、一定時間英語を聞き続けていると、ある一時から突如として会話が聞き取れるようになるものだ、と教えられていましたので、まさにシンガポールから移動する飛行機の中で、その区切りの時を迎えたのだと信じて疑いませんでした。

しかし、当地に舞い戻った途端に振り返し、楽しい夢から無理やり現実の世界に押し戻されてしまいました。

元々同じ国でありながら、分れてから25年しかたたぬのに、マレーシアとシンガポールでなぜこのように違ってしまったのでしょうか。

今のところ、シングリッシュと同じ特徴を持つ英語圏の存在を知りません。シングリッシュのルーツはどこなののでしょうか。



SHOCHU, a Japanese white spirit

不思議な国—どっちがどっち??

ブローグ

皆さん、S I O Oという所をごぞんじですか？おじさまがたが、週末には、いそいそと出かけていくところ……

或る日、私はそのまわりを運動会の練習に走ってみました。コンクリート道を少し走っていくと“STOP”と白いペンキで書いてある。

ゴルフをするおじさんが、ドライバーという長い棒切れで打つと白い球は真直ぐ—真直ぐ飛んでいく……（日本人は何んでも真直ぐなのが好き……）。

たまには白い球の重芯が偏芯しているのか曲って飛んでくる。スライスというらしい。危うく身の危険を感じる。

だから“STOP”。

しばらく走って右に折れると、BUKITの13番の裏のジャングルの中を走ることになる。この辺から話はシンガポール独特のややこしい展開となる。

「トントントン」と軽やかにジャングルの小道を走っていると突然、迷彩色の軍服に身を固めた青年達が銃を片手に狙い打ち……

「ドッドッドッ……」

「1人死んだ!!」

と思ったら空砲だった。

「やれやれ」と立上って、迷彩色の青年達に「兵役の訓練ごくろうさん!!」と何やら語で話かけあいそをふりまいて又、走りだすと

「カーン」

続いて「ナイス・オン」という歓声が、ジャングルにこだまする。多分14番のショートだろう。

シンガポールという国

この「ドッドッドッ」という空砲と「カーン」という白球音が入り混じっている国。臨戦体制をとりながら平和を楽しんでいるという異ったものの調和のとれている国—というのが実感である。

真面目に考えてみよう

シンガポールという国。全て異なるものが、ばらばらに散らばっていてそれでもかつ1つの流れにまとまっている不思議な国。

いろいろな種族の人々が1ヶ所にまとまることなく散らばった状態でそれぞれの生活様式でそれぞれの宗教で生活している。「他人は他人、自分は自分」とある程度距離を保ちつつ、しかし、お互いにある種の力で影響し合って社会のルールを保っている。

人によれば「統制の強すぎる国」とも云う。「ほんとにそうだろうか？」むしろ「各種雑多な個性が自分の個性一杯に生活を ENJOY し、他人の領域に邪魔をする寸前でとどまるようルールが作られている国……それがシンガポール」と云えないだろうか？

シンガポールに来てはや2年。毎日の生活のなかで感じるこの若いそして、これから大きな発展をとげようとしている ASEAN の [・]その役目を果しているシンガポールのたくましい息吹き……。

1歩間違えばどうでもになってしまう 小ささ を最も効率良い小廻りの良さに変えて、自由滑達に歩いているように思える。

人に寄れば「人種のルツボ」とも云う。

しかし立場を変えてものを見た場合、アメリカもヨーロッパも中近東もアフリカも全て多かれ少かれ「人種のルツボ」の集りではなかろうか？

いろんの人達が程度の差こそあれ、混り合いある距離を保った引力と反力のバランスで生活を保っているのではなかろうか？

それに比べて海岸線の長さが世界で2番目に長く海に囲まれ、四季に恵まれて単一の文化を ENJOY している日本。

単一民族の持つ求心旋回思考を FULL に発揮して経済大国にのし上ってきた日本という国……。

考えてみれば、世界の中で日本だけが、単一指向の「不思議な」、「特殊な国」という気がする。(欧米にはみられない……)

日本では「外人労働者をどうするか」で、大さわぎしている。少しは「ガイジン」という概念のないシンガポーリアンに近づいてみては如何であろう。

と南の空で星を迎えながら「少しはシンガポーリアンに近づく努力をしてみるか……。せっかく、シンガポールに住んでいるのだから……。」

「匿名希望」

シンガポール—きのう、きょう、あした

Hitachi Electronic Devices (S) Pte Ltd

松崎 修

前夜、華やかなネオンにつつまれた町で遅くまで飲み語り、朝の強い陽がやけにまぶしいとき、凄い雷雨が季節変化のない日々に変化をつけてくれるときシンガポールに住んでいる実感がわいてくる。

「東洋のマンハッタン」とも呼ばれる高層ビル群、「東洋の都市庭園」と呼ばれるにふさわしく緑と花が豊富な町。ハイウェイをドライブしていると素晴らしい光影が次々に現われ速さかかっていく。田舎育ちの私には時々夢でも見ているような錯覚におちいることがある。このシンガポール“いま”の素晴らしいさに酔っているのであらうか。

このシンガポールに住んで3年近くになろうとしている。単身で生活しているのではなおさらか時々庶民的、大衆的な感覚のあふれる町が恋しくなってしまう。

多くの都市が、オフィス街、娯楽街、リゾート区、下町、山手等いろいろな区別される地域をもち、高級かつ近代的な部分と庶民的、大衆的な部分を都市全体を近代化する中でも、それらをいかに調和させるかを大事にしているものと思う。これは、人々は常に新しく近代的な物、感覚を求めている中でも古い部分の良さにひかれそこに安心感を思い出すとともに歴史的なものを残したいと願っているからであると思う。

近代化された都市部に住んでいると肩が凝るというか、ストレスが溜ってくる感じが無性に古い部分、近代化の遅れている部分に触れたくなくなるのは私しだけで無いような気がする。

ホテルのレストランでやや高級な食事を楽しむより、おせいじにも清潔と言えないような古い食堂やホッカ・センタでローカルの人達と楽しく食事するのも大変良いものであり、ストレスの解消にもなるようである。

思い出せないが、「シンガポール人にとって“食べること”は人生の心髄

にあたる」という内容の本を読んだことがある。

先日、新聞の広告に出ていた上海ガニのレストランを見て早速出かけてみた。いっていた店のイメージとは全く違い大衆食堂であった。上海ガニいっぱい10ドル（高級レストランでは30ドル以上している）でローカルの一般家庭の人々にとっては高いものであろうが、何と店があふれるほどの大入りで、富める人、貧しい人、色々な階層の人々がカニにむしゃぼりついている光影が印象的であった。

シンガポール人にとって安くおいしいものを食べることに关しては、きれいなレストランであれ、清潔とは言えないような屋台であれ、その環境や食べるスタイル、社会的なギャップなど何にも関係しないということであろう。この食堂で、色々なことで日本人との違いをあらためて感じ、更に彼らにとって良きシンガポールの“きのう”の一部を感じながら私もうまい上海ガニにしゃぶりついてきた。（Capital Restaurant, Cantonment Road）。

どんどん近代化される中で古くかつ大衆的な部分がなお残っている。そして人々はこの古い部分に愛着を感じいつまでも残ってほしいと思っているにちがいない、環境、設備の近代化は容易に受け入れられるし望んでいることでもあるでしょうが、生活、中味の近代化は難かしく時間がかかることであろう。

シンガポールの“あす”が更に素晴らしいものであるかは、この環境、設備の近代化にマッチした人々の生活マナー、モラルの向上にかかっている様な気がする。多民族国家でこれほど短期間に発展させた人々の努力でもって、シンガポールの“きのう”と良き伝統を残しながら更に素晴らしい都市国家になっていくことを期待している。

シンガポール—きのう、きょう、あした

長谷川香料株式会社

畑江 成郎

円高、国際化、アジアの時代——御多分にもれず、そんな日本企業を取り巻く事情が私をしてここシンガポールで初めての单身しかも海外生活を送る仕儀とさせました。

50歳を過ぎての单身生活と聞くと、さぞや不自由をしているのではと同情を寄せてくれる方々も多いのですが、負け惜しみで無く結構当地の生活は单身者にとっても快適な面が多々有ります。外食が比較的安価であり、かつ中華、和洋エスニック撰り取り見取りおいしいものが味わえる事が何と言っても最大の因子ですが、それ以外にも日本にいたら出来なかった楽しみを享受出来ます。

オーディオに興味がある向きは日本では垂涎的の欧米製高級スピーカーやアンプ等が日本で買うよりずっと安く購入出来る事に思わず舌なめずりさせられる事でしょう。尚且つ狭い兎小屋で悪戦苦闘している日本のオーディオマニアに取って最大の魅力は広いリスニングルームが確保出来る事です。私も20歳代からのオーディオマニアの一人なのですが、東京郊外の建屋住まいのに住んで居た時は狭いながらも何とかリスニングルームを確保していたのですが、家内の仕事の関係で都心のマンション住まいを余儀なくされてからぶつりとオーディオとは縁を切り、ミニシステムで我慢せざるを得ない状況でした。それがここシンガポールに来て完全に病氣再発、我慢出来ずに家庭用ではまず最高のスピーカーの一つと言われる英国製TANNOY GRF MEMORYを買い込みました。そして当地に来て一年半の間にCDの保有数が約100枚に達するという増え方をし、今ではCENTRE POINTに有るBETHOVEN HOUSEのマダムともすっかり顔馴染みになりました。御存じとは思いますが現金購入の場合各は表示価格の10%引きとなります。

そんな訳で趣味の世界でも大きな楽しみに浸る事が出来たのは望外の余裕ですが、決して孤独な楽しみだけに埋没しているという訳でも有りません。それよりも大きな人生の収穫は日本に居ただけでは不可能だったであろうと考えられる異業種の有能な方々との交友機会が得られた事です。このシンガポールという小さな島国に凝縮された日本人社会には独特の親近互助の感覚が溢れているように思われます。時に御親交戴っている熟年単身者同志でここを足場に近隣諸国への旅行をするのも又楽しからずやと言った趣きがあります。

こんな風に書き連ねますと日々楽しく仕事を忘れて耽溺しているのではと疑われかねないと思いますが、時として日本に残している就職や大学受験という転機に遭遇している子供達、そして大学助教授という職業を抱えながらそういう子供達の世話をしている家内に思いを馳せる時、恙無しや、勉学にいそしんでいるや等という思いに襲われるのも禁じられません。

とにも角にもシンガポールはここだけで文化歴史を採勝しようという向きには物足りない所では有りますが、東南アジア圏の要である事は誰しもが認める所と思われます。ここからアジアの一員である母国日本を振り返るのも一興です。人それぞれ違う思いで母国を偲ぶ事と思いますが、私の場合は世界一の金持ち国と言われる日本の現状が時にはかわいそうなピエロに見える事さえあります。

それにしても私のような変なジャパニーズイングリッシュしか話せない者にとって、それでも容易に意思が通ずるシンガポールが初の海外赴任地であった事を至福のお恵みと神に感謝して末尾と致します。

シンガポール—きのう、きょう、あした

Miura & Associates M.C. Pte. Ltd.

三浦 港治

初めて私がシンガポールの土を踏んだのが1976年（昭和51年）5月なので、あう13年以上も前の事になる。

当時のパヤレバー空港に降りたった時の一種異様な臭い（恐らく、屋台料理から漂ってきたヤシ油の臭い）と蒸し暑さが、まさに東南アジアの異国に来たのだという実感を味わせてくれた事が今でも懐しく強烈な印象として残っている。……現在のチャンギー空港では良くも悪くもこのような印象を与えるとは思われないが……。

それから8年間にわたる長い駐在生活の後2年間の日本での生活の後、事情があって又々3年前に当地に舞い戻り、又々考えるところがあり遂に今年の6月から独立して今日に至っている。

何だか他人事の様な表現になるが、自分でも信じられない位ここ数年の自分自身の人生の変遷はめまぐるしくなってしまった。

となるとやはり、私にとっては13年前の5月が私にとっては極めて運命的な時であった事になる。＜当地の女性との結婚が大きな要素であった事は否定出来ない。＞

一方、国際結婚は別として日本人のかっての平均的サラリーマンとしては比較的自分自身でも思い切った転身を図っていられるなと思えるのも良くも悪くも有形無形にシンガポールという土壌、それにシンガポール人の物の考え方、生き方に影響を与えられてきたと私自身認めるところがある。

かといって今迄決して楽しい思い出ばかりではなかったしシンガポール人の物の考え方、生き方の全てを肯定する程親シンガポール派でもないのだが、私個人としては彼等の生き方から学ぶべきものも少なくないと考えている。

ところで、大変おこがましい云い方になるし、かく云う私も偉えうな事を云えた義理ではない言動も多々あるのですが、私を含めた在留日本人はもっ

と謙虚に地元のシンガポール人に接し素直に我々がシンガポールに生活し働かせて頂いている事を感謝しもっとシンガポール社会に貢献する事に留意すべきだと思う。

最近とみにともすると日本人在留者の男女を問わないシンガポール人に対する傲慢な我が物顔の振る舞いが目にあまる様な気がしてならない。＜一方、日本人会の一部の方々のボランティア活動や日本人商工会議所等の寄付金活動等々の御努力には敬意を表しておりますので念の為＞

柄にもなく偉そうな事を書いてしまいましたがお互い人間としてのバランス感覚を失わない生き方を志し願わくば良き日本人、良きシンガポール在留者となる様に努め、日本人社会、シンガポール社会双方へ貢献出来る様な愛される日本人になり、愛される日本人コミュニティーをシンガポールに築きたいものです。



シンガポール—きのう、きょう、あした

シンガポール松下モータ(株)

平松 徹

L I D O で、封切の話題映画「BLACK-RAIN」を見ました。住みなれた大阪の風景をアメリカ人が撮影したカットを見るのは、新鮮で非常に興味深かったし、何ととっても、「KEN TAKAKURA」というスクリーンにでた時は、何かジーンとしてしまったりした。だが、もっとおもしろかったのは、同時に私の横でスクリーンに見入っているシンガポリアンたちの反応であった。マイケルダグラスに早口の英語で話され、アタフタする日本人刑事を見て、爆笑するのは、日頃のオーチャードあたりの日本人団体さんの姿とだぶるからであろうか。高倉健の住む公団住宅を見て、「THAT'S THE JAPANESE STANDARD LIVING?」という小声が私の二席ほど後ろから聞こえたりするのも、日本人の上司の故郷に興味あるからだろう。

閉鎖社会だの、アメリカ文化を金で買うなどと、批評は多いものの、でも私は日本に他の国にはないものを持っているということで誇りを持っている。



シンガポールは確かに急速に豊かになっている。車ローンか税金ローンかわからないような高額の手車でも、ルームミラーにお守りを揺らしながら、アキノ大統領みたいなメガネをかけたおばちゃん必死でステアリングを握っている。300Mぎしのような細いネクタイをしめ、裾をしぼったズボンをはいたセールスマンが確かに増えた。

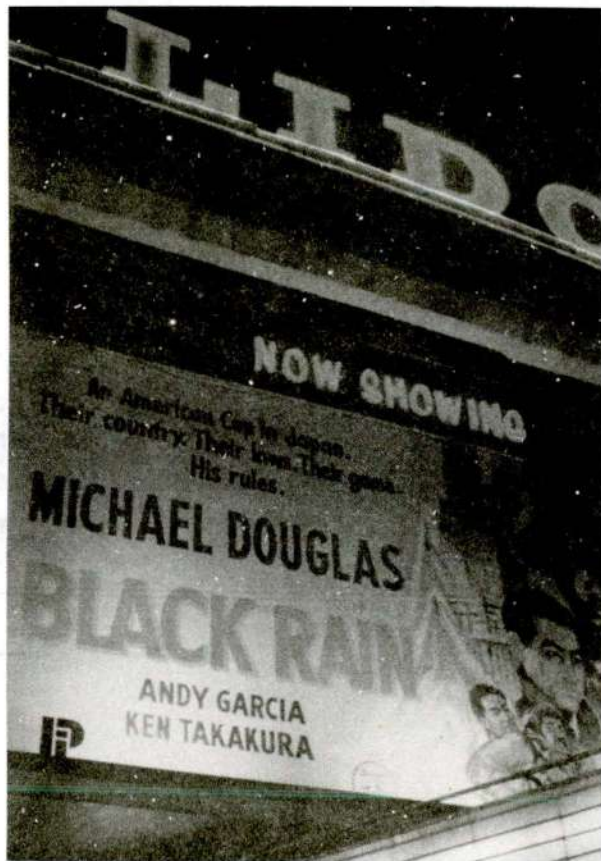
でも何かシンガポールらしさというのも同時に失くしていつているのではという気がしてならない。

1922なんていう文字が読みとれる古いビルをドンドン取り壊すのは、防災上の問題があるのかもしれないが、寂しいし、何か自分だけの隠れ家というか、謎めいた洞穴をいきなり壊して白日の元にさらけだしていつているような気がする。それと同時にシンガポールの人の意識も変わっているのではないか。

私はシンガポールに住んで、わずか2年と数か月であるが、6年ぐらい前に一回だけ、シンガポールに来たことがある。当時、これも日米合作であった「戦場のメリークリスマス」で坂本龍一のコロニアルな曲と、ブキティマの時間が少し止まったような鬱蒼とした林のイメージが私の頭の右下の方に残っている。

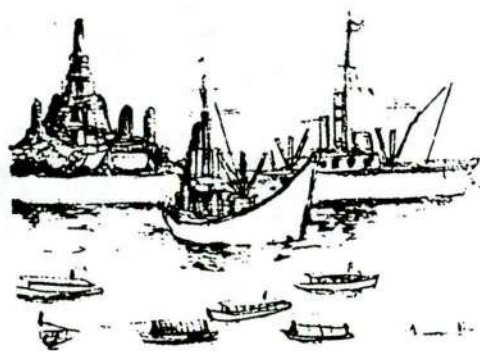
変に自信のついたこの国の人々は、失敗しても言い訳が多く、なかなかスパッと謝らない。何かの本で、謝ったら自分の命さえ危うかった植民地時代の名残りがそうさせていると読んだことがある。それならそれでかまわない。

でも私は・マレーとチャイニーズとそして英国文化が混じったこの国独特



のリズムというか、時間の流れというものを大切にしてほしいと思う。

南国の素晴らしい環境に恵まれたこの国の人々が、古い伝統を大切にし、外国人に頼らずにもやしのような気持ちから脱却して、自分の足で歩めるよう、私は日本人としてがんばりたい。でももしかしたらそんなことを考えるから、ますますシンガポールは変わってしまうのでしょうか。



シンガポールのリズム

日本石油
吉岡 亮平

シンガポールに赴任して3ヶ月弱。この間時間の過ぎるのが早かったのか遅かったのかどうも釈然としない。東京にいた時は東京のペースに乗った生活だったので、ひと月があっという間に過ぎ去っていった。毎日カレンダーを見ては「もうすぐゴールデン・ウィークだ」とか「学生たちはもう夏休みか」などと溜息まじりに考えていたものだが、どうもシンガポールでは時間の感覚が希薄な気がする。赴任早々ということもあり、まだ「日常生活」と言える程安定した生活を送っている訳ではないが、この特殊条件を取り除いたとしても時間のメリハリが少ない。いくつか理由を考えてみた。

①季節がない。年中夏で四季がないため、メリハリに乏しい。シンガポール駐在数年のベテランに言わせると「いや、季節はある。HOT、HOTTER、HOTTESTと3シーズンもある。」とのことだが、私のような新参者にはまだ違いがわからない。そう言えば日本では今頃、「おお寒い」などと言いながら、縄のれんをくぐり、鍋でもつつきながら熱燗で一杯やっていることでしょう。日本での生活を思い起してみれば、寒い夏の暑い夏の文句を並べながらも、ひとつひとつの季節を楽しみ、味わっていたのだと思う。

②シンガポリアンのリズム。短い期間で決めつけるのは大変軽率だが、やはり“南洋の人”だという感じがする。皆がそうという訳ではないのだが、ゆっくり構えている。時間が気にならない風の彼らを見ていると、こちらもなんとなく時間の観念が希薄になっていく気がする。特に、デパートでラッピングを頼む時、この感を強くする。もう一つシンガポリアンについて感心するのは、個人主義が発達していること。デパートでのCASHIERの行列の時に、この感を強くする。これら2つをひと言で表わしたのが「ノー・プロブレム」であろう。

赴任後、マレーシア、インドネシアをまわり、これらのゆっくりした構えはシンガポールに特殊なものではないと確認した。

むしろ最近、行列に並びながらいらしている自分に気付くことが多く、日本人のペースの方が異常なのではないかとの疑問が頭をもたげ始めている。

話が横にそれたが、何だかんだ言ってもシンガポールが気に入っている。家族ともシンガポール生活をエンジョイしていきたい。

「CLUB 40」

北海道拓殖銀行

小松 寛

約3年前に当地に赴任した当初、奇異に感じた「オーケーラ」や「ロングタイム・ノーシー」が耳障りではなくなり、「ノープロブレム」の意味するところが実は当方にとってではなく、言ってる当人にとってのものであることが分りかけた頃、あるパーティで顔を会わせた数人の間での話が事の発端である。

「CLUB 40」——「何やらオーチャード・ロード、裏手当りの響きですな」と仰言る向きもあるが、決して新手のナイト・クラブではない。当地に勤務する邦人で勤務先や卒業の学校名を問わず、単純に昭和40年に入社した連中が集った会である。この種の集りを長続きさせることは容易ではないが、偶々当地にこの年次の人間が相当数居たこと、中に他人の面倒見が平均以上に良い方が多いこと、加えて運が良かったのは、ホテル、航空会社、旅行会社など各種催し物を行うに際してのプロフェッショナルがメンバーの中に居たことである。

さて当会の目指すところは仕事抜きで会員間の親睦を図ることにあり、隔月のゴルフは、御多分に漏れないが、その間の月についてはアルファベット順に廻る幹事の腕次第である。ジョホール・バル探險の旅なんてのもあるが、当地在住の1大先輩とディナークルーズを共にして、旧き良き時代の話題の数々を拝聴したあと、実際に、それらの場所——GREAT SOUTHERN HOTELとかTRENGGANU STREETなど——をご案内頂いたことは記憶に新しい。又シンガポール大学の化学部、HENRY ONG WAH KIM教授を夕食に招いて実演を含む筆跡鑑定の話をして頂いたのも興味深い催しであった。

期限が来て帰国する会員が居る一方で新たに赴任される方もおり、会員数30名程度は余り変らない。帰国された方々の間に日本支部を作ろうとする

動きもあるやに聞く。最近、高じてゴルフ用のポロシャツと会合用のネクタイを揃え「CLUB 40」のネームをいれた。これも仲間うちにデパートの居たことが幸いした。

国内外を問わず自らが所属する業界とは異なる世界の人達の話聞くのは楽しいものだが、それにも増して南国のともすれば単調になりがちな生活に一つのアクセントを与えてくれる会員に感謝すること大である。性格からしてシンガポールにそれほど永く続く会にはなり得ないが、某先輩の「派閥を作るのは良くないよ」という冗談がヤッカミに聞える位エンジョイしている40S面々である。



4. シンガポールでの楽しみ (パート2)

1) 住友海上火災保険 (株)	(神部 潔)	85
2) 東京美装興業 (株)	(駒井 一雄)	87
3) 三菱電機シンガポール	(牧野 陽)	89
4) 日清食品 (株)	(長谷川 真昭)	90
5) 国際電信電話	(伊東 善元)	91
6) 伍鳳商事 (シンガポール)	(小林 茂夫)	93
7) シンガポール大丸	(山口 泰博)	95
8) NICHICON (S) PTE LTD	(中村 泰夫)	96
9) 鹿島建設 (株)	(坂本 忠己)	98

二度目の海外勤務

住友海上火災保険（株）

神部 潔

今から12年前、初めての海外勤務地がホンコンで、無事3年の任期を終えて国際部、アジア中東課長として帰国した。その時国際部での帰朝あいさつの内容は、「最初は見ると聞くもの（英語、広東語）珍しい事ばかりで確かにここは外国だと思った。所が少々慣れてくると、周囲の中国人は肌の色も同じだし、町中の様子も考えてみるとさ程物珍らしくなくなり、“外国という異和感”がなくなってくる。ところがその後仕事を突込んでやればやる程今度は逆に社内のホンコン人との間で考え方の違いが出てきてしまう。そこで結論“ここはやはり外国である”と。」

たとえば肌の色や顔付が似ていても、言葉が通じてはわかった積り或いは相手もわかっているはず、という日本流はいけない、と当時自戒の念をこめて自分に言い聞かせた積りだったが果して今の自分はどうだろうか？

残念ながら初めての貴重な経験が生かされているとは言い難い、と反省している。

所で、ホンコンとシンガポールと云えば何かと似ている、と莫然と思うのだが生活環境だけとらえてみると当地がはるかに住み易い、住宅事情ひとつとっても（今は知らないが）当時ホンコンでは日本人駐在員がプール、テニス・コート付のコンドミニアムに住むなどというのは夢のような話であった。だから毎年暑い季節になるとリバルスベイというイモの子を洗うような海水浴場によく家族を連れていったものだ。リバルスベイと云えば映画で見た有名な海岸だが当時すでに大分と汚染が進んでいたのも今ではもう遊泳禁止になっているのではないだろうか？

ゴルフ場も当時は一つしかなく、私が駐在していた時はメンバーでなかったためもっぱらウィークデーゴルフに専念せざるを得なかった。若干気が引けたが、本社も或程度その辺の事情を察して目をつむっていたようだった。

それに比べて当地はどうだろう！私の場合年間70回はプレーを消化（？）するから3年もおれば200回を越える計算になり、日本での10年から15年分に相当する。暑いものの、或いは雷が多いの（これは本当に恐いが）という事はあっても客観的に見てゴルフ好きの人にとってシンガポールは最も恵まれた国の一つと云えるのではないだろうか。

こんな事を云うとホンコンの悪い事ばかり書いている様だが、最後に、“中華料理”だけは何と云ってもホンコンに限る。広東、四川、上海、北京とその種類も多く正統派の店があって実にウマイ。最近シンガポールの有名レストランではホンコンから一流の調理人を引抜いて味のグレード・アップに努めている、との事だが“完成”までには今少し時間を要するのではないか？先日、食品関係の得意先の方とそんな話をしていたら、話がはずんで“小籠湯包”の話題になった、要は肉マンなのだが、かむと中から汁がジュワーと出てくる何ともウマイ肉マンで、話をしているだけでよだれが出てしまう。こんなウコイものがどうしてシンガポールには無いのか残念でならない、是非お宅で作って下さい、と頼んでみた。ひょっとしたら来年あたりこのシンガポールでも“小籠湯包”が食べられるかも知れない。



CHANPON, noodles in thick broth

押忍シンガポール

東京美装興業（株）
シンガポール駐在員事務所
駒井 一雄

堅苦しいのは苦手なので他の人に任せ、のっけから気楽にいきましょう。

では、雑談風に自己紹介から、

シンガポールにきて早や1年、光陰矢の如しと申しますが、全く早いものです。5年ぐらいいさせてほしいと言って日本を出て、ああ後4年しか残っていない。

中学、高校をオーストラリアで出て（6年間）、日本に帰ったときは、母国語（日本語）を話すことが出来ず、長沼の日本語読本を使って、「これは鉛筆です」から勉強しながら、慶応の文学部（歴史哲学）を卒業し、独学で自動車整備の資格を取り、アフリカはマラウィで青年海外協力隊員として2年間オートバイ（10000）の整備をやりながら、船外機の修理、遠心分離器の修理、顕微鏡の修理、カメラ・トケイの修理まで頼まれ、（頼まれればイヤと言えず、ぶっ壊したのは腕時計だけ）、土建屋さんでサウジ・アラビアへ1年、そして再びアフリカへ、今度はタンザニアで青年海外協力隊嘱託調整員として2年、そしてシンガポール。

ちなみに家の奥さんは、同じく青年海外協力隊で、（山口大使がパラグアイ大使だった頃）同じパラグアイで苺の栽培を教えていたんですよ。

さて、

シンガポールへ来てびっくりしたのは、こんな小さい島によくまあ集ったものだ、日本人、小学校や中学校の通学バスの数のおびただしいこと、なんだから。これだけガキ共がいるということは、それだけ親がいるということ、（おどろき、もものき、さんしょのきだわ）。

いや、本題は、こんな小さい島だけ面白いことがいっぱいあって、こりゃあへたすればやりたい事の十分の一もやれないまま任期が終わってしまうのではないかと言うことです。

1. 昼間にタコは上げたけど、それに電気を灯けて夜中にあげるのはまだ。
2. 蘭の栽培を始めたけど、まだ殖やせるまではいっていない。
3. 9月に野生のコウライウグイスを確認したけどまだその写真を撮っていない。
4. 9月に2kg級のマトフエフキダイを釣ったけど、まだ4kg級は釣っていない。(俗に皆さんの言うシロダイの事、タンザニアではチャングゥと呼んでいる。)
5. ECPやMANDAIRROADで野生の蘭を確認したが、花が咲いているのは未だ確認していない。
6. ジョホールにいる8名の青年海外協力隊員との交流が100%ではない。
7. 未だ稲妻の写真が撮れない。(マラウィにいる頃から狙っている)
8. マトフエフキダイやアオナ(クエの類)がいると言うことは、コレコレ(カイワリ)がいても良いはずだが、分布が違うのかなあ。

あれもこれもとやりたいことはあるけれど、悲しいかな宮仕え、趣味に費やす時間の合間を縫って仕事仕事のお父さん、基、仕事仕事の合間を縫って趣味に時間を費やすお父さん、カァチャン、たまには協力するけど、2人の悪ガキ坊主の子育て頼んだぜ。

さあ、9時から男の5時から父さん、今日も頑張って仕事と趣味に精出すか。

シンガポール—きのう、きょう、あした

三菱電機シンガポール

牧野 陽

こちらに来てかれこれ一年が経過し仕事に溺れながらこの国の美点もあらもなんとか見れるようになったつもりです。

日本にいる時もお役人は苦手で、当地のお役人はスマートでそつがなく良く勉強しているのですがやはり苦手です。若い国ならではののでしょうか彼等は どうしてああ教科書から抜け出たようなことを言うのか時に不思議な気がします。

それでも良い政策、その良い結果については卒直に評価したいと思います。この国の住宅政策は十二分に評価に値するものと思います。ハリラヤ、ディーパバリとHDBの住宅に住む従業員に呼ばれて家の中を見る機会がありましたが、東京で住むことに苦勞してきた目にはやはりこの程度の広さと通勤時間を享受できたらなあと思えました。

日本人は車は買えるが家は買えず、シンガポール人は家は買えるが車は買えないとは良く言ったものだと思います。統計上の絶対額は別にして、実感としての生活水準、住宅費を差引いた後の実質所得はひょっとしたらこの国の方が上なのではないかとさえ思います。

シンガポールも25才になろうとしています。産業構造の高度化、ハイテク化と相俟って、生活の方も量から質、衣食住からより文化的なものへと重点が移っていくものと思います。複合民族国家の多様性がシンガポールスタイルの文化を生みだしていくか興味を持って見守りたいと思います。

シンガポール—きのう、きょう、あした

日清食品（株）

長谷川 真昭

シンガポールの国の動きは早いもので、数年前のトライショーから今ではMRTの時代になって来ました。私が1975年に赴任駐在開始した時のオーチャード路はスペシャリスト・センターの横に昼間はCAR PARKがあり、夜になるとどこからとなく屋台が集り夫々特殊な味で多くの客を集め明け方迄営業しておりました。1ドルのラーメンの味、おいしかった憶えがあります。

第一回目1984年迄滞在し、今回2回目本年3月に赴任致しましたがMRTの開通、又道路が大きく変りそこを走る車を見ていると発展途上国と云うより先進国の様で、又本年11月からは冷房レストランでの禁煙は先進国としてのモデル・ケースとして存在している感じです。観光を一部の財源としている関係上その設備には力を入れており、チャンギー飛行場又有名ホテル等は常にWORLDコンテストのベストテン上位に入っており、日本も見習う点多々あると思われます。

ゾウリをはいてTシャツにタンパンを着用そして腰にタオルをかけている時代は終り、街行く人々の服装も整ってUOB、OUB、他金融街の超高層ビルに出入りする人々は明日のシンガポールを作る新人類と思われます。飲べ物好きなシンガポーリアン、街には中国料理、西洋料理、日本料理、インド料理、ベトナム料理、他数あふれており朝から高級車にておいしいものを探して食べている今日です。

アジアの中心地シンガポールは、来年建国25周年を迎えようとしております。新聞によるとリー首相の引退も出ていますが、今日迄25年間シンガポールを築き上げたリー首相のカリスマ的なリーダーシップは他国に類のないものではないかと思われます。

10年近く過したシンガポールは東南アジアで最も美しい国で引退後又是非訪りたい国です。

随筆シンガポールのきのう、きょう、あした

国際電信電話

伊東 善元

冷たい霧雨が降りしきる中、飛行機の窓から眺める緑色のシンガポールは何か期待と不安が入り交じった感じを抱かせた。これから赴任する未知なる国はどんなところだろう、会社の代表として職務を全う出来るだろうか、初めての海外生活に家族は対応出来るだろうか、の不安と共に、噂によるとゴルフ天国と言うからゴルフが思う存分出来るんじゃないか、帰国するときにはもちろんシングルハンディだろう、という期待感、等々が交互に胸をよぎる。空港からホテルに向かう車中で、先ほど機内で耳にした言葉が気になる「こんな不景気によくシンガポールなんかに赴任されますね。日系企業の中にはかなり引き上げたところもありますし、日本人の数も1万人を割ったと聞いてますよ。実は私も事務所閉鎖の手続きに戻るところですよ。ー！」

あれから3年半経過した今、シンガポールは好景気に湧いている。しかし、小さな国だからすぐ好不況がひっくり返る。このまま好景気が続くかどうか誰にもわからない。しかし、この3年半の変わりようはすごい。MRTの建設、マリーナスクエアの建設、ホテルラッシュ、高速道路の整備、ゴルフ場新設等枚挙にいとまがない。例えば、私がこちらへ来てから新設されたホテルは知ってるだけでもウェステインブラザ/スタンフォード、オリエンタルホテル、マリーナマンダリン、パンパシフィック、カールトンホテル等となる。また、日系デパートも東急、そごうがオープンした。さらに高島屋、西武も進出して来るという。こんなにデパートがひしめき合ってお客獲得ができるのかと他人事ながら心配になる。おかげで日本食品は何でも手にはいるから日常生活には全く困らない。むしろ、日本ではお目にかからなかったカリフォルニア米、オーストラリア米等が安く買えてわが家の食卓にさえも出て来る様に、日本にいるときよりも食生活をエンジョイ出来る。

最近日本人も増えて2万人を越えたと聞いている。どこへ行っても日本人ばかりで、日曜日のセントサゴルフ場へ行くと耳にする言葉の90%以上

が日本語である。また、先日、ヒルトンホテルのルイビトンの店を覗いたら棚には殆ど品物が並んでいない。陳列する前に日本人が買って行く、いや買っさらって行く！。数年前までは2～3人しかいなかった店員が今では常時7～8人、しかもかなり無愛想な態度である。こうなったのも日本人に責任があるのかもしれない。

このように日本人が多いおかげで私の英語力も全く上達しない。帰国時にはペラペラになっているだろうと思っていたが、1年経ち、2年経ち既に3年半を過ぎた今でも赴任当初と変わっていないことが分かりあわてている。本人の努力が足りなかったことが原因だから仕方がない。これから少しでもがんばろう！

しかし、ことゴルフに関しては週1～2回のペースを必ず守りつつそれなりに努力したつもりであったが、こちらもハンデキャップが1つ程度縮まっただけであり、結局ゴルフは回数ではなく、生来のゴルフ的センスに欠けていたことが最近分かってきた。

最近シンガポールの政財界のトップのみならず当社のパートナーであるシンガポールテレコムも会長・社長以下よくゴルフをするようになった。おかげで、ゴルフもビジネスコミュニケーションの一手段として活用させてもらっている。

アジアの中でこのシンガポールは観光・娯楽のみならずあらゆる面でユニークな存在である。今後数年間どういう変わり方をするか楽しみである。EC統合、香港返還がこの国に与える影響は計り得ないが強力な指導者の元と、この国の効率性の良さにより良い方向へ向かう事を確信したい。

ひと月目のシンガポール

伍鳳商事(シンガポール)

小林 茂夫

初めのショックは、こちらの人の話す言葉（英語だというのが）全くわからず、これからの生活や仕事を考えると大きな不安に包まれました。

最近は少しずつ生活にも馴れて、食事もローカルの店で中国風、インド風、マレー風と楽しめる様になりました。

こうした中で周りを見ると、この小さな国の中で、いろいろな民族が混然として生活しており、その中でそれぞれ独自のものを残し、あるものは他と混り合って別の新しいものをつくり出している様に思えます。

特に言葉は共通語としての英語の中に、マンダリン、福建、マレー系、インド系と、それぞれの居住区や職種、職域で話されている生活言語の要素を大きく残して、シンガポールの英語（話し言葉）がつくられている様に思えます。

地名を見ても、英語、中国語、マレー風、インド風、また BUONA VISTA とか NOVENA とかラテン系のものも見えます。

私はカトリックなので地下鉄に NOVENA という駅があるのを知り、（カトリックでは聖霊降臨祭の前に NOVENA という 9 日間の祈りをする時期があるので）、カトリックの教会があるのではないかと見当をつけて、日曜日に地下鉄に乗って NOVENA に行ったところ、本当に駅の近くにカトリックの教会があり、聖堂に入りきれない程の信徒（中国人、マレー人、インド人、フィリピンの人達）がミサに集まっており感動しました。

私はこの小さな国の中での、いろいろな民族の混然とした生き方に、シンガポールの将来の大きな可能性を見る思いがいたしました。

たかがゴルフ、されどゴルフ

シンガポール大丸

山口 泰博

シンガポール在住8年。仕事一途である筈もないのに、無為に時を刻んでしまった。振り返る迄もなく、ホコリを被った英会話の本とテニスラケットが「過ぎし日の努力の跡」を物静かに語りかけている。唯一、ゴルフセットだけが今でも現役で、週一ゴルフの“頼りになる奴”でもある。私のゴルフは、その日の「気の入りよう」でスコアに20点近い差が出る大波プレーヤーの域を雑業できないでいる。この経験的成果は、シンガポール在住日本人の平均値であって欲しいと願っているが、どこにも“天才的人物”が居るので、それに負けじと、すぐ背伸びをしたがるのが凡人の悪いクセ。ある知人は、わずか3年の滞在期間中に、ゴルフのH.Gが25から12へ大巾に圧縮。女房のお付合で始めたテニスでも本領発揮、トーナメントでは常に上位入賞。英会話だけでなく、マンダリンもかなりこなして、ラウンジでの話題をひとりじめ。この様なマルチ人間は、果して我々平均値族とは別人なのであろうか。せめて、自分の得意なジャンルでは、対等に勝負をしてみたいものである。

私はいま、ゴルフの上手な人を理屈抜きで尊敬する。それは、私にとってのゴルフは神秘的でありすぎるからであろう。ゴルフは、パワフルにプレーしようと思えばスポーツとして楽しめるが、確実さに徹すれば、「柔よく剛を制す」の例えで、非力でもそれなりに「ワザ」と「頭脳」で勝利を得ることができるところに魅力を感じる。また、集中力を欠くと上級者といえども、あっというまにアベレージプレーヤーと同じスコアになってしまうという、メンタルなゲームであることも痛快である。

「たかがゴルフ、されどゴルフ」である。何が私を無中にさせているのか。パチンコが無い。磯釣りが出来ない。スキーも無理だ。山登りといってもたかが150m。だからゴルフだけなのか。そんな単純なことではなさそうだ。

他の球技は、その殆んどが相手を攻撃することによって得点をする様になっているが、ゴルフの場合は「全て自己管理」である。How Toブックでは理解できているのに、コースへ出ると思った様な成果が得られない。私は、これを自己管理不足と反省している。つまり、気が急いで頭に描いたようにできないということは、落ち着いてやれば、いつかきっと理想のショットができる可能性に期待している。だから、100をたたいてもオチこまない、90を切っても浮かれない。ゴルフの話に熱中している時、「90前後で廻る」とか「H.Oは25です」などと聞くが、私は最近のベストとワーストを伺うことにしている。それによって大波ゴルファーか堅いゴルフをするタイプか良く分るし、馬券の参考にもなると思う。

シンガポールに駐在しているお陰で、日本とは比較にならない程プレーをする機会に恵まれており、それがまた社交の場ともなっているので、大いにゴルフを楽しみたい。結果だけに拘わらなくなった時、果して私達は「自己管理に成功した」といえるのだろうか、それとも「枯れてしまった」のか。だから、ゴルフは面白い。ただひとつ確かなことは、海外での長期滞在には熱中できる「何か」が必要であり、私にとってのそれはゴルフであったということであろうか。

ゴルフとの出合

NICHICON (S) PTE LTD

中村 泰夫

私しが日本に居た時は、ゴルフにまったく縁がなく、年輩者か金持がするスポーツと決めつけていました。S ' P O R E 赴任6ヶ月後位に某社の方が来社され、雑談の中で日曜日は何されていますかの話になり、当時単身赴任で本を読むか昼寝位ですねと言った所、S ' P O R E での健康維持の一つは週に一度は汗を流す事である。と力説され、「その一つにゴルフは如何ですか。日本に比べ機会は多く又安く出来ます。此の機会にゴルフ覚えられたら。」と勧められ、今度の日曜日一緒にPLAYしましょうと誘われましたが、道具なく、早速ゴルフショップに行き、一番安いセットを買い、泥縄で2回練習に行きいくらか打てる様になりました。さあ今日は本番と、楽しく出掛けた雲一つない青天。筆下ろし、よろしくティーアップ。所ろが連続3回空振り。後に何パーティーか待っておられ、誘って頂いた方の顔見ると、これはえらい人連れて来たと言った顔されている。これはと思い振るも余計力が入ってまたも空振り。思いあまってフィアンにされたらのアドバイスで、やっと40~50m先に行ったが顔面汗だらけ。その後何ホールかギブアップしながらハーフ終了。スコア一言々どころか下手なゴルフと暑さで、ハーフでギブアップさせて頂けないか喉元迄出かけていたが、相手に失礼だし、ゴルフは紳士のスポーツ。そんな事言える訳けがないと言いきかせ、後のハーフを必死で廻わり、終わった時の嬉れしさは……………。

健康維持の汗もこんなに苦労するなら「2度と」の思いで家路につきました。その後4~5ヶ月は練習場に行く事もなく、クラブを握る事もなかったのですが、ある日、日本よりのお客様と食事中、明日の日曜日ゴルフしたいのですが出来ませんかと問われたが、当方誰れも出来ず、丁重にお断りした所、他にゴルフ出来る方知っていますので連絡してみますと言われ、席を立

たれたがすぐ戻られ、「お蔭様で連絡つきました。」と言われた時は、我々お互い顔見合せ一瞬しまったの心境になりましたが、如何とも出来ず、ただ次回来星の際は是非ともお共出来る様致しますと言ってホテル迄お送りしました。

翌々日早速社内でゴルフを始めようと言う事になり、私も再度練習に打込む事にし、都合がつけば練習場に精を出し機会あればコースにも出る様でしたが、スコアーは一向に上達せず、 110 ± 10 と言った所でした。その後2~3年の歳月こそ過ぎるがスコアーは相変わらずでした。

そんなある日、日本から当地に赴任された方と知り合いになり、その後何回となくゴルフと一緒にする機会を得ましたが、相手は私より数段上手で毎回負けるがあるハンデーを上限としてそれ以上は貰えず、逆に上手になればとも言われ、尤もと思い練習場に行きプロの指導を仰ぎました。グリップ、スタンス etc 全てに就いて直され、プロ言わく週3回3ヶ月通え、必ず良くなるの言葉を信じ、コースに行く機会があれば練習場にと通いました。そして3ヶ月後、効果はてき面に表れ、100を超える事はまずなく、どうしてもっと早く習わなかったのかと反省する位スコアーが伸び、それから1年位でハンディ15まで上げる事が出来ました。その後益々ゴルフが楽しくなり、一時ハンディ10を切るまでになりましたが、さすが維持する事は出来ず、新らためてゴルフの難かしさを痛感しています。

とは言えゴルフはスコアーだけでなく、ゴルフを通じて知りあった方も数ええ切れず、大きな財産として大事に致したく考えています。

今後もゴルフは私くしにとって縁の切れないスポーツとして、大事に致したく思っています。

シンガポールでの日本シリーズ

鹿島建設（株）

坂本 忠己

89年度プロ野球日本シリーズは、近鉄3連勝の後、まさかの巨人4連勝でドラマテックに幕を閉じたものですが、ここシンガポール日本人ビジネスマン社会においても、年1回日本シリーズに匹敵する激突がありますので御紹介します。

それは、シンガポール如水・凌霜ゴルフ対抗戦です。如水会とは、一橋大（旧東京商大）の同窓会であり、凌霜会とは、神戸大（旧神戸商大）の同窓会です。両校旧商大という関係からこの対抗戦が86年度より始まり、今年で4回戦を経ました。私は、凌霜側幹事ということで、第1回よりこの対抗戦に携わってきました。

今年の第4回戦は、凌霜3連勝の後のうけ10月28日SICCオールド・コースで如水18名、凌霜16名の計34名の参加者で行なわれました。団体戦は、双方上位10名のネット合計で争われ、賞品はゴルフ・ボール10ダースです。足切り制度により、ゴルフに自信のない方も参加できるのが、この対抗戦の特徴です。今回は凌霜732打に対し如水728打で、4打差で如水の辛勝となり、やっと一矢を報いることになりました。戦いの後は、双方入りまじっての懇親会となり、楽しい一時をすごしたものです。

日本に比べ娯楽の少ないシンガポールだからこその集いですが、我々仕事以外で他社の方々と付き合う機会は少ないもの、こういった催しも楽しいものです。

5. シンガポールでの駐在生活

1) 丸紅 (株)	(名取 幸男)	99
2) サンケン・シンガポール PTE LTD	(門伝 好司)	103
3) 第一勧業銀行	(丸山 恭司)	104
4) 関西ペイント株式会社	(沢武、妻ふみ子記) ...	106
5) Nikko Electronics Toy Pte Ltd	(前田 洋一)	108
6) NEC エレクトロニクス・シンガポール	(鶴殿 幸夫)	109
7) 寺崎電機 (遠東) 私人有限公司	(吉田 武司)	111
8) 凸版印刷シンガポール	(桜井 浩)	112
9) 岩谷産業株式会社	(河村 光章)	114
10) 精工精密 (新) 私人有限公司	(林 久晃)	116
11) 三井倉庫シンガポール	(水野 茂)	118

海外に於ける日本人社会

丸紅（株）

支店長 名取 幸男

商社マン生活 34 年間、3 度目の海外駐在が当国シンガポールとなり延べ 13 年目が進行中。駐在生活を通じて感じた事の一つに日本人一人一人の振舞いが、日本人社会全体に与える影響が少くない事があるので、私の体験と観察を書き出してみた。

第一回目の海外勤務地は、米国サンフランシスコ昭和 41 ～ 46 年の勤務であった。当時の駐在員が苦勞した事の一つは、お客をどうにか招く事が出来る部屋数もあり、家賃、敷金共に程々の家を探す事であった。当時は家族呼寄せは、駐在後一年、且家賃込みの海外給与水準も低い時代で、日系二世を含む中堅の現地雇員家族の住宅の方が我々の借家より良いものが多かった。

その間、私を初めとする当社の駐在員が気が付いた事は、家主が日本人海外駐在員の入居を好み、割安にしてくれる処があるという有難い現象であった。原因を調べてみると、日本人借家人に対する見方が、

1. 家賃の支払いがきちんとして滞留しない事
2. 子供への躾も良く、家の中を汚さずに住む家庭が多い事、且隣近所に迷惑をかけない事
3. 汚しても、去る前に補修弁償をして行く事となっていた

要は日系の一世、二世に始まり、我々より先住した幾多の海外駐在員が、良き行動規範を保ってくれていたお蔭で、日本人社会に対する評価も向上していた。海外では、個人も日本人社会全体を考えて振舞う事の重要さを、再認識したひとこまであった。

二回目の海外駐在は、昭和 49 ～ 53 年間の南阿ヨハネスブルグ、日本人に対する名誉白人待遇が浸透しつつある時代であった。（名誉白人扱いとは、一口に言えば選挙権は無く、不動産所有権・婚姻に関する制約を除き、白人並みの取扱いと理解戴き度い。）

浸透しつつある時代の例に洩れず、私自身不愉快な思いをした事もある。

即ち国営の南阿航空を利用した際、機内の白人席はガラガラに空いているのに、非白人グループが固まって坐らせられている直後の座席しか与えられなかった。（名誉白人は異る筈と述べても通じなかった。）レストランの座席の割当も然りで、駐在の初期は座席が空いているのに、予約済と称し、良いコーナーは与えてくれなかった事を記憶している。

一番困ったのは、日本人を締め出すゴルフ場が頻発する事であった。その原因の大半は、120位叩くプレーヤーが混りプレーが遅くなる事、時にはデイボットも直さず、ラフのボール探しに時間をかける日本人が居た事である。（対策として、グロス108以下が定着しないプレーヤーは土・日のプレーを御遠慮戴く事、プレーヤー同志の申合せでパア3なら6迄、パア4なら7迄、パア5なら8迄の打止めを適用し、各ホールのプレイ進行を速めたものである。）この対策を採る会社が増えても自分達のグループの事しか考えない人も居る為、週末のコンペはロング・ドライブを要する郊外のコースしか使えなかった事を記憶している。

この様な南阿ではあったが、日本人に対する取扱いは目に見えてよくなって来た。その原因の一つは、日本人の間でお互に助け合い且地元の人達に批判されない様に行動する意識が強かった事、二つ目は最大の原因となるが、日本の経済力向上の御蔭に尽きる。即ち日本の工業力の拡大は、南阿の資源開発産業成長の一因となり、又技術導入を含む日本からの資本財の輸入は、欧米からの資本財輸入と相俟って、南阿の輸入代替産業の増加と輸出産業の国際競争力向上に寄与する処となったのである。この結果、南阿・日本両国の経済的相互依存の重要さが、地元企業の従業員の家庭に迄浸透し始めた為と言えよう。

今私は、昭和61年から始まった第三回目の駐在をシンガポールで経験しているが、前二回の駐在地に比べ、当地は社会的・経済的制約が少い。又日本の経済力・工業水準・MANAGEMENTの手法等が評価されているが故に、日本人社会に対する風当たりも穏かである。然し乍ら日本の存在価値、必要度が薄れて行く時、我々への待遇も変る事も心しておくべきである。

確かに、近年の日本からの欧米への投資は、貿易摩擦の緩和や保護主義への対処の比重が高いのに較べて、東南アへの投資では、昭和50年代迄の各

国の資源開発や輸入代替産業中心から、近年は輸出産業への直接投資が急増し生産基地化への色彩が強い。日本が各国の工業製品を吸収出来る市場規模を持ち、品質の向上を促進する技術力と生産管理能力、更には日系企業が日本以外の消費・販売市場も提供出来る事がNIES・ASEAN諸国の欲求と合致しているのが現状であろう。

然し乍ら、このような客観情勢と地元の人達から見た日本への評価が何時迄も続くとは思えない。何故ならば、各国の社会的、経済的ナショナリズムは、高まるであろうし、同じ東洋人である日本人と比較して、一般の人達の生活の豊かさを求める要求も強くなるであろう（一部の大金持は日本の金持よりずっと豊かではあるが）。日本国政府機関の諸施策以外に、民間の日本人社会が、どれだけ地域社会へ融和交流し貢献しているかがより重要になって来る。

このような観点から、日本人会の会友部、婦人部、倶楽部、カルチャークラス、運動部、食堂部、クリニック其他同好会を通じての日本の紹介と地元社会との交流が、在星大使館の後援下に拡張しつつある事は、日本人会理事の一員として、同慶の至りである。特に婦人部の多数の有志の方々の汗と労力の賜物であるラッキー・ドロート、バザー活動による当国コミュニティ・チェストへの寄付、更には身体障害者に対するボランティア活動には深く敬服している次第である。又、これらの活動に対する日系企業を中心とする経済的支援、各理事の会社の方々の奉仕と日本人会事務局の補佐も相俟って、地元根を下した諸活動の輪が広がりつつある。

時恰かも、シンガポール日本商工会議所は、1990年7月の創立20周年記念行事の一環として、当国でのJCCI・FUND（商工会議所基金）設立を理事会に計り企画推進中であります。本基金は中・長期に亘り（イ）日星文化交流（学術・教育・芸術・芸能・スポーツ）（ロ）当国社会の文化振興に寄与するもの（ハ）当国政府機関の特別記念事業に係るものへの拠出を選択し、出来るだけ多くの日系企業から募金を戴き、税務問題を解決した上での実現を目指しています。

当地に駐在していても、個人的なメリットが薄ければ、日本人会に入会し

ない一部の単身者や家族の方の存在や、心無き日本からの旅行者の振舞も散見されるが故に、我々が当地で経済活動を認められているお蔭を忘れずに、官民一体となって、地元の人達への交流・融和と共存共栄を強化して行こうではありませんか！



シンガポール—きのう、きょう、あした

サンケン・シンガポールPTE LTD

門伝 好司

・きのう

シンガポール赴任に当り、上司から一言。「大トカゲ、コブラの類いは当り前。時には虎も出るから窓を開放して寝るなんて無用心な事は絶対にしないように。」とまるでハリマオの世界を想起する注意とも激励？とも取れる話。

バヤレバ空港で何も知らぬ図々しさで3ヶ月間のビザを申請、その通りの発給を受け、覚悟して来たハリマオの世界へいざ、と思いきや窓を開ける事も叶わぬ高層ホテルへ。

入社したての新米サラリーマンの仮住いとしてはあまりに広い部屋と、大きな、そして余分なベッドを見て、何が虎か！？

・きょう

大トカゲもコブラも、時には大蛇も見ると。ゴルフ場での話しである。虎は極く稀に動物園で、だが比較的頻繁には市街で見かける。夜半が多い。

我元上司殿はきっと体験上、可愛い部下がシンガポールで怖い目を見なくて済むようにと、親心から忠告して下さった筈だ。その相手がまさかハリマオを思い浮かべるとは考えなかつただけなのだ。

そうと判った時はすでに遅し。

・あした

シンガポール政府の尽力で害虫、毒蛇、猛獣の類の駆除が進み、ますます快適な生活をエンジョイするようになる。

ゴルフ場での恐怖は正に青天の霹靂以外の何物でもなくなる。道具も進歩する。腕も上る（と願う）。被害も減少傾向を辿り、逆転の可能性すら秘めている。言いは易しである。

残る脅威は？後悔先に立たずである。先達の訓話を思い出しながら自重あるのみ。何しろ体験に則る貴重な一言は年月を越えて活きているのだから。そうですよね。上司殿。

大阪—シンガポール—子供達

第一勸業銀行

丸山 恭司

私が勤めている銀行は、東京が本店で、シンガポールに派遣されてくる人は、たいてい成田から、JAL 719 に乗って当地にやって来る。しかし、私は大阪出身で、大阪勤めも長く、シンガポールにも伊丹から、JAL 713 に乗ってやって来た。初めての海外勤務であり、チャンギ空港に夕方着陸した時は、見知らぬ他国の空港の建物をながめながら、不安で心細い思いをしたものである。

ところで、シンガポールは日本の中でも、大阪とのつながりが、とりわけ長いらしい。それかあらぬか、シンガポール日本商工会議所の事務局長は、現在の石川さんを始め、代々、大阪商工会議所から派遣されて、来られていると聞いた。大阪なまりの言葉も、当地では時々耳にする。私にとっては、シンガポールは気やすくすごせるいいところと言わねばならないであろう。

さて、そのシンガポールでの生活であるが、これは親よりも子供がエンジョイしているようである。充実した日本人学校で、安心して生活している。これは、もとより、先生方を始め、関係者の方々の努力のおかげであり、親として、こんなに有難いことはない。

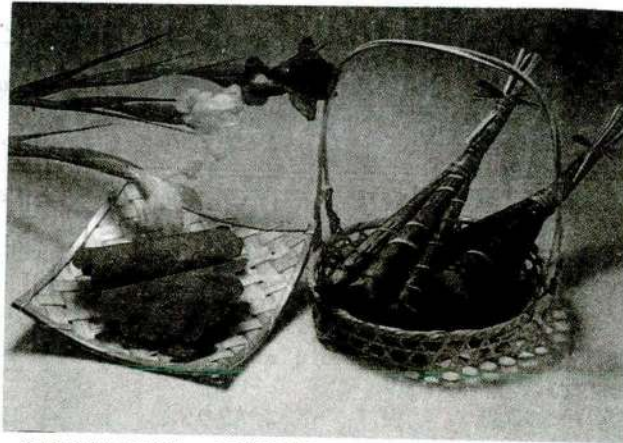
ところで、親としての、思わぬ余禄もあった。というのは、毎週日曜日の午後、子供達のソフト・ボール・チームのコーチ役のようなことを引き受けているのであるが、我が子を含め、子供達とのコミュニケーションに大いに役立っている。（少くとも、親はそう思っている訳である）

こんなことは、日本にいては、まずやらなかったであろうと、断言できる。外地勤務のそれもシンガポールなればこそであろう。

その子供達も、親の転勤に伴なって、次々とかわった。新しい子も入ってくる。私も、老いた両親の住む大阪での勤めが、いづれ又あると思っているが、シンガポールでの子供達との交流が、なつかしい思い出となるであろう。

それにしても、ソフト・ボール大会を始め、このような親子の交流の場を設けて下さっている、日本人会の関係者の方々には、心から感謝をしている次第である。そして、長い年月のあいだには、いろいろな経緯があったにしろ、再度、日本人と日本人社会を気持よく受け入れてくれているシンガポールに、心から感謝をしたい。これは、我々異国人が、地元の学校の広いグラウンドを借りて練習をしているときなどに、しみじみと感じるものである。

大阪とシンガポールの厚意が未長く続くとともに、引いては日本とシンガポールのよしみを、子供達が引きついでいってくれることを期待している。



KASHIWA-MOCHI and CHIMAKI, sweet rice dumplings

“或る妻のシンガポールと生活”

関西ペイント株式会社

駐在員 沢 武 妻ふみ子記

「この子供たち、全部お宅のお子さん？」と言われる程、サイズのあまり違わない、1 M 足らずの子供が3人います。顔も三人三様で、あまり似ていません。

ほっぺのよく膨れた、三角おにぎりの様な顔で、いつもハッピーなのが長女、5才。それと対照的に、顔が小さく、後頭部が張り出して一見「ガイジン」扱い、泣き虫の次女、5才。もうひとり一段とミニサイズで体型がまだ赤ちゃん的にポッチャリ、幼ないながら状況把握に一番たけ、姉達の間をうまく立ちまわる三女、もうすぐ3才です。3人とも、生まれも育ちもシンガポールです。

この3人のお母さんが、実は私なのですが、'84年に夫について来星し、その年の終わりに双子を出産、2.2 kgと1.75 kgの未熟児の赤ん坊を2人迎えた生活は、てんやわんやでした。ひたすら授乳、おむつの交換、ダッコして寝かしつける、の繰り返しで、毎日の睡眠が1〜2時間という、アイドル顔負けの忙しさが2〜3ヶ月続きました。その後も子供のケガや病気で夜中に病院にかけ込んだことも何度かあり、私が過労で入院したりといったゴタゴタはありましたが、何とかこれまで無事に過してきました。5年前にひとつのベビーベッドに並んで寝ていたふたりは、今、今年開園した日本人幼稚園に通い、'87年に生まれた三女は、中国人の先生と、大多数が西洋人の子供達に混じって、英語の歌を歌って帰ってきます。子育て戦争もヤレヤレ一段落という感があります。

夫の会社の駐在員も、今はガラリとメンバーが変わり、9人全員が家族同伴の大所帯ですが、2年半前までは、6人中4人が単身、しかも子供はウチの双子だけという身軽さでした。そのせいか、とても家族的な雰囲気があり、皆さんがよく訪ねてきて下さったし、私の怪しげな料理の実験台にさせられ

ることも度々で、その都度子守りもしていただいたものです。また単身者の家族の方々が来られれば、必ず歓迎会をして、観光やお買い物のお手伝いをしたり、楽しくお伴させていただきました。私も赤ん坊たちを抱えて、そんな機会でもないとお出かけることがなかったのです。実際それ以外にも、シンガポールという所は、実に来客の多い所で、毎月いろいろな方が日本から来られます。その度に何日間か皆さんの外食が続いたりするわけで、それがまた中華をはじめ、おいしいものですから、私の知る限りでは、ここで痩せて帰った方はいらっしゃいませんね。

こんな風に、私事でも、夫の会社関係の事でも、事情はどんどん変化して行くわけですが、日本人から離れてシンガポールを見てみるとどうでしょうか？古くから人々が住むカンポンをどんどん取り壊してビルを建て、そこに住んでいた人達はHDBフラットにと、外観はどんどん近代的に、都会的に、能率的に変わって行きます。しかし、カンポンから突然きれいなHDBフラットに移った人々は同じ人間であり、生活まで突然変えられるものではないでしょう。政府は罰金制度などで繕おうとしている様ですが、何か割り切れない感じがあります。その辺のギャップから来るものでしょうか、「マナーの悪い人が多すぎる」という感じだけが、この5年半の間、変わらなかったようです。一見、都会的、文化の高そうなこの国の、本当に残念な一面です。これだけ様々な人種がいて、各々異なった習慣と生活を持っているわけですから。それを統制するのは確かに難しい仕事とは思われます。

そうは言っても、「住んで都となった」シンガポール、これからも是非、外面的にも内面的にも発展してほしい、と願っています。

シンガポール—きのう、きょう、あした

Nikko Electronics Toy Pte Ltd

前田 洋一

私がシンガポールに来てから早いもので一年が経ちました。

昨年9月頃、シンガポール勤務の辞令を受けました。期間は約5年、10月に行つて欲しいとの内容でした。この時、私は26才、独身でしたが、出発までの1ヶ月間で、婚約、入籍を済ませ半独身となりました。

この状態で一人シンガポールに来た訳ですが、当時は言葉も不自由で仕事においても聞き取れない、話せないで電話が使えず、よく工場の中を歩き回り、書いたり身振いで何とか理解してもらっていました。

又、私生活においても当初は車もなく出かけるのも大変で休日もアパートにいる事が多々ありました。

おもしろいもので、同じ雑誌、同じビデオソフトを繰り返し観る事がしばしばありました。

日本では同じ物など2度観てしまえば飽きてしまいますが、こちらでは、それしか観る物が無い為、自然と観てしまうのですが、不思議と飽きずに数回観てしまう程、何もする事が無ったように思います。

そして、当所の予定通り、今年の4月に一時帰国し、結婚式を済ませ、4月中頃再びこちらへ来ました。新しい生活におきましては、朝、晩の食事が飛躍的に充実した反面、ただ寝るだけの部屋から生活の場となり、会社プラス生活となった訳ですから大変でした。

まだまだ仕事も十分こなせないまま工場は最生産期に入り、又、新生活においても、不慣れな工地で言葉もろくにわからず、文句を云う事も出来ませんでしたので、妻にとっては大変だったと思います。時々口論する事もありましたが大分、妻自身自分を抑えていた様です。現在は、妻も英会話学校へ通う様になり、友人も増え日本の時の元気を取り戻した様ですが、逆に友人の家庭と比較され注文が増え冗談で「学校に行かせるのではなかった。」とっている所です。

そして近い将来は、たぶん三人での生活が始まると思いますが、今はどうてい想像する事が出来ません。子育てにおいては、日本より環境が良いと思われまますので、元気な子供が育ちまた一つ苦勞が増えるでしょう。

こども達のバス通学とボランティア

NECエレクトロニクス・シンガポール

鶴殿 幸夫

日本人学校協同組合（小中学校通学バスの運営といった方がわかりやすい）の理事をおおせつかって1年半、色々な事を勉強させていただきました。現在、当組合では59台のバスを毎日運行し、約2千名のこども達の送迎を行っています（因に、シンガポール日本人学校の生徒数は世界最多です）。利用者の家族、学校関係者の方々の御理解もいただき、今日迄大きな事故もなく運営できていますが、運行を実際に支えてくれているのは、約60名のバス委員のお母さん達です。組合の設立が1976年ですから、過去には500名以上の方々が運行に携って来てくれたと思います。大勢の方々の協力無くして、これだけの組織は作れなかったと思います。先輩方の御苦勞には頭が下がります。

バス運営活動を通じて私が痛感したことは、「ボランティア精神」の大切さです。人々のために奉仕する気持がいかに大切かということです。朝は全員を乗車させて送り出す。午後は帰着の確認。バス代の集金と管理。新規加入者へのオリエンテーション等、バス委員はかなり時間を必要とします。当組合の理事会では毎月色々な問題が出されます。問題点はできるだけ組合発行の「バスジャーナル」に書かれ、利用者の家族の方に協力を訴えています。が、なかなか全部解決というわけにはいきません。こんな事が最近起きます。

- ・塾に通うために、帰りに自分が乗ることを許されていないバスに乗り込むこども。
- ・バス委員に注意を受けた腹いせに、バス委員のこどもをいじめる子。
- ・バスが満席で乗れない地域のアパートへ越して来る人々。

まだまだ挙げれば切りがないのですが、この様なことが頻繁に起こります。住宅事情、限られた環境等、種々の原因は有るのですが、根本はエゴイズムに起因しているのではないのでしょうか。バスの運営は協同組合です。利用者

の家庭が協力しあってこそ運営がスムーズにゆくものです。家庭でのしつけも含め、お互いに迷惑をかけないという気持を持つことが大切だと思います。たとえバス委員でなくても、運営に協力してゆこうという気持が、私はボランティアの精神だと思うのです。

過去3年間、利用者数は着実に増加しています。小中学校では、校舎の増築を進めています。バスの運営も次第に大きな組織になってゆきます。個々の家庭の役割が重要になってきます。私達が、今日安心してバス通学をさせられるのは、先輩達が築いてくれた組織のおかげでも有るのです。ですから、これを更に良いものにして、次に利用される方々に引き継いでゆく責任があります。正直申しますと、私も軽い気持で理事の仕事を引き受けてしまったのですが、お母さん達の熱心な仕事ぶりに刺激を受け、自分の責任を再認識しました。これからも、お母さん方と一致協力して、こども達が安全に楽しくバス通学ができるよう、またボランティア精神の一端を学べるように努力したいと思っています。



シンガポール—きのう、きょう、あした

寺崎電機(遠東)私人有限公司

吉田 武司

私ども家族がここシンガポールに東京は池袋から来島し早くも1年になるうとしており、その間に浅草の三社祭、神田祭、私ども町内の永川祭りとすぎ本年初めて肩の痛みがない年となり、自分自身では何か物足りない感じがしないでもないこのごろです。

さて、ここシンガポールにも多くの日本食が在り私どもも何度か外食を行なうのですが、食する物全てと言わないまでも、ほとんどが大阪の味と決めても過言でないくらいです。私の妻は大阪生まれで20年間大阪ですので(16年間東京)別に味に関しては何んとも思いませんが私と私の長男航はけっこう味にうるさく何を食べても大阪の味がする、味付自体が大阪であるなどまるで大阪のいなかのおばあちゃん家に来ているみたいだと航が言っていました又オーチャード等歩いていると日本人と一目でわかる人も大阪弁で話をしていることが多く聞れ、私ども東京の者としては何か大阪に来ている様に思えたしだいです。大阪だ大阪だと思い“リトル大阪”だと思っていたここシンガポールも9月をすぎるとツアー客も少なくなり、なんとなく本来のシンガポールにもどった感じがし私どももここシンガポールの味になれたのか別に何んとも思わなくなりつつある今日このごろとなりました。

しかし日本の味ばかりではここシンガポールに来たかいがありませんので日本の味よりシーフード、チャイナ、ステーキ、ロシア、ベトナム、タイ、マレーシア、インド、インドネシア等々いろいろな味にトライし私、妻、航、三人でここシンガポールを第2のふるさととしてシンガポールの味を満喫、貴重な体験をしたいと思うしだいです。

仕事(寺崎電気配電盤製作所)とはまるで違う内容ですが人間が生活する上での衣食住の食から見てみるのが一番楽しいと信じている私です、又2年後の一次帰国の際は東京の味を満喫しジャイアンツの2年連続優勝を祝う予定としている私です。

身 辺 雑 感

凸版印刷シンガポール

桜井 浩

シンガポール。私共はこの地に来て7年が過ぎました。私はそれより1年早く来ていましたので、12月24日の夕方チャンギ空港で家族を迎えた時は、無事に着いたという安堵感とはたしてこれから生活していけるだろうかという不安感とが一諸になって、先代助六の操り人形になっているような気分でした。クリスマスはからっ風の吹きまくる冬、半袖だけでも汗の吹き出てくるここ、空港ロビーに出て来るのが冬か夏かと思い巡らせている間に、全くしゃれっ気のないジーパン姿が目の前に現れてしまった次第。これは初めての海外体験であり、おそらくジェット機での旅そのものもそうだったのでは。成田とチャンギの比較なんぞの出来る筈はなく。

「ずい分きれいですね！そして、暑いわね」多分椰子の立ち並ぶ海辺りに駄々広い滑送路、足裏に焼きつく舗装してない広っ原をてくてく税関まで、と思っていたのにと云った顔付き。これはバヤレバ空港に降り立ったことのある、こちらの僻みだったのでも。

子供たちは日本人学校に入ることができました。丁度クレメンティにできたばかりの新校舎で、立体交差でなくまだ十字路だった時、1月だというのにプールに入れられてまたたく間に真黒になりながら。

「ほんとに暑いですよね！水泳してると汗かいちゃうんだから！」
なぞと一流泳者なみの台詞を吐く始末。でも親の方は、中学を卒業したらどうさせようか、日本へ一人ぼっちで帰そうか、全然話せない英語の高校へ行かせようか、第一入学できるのかと。3月卒で9月入学までの半年間。

「やってみよう！」

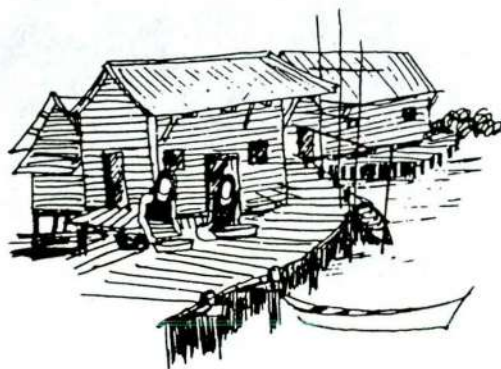
とやった結果、できました。その次も、又やってみました。そして今年、次の次もやってみました。最初と次はすでに日本へ帰り、一人は学生、他は来年受験。それにしても、こちらの学校は、学生監が一人一人の生徒の能力・

努力をよく観察して非常にうまく指導してくれました。

この間に住居は3度変りました。セミデタッチの4DK。両親・兄弟・親戚の誰かが来る度に、満天の南十字星を仰ぎながら、日本ではとても賄えない材料でバーベキュー。でも家賃の値上げに追い出されてマンション住いとなってみると、これは又別な楽しみがいっぱい。当り過ぎのテニスボールがスカッシュルームに飛び込んで、跳ね返ってプールにザブン。

「あーあ、ボールも暑すぎるんですよね！」そして、その後はサウナでむし焼き。

これは全員気にいって、その上2階から4階にひき移り大いに楽しんでいるのが、現在です。

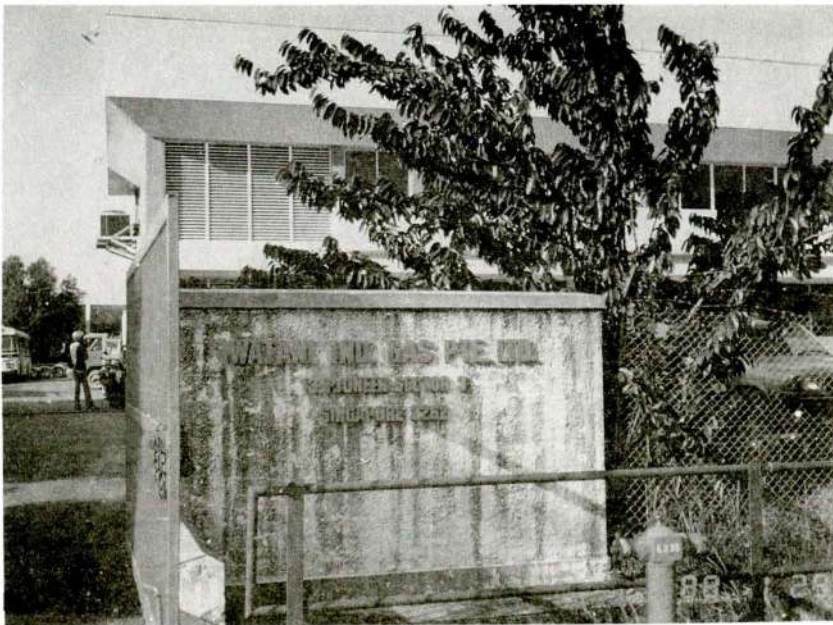


シンガポール—きのう、きょう、あした

岩谷産業株式会社

河村 光章

1. 始めてシンガポールを訪れたのは、1974年4月であった。短期の出張ではあったが、他の東南アジア諸国との顕著な違いが「ああ、いずれこの国に住むことになるのかなあ」と何となく感じさせた。これより3年前、'71年に岩谷産業の駐在員事務所が開設されており、又イワタニ・インダストリアル・ガスは'81年2月に合弁事業としてスタートした。'74年以来、5～6年間、年に数度当地を訪れる機会にめぐまれた後、仕事の都合もあり、私とシンガポールの関係は、薄くなりつつあった。



玄関と事務所建物

2. 1987年5月、久し振りにシンガポールの地を踏んだ。'70年代後半との違いに驚かされた。特にマリーナ地区に。そして、駐在という予感が又頭をよぎったことに。

'87年8月、ついにイワタニ・インダストリアル・ガスに赴任という形で私と私の家庭のシンガポールでの生活が始まった。毎日暑い暑いところぼしながら子供達は日本人学校を中心とした生活圏で、又妻は妻で自分の

生活圏の中で、私は会社を中心とした生活圏で、それぞれに、時々日本と比較しながら、シンガポールとつきあってきた。まもなく、長女は高校入試のため帰国となる。



日本人中学校の
プログラム交換
学生（左端）を
受け入れ（私の
家族と）

3. シンガポールでの生活があとどれくらい続くのであろうか。いずれこの地を離れる時がくるであろう。当社はここで営業を続けていかなければならない。会社とシンガポールのつきあいは永久的に続くであろう。私達家族にとってもやはりシンガポールという国は永久に頭の中に残るであろう。良い意味でも悪い意味でも永遠にひきずっていく事になるだろう。特に子供達にとって自己形成の真只中での当地での生活は将来に大きな影響を及ぼすであろう。様様かつ多大なインパクトを与えたくれたシンガポールに深謝深謝！！

又J C C I 創立20周年記念号に拙文が掲載される事に感謝感謝！！
何年か後に又訪れてみたい国である。新たな驚きを与えてくれる国である。
最後に駄洒落風に一句
〔星洲、幾星霜、あき来らず〕

シンガポール雑感

精工精密（新）私人有限公司

林 久晃

一応の心構えは出来ていたものの、いざシンガポール赴任の辞令を目の前にすると戸惑を感じた。瞬間的に頭に去来したものは家族の顔であった。やはり単身赴任するしかないか。食事はどうする。病気になったら、等々の不安が走馬燈の如く頭の中を駆け巡った。この瞬間は今でも強烈な印象として残っているが、その後の来星準備期間中は、多忙なこともあって、今では記憶に残らない程順調に進み、88年5月30日、めでたくシンガポールに到着した。

それまでに、シンガポールには出張で2回来ていたもので鮮烈なカルチャーショックは受けなかったものの、いざ当地で何年かを家族と別れて暮すと考え、複雑な気持ちになった。しかしこの時点では、あきらめも手伝ってか不安というより、未知の世界に臨んでの期待感あるいは解放感の方が強かったように思う。

アパートは事前に決めておいたので、早速周囲の立地調査、生活必需品の調達と、シンガポールに赴任される全ての人と同じパターンで在星生活が始まった。それにしても、何んと略字の多いことか。MRT、CBD、PUB、挙げるときりがない。考えてみると日本でも同じであるが、異文化の中でひととき異様に感じたものである。キャッシュディスプレイの使い方がわからず、もたもたしているうちに、カードが機械に取りられ泣きべそをかいたこともあった。色々な顔、色々な言葉に戸惑い、又時には恥もかきながら、次第に心が安定し、自分の生活リズムを感じられるようになったのは3ヶ月も経った頃であつたらうか。生活環境が実に良く整備されており、何も不自由はなくなった。

出張で2回来ていたものの、シンガポールについての知識はゼロに等しく、このチャンスも利用してシンガポール研究を始めたのも、この頃であつた。早速本屋に行き、SINGAPORE FACTS AND PICTURE

1988とSINGAPORE 1988をもとめ、まず関心のあった教育の項から読み始めた。また英会話を教えてもらっている小学校の先生に現場の事情を聞き、次第にシンガポールの教育システムがわかり、日本以上にすさまじい受験戦争を知るに到った。ガーデンシティータイズの教育事情の特集が大変役に立った。次に文化、歴史、政治を読み進むにつれて、シンガポールの輪郭が分かりはじめ、優れた点、問題点がおぼろげながら分かってきた。

4千年の歴史を持つ中国人が大半を占めるシンガポールではあるが、独立24年で、国自体は歴史が短い。しかしNIE Sのトップ国として近代化の最先端を疾駆していることは様々な統計が証明している事実であり、R & D製品開発、O H Q戦略の展開など実に壮大な実験にチャレンジしている気魄を強く感じる。企業としてはJob Hoppingは頭痛の種であるが、労働力の移動性と柔軟性はシンガポールのダイナミズムのあらわれとみたい。日本に比べて一概に否定するわけにもいかない。

一方、現地の人との狭い付き合いで、認識不足を承知で、あえて言うならば、一般教養として、歴史に関心を持つ人が少ないように思う。多民族国家の難しさでもあろう。この歴史のなさ、歴史への無関心が今後シンガポールにどのように作用するのかは不明である。

現在は指導者にめぐまれ、国民が一体となって、国の発展に邁進し、将来は明るいが、いつの時か何か事があるとすれば、それを解決し、発展を続けてゆく鍵はやはり、強力な指導者と国民の一体感であると思う。

シンガポール—きのう、きょう、あした

三井倉庫シンガポール

水野 茂

1982年10月某日、時の国際部長に呼び出され、「君には以前香港赴任が有り得ると言っていたが、来年1月1日の辞令でシンガポールへ行ってもらふ事になったので至急その準備に入る様、特に君の英語はひどいのですぐに会話学校にでも通って最低限の会話ぐらい出来る様にして置く事。」と言う内示を受けた時、唯一回の旅行経験だけから香港赴任にあまり乗り気でなかった身重の妻をほっとさせる事が出来る安堵だけではなく別の喜びがありました。それは、1919年（大正8年）から当地に入り終戦迄ゴム園の仕事に従事した祖父、その祖父に嫁ぎ母以下3人の娘を当地で出産した祖母、幼年期を過した母、駐在員として当地に入りここで従軍した父と、二世代に渡った係わりを持ち、それぞれが、懐かしい思い出を持っている地に、今度は自分が赴く事になると言う喜びだったのです。

しかし、いざ赴任してみると、付け焼き刃の英会話は通じず、地元スタッフの言っている事もまるで機関銃の様でさっぱり聞き取れないと言った当たり前の苦勞の他に、当地でどうしても出産させたかった為に、6ヶ月の身重の妻と1才半の長女を赴任後わずか5日後に呼び寄せたものですから、私だけではなく妻子にとっても、次女が無事生まれほっとする迄の間、相当大変な日々だったと思います。振り返ってその頃の数少ない写真を取り出して見ても、長女は暗い顔をしていましたし、私と妻の顔も引き攣った様に写っているのがほとんどです。

それからほぼ7年が過ぎようとする今、当地産の次女は、来春の小学校入学を前にすくすく元気に育っていますし、当時人見知りをし口数の少なかった長女も、日本人学校で多くの友達を見つけ毎日楽しい学校生活を送っています。又、出産当時の体重はそのままと言う問題は有るものの、妻も、当地で始めたテニスの所為か、時折りフィリピンのアマさんと間違われる程黒く

なって健康的な生活を送っています。私自身も、赴任当時とは質的にも量的にも著しく異なる日々の会社業務に押しつぶされそうになりながらも何とか、酒とスポーツで逃げ道を作り、ほぼ順調な毎日を過ごしています。

しかし、あまりにも日々の生活に慣れ親しんでしまった現在、当地にも長く駐在され、数年前に帰国された、人生大先輩の、「私は、随分と色々な国にも駐在し、それぞれの国でも長く過ごしましたが、常にここは外国だと言う事を忘れた事はなかったし、我々はそれぞれの国の軒下を借りて商売をさせて貰っているのだ、と言う感謝の気持ちを持ち続けています。」と、言う言葉を、もう一度静かに噛み締めてみる必要が有る時期かも知れません。

日本国シンガポール県と、揶揄した人も居る程、当地での最近の生活は、日本のそれと変わらず、いや、一部では日本よりも快適に過ごせる為、つつい外国に居る事を忘れがちで、時には無防備、無警戒になる事もあり、さらに当地の人から見て、知らず知らずの内に顰蹙を買う様な事を平気でやっていないとも限りません。

祖父母の代から次女迄の当地滞在年数を合算すると71年にもなる当地との係わりですが、今一度、先の大先輩の言葉を念頭に赴任当時の緊張感を思い出しつつ、残された駐在期間を有意義に過ごしたいと思う、今日此の頃です。



6. シンガポール事情 (パート1)

1) アジア松下電器	(森 盛頭)	120
2) キッコーマン・シンガポール(株)	(野木 義之)	122
3) 富士銀行シンガポール支店	(市川 舜策)	124
4) MURATA ELECTRONICS (S) PTE LTD	(田中 義之)	126
5) ALTECO CHEMICAL PTE LTD	(佐藤 鉄夫)	128
6) 北陸シンガポール(株)	(若林 守光)	130
7) 山九新加坡(私人)有限公司	(藤井 修身)	132
8) 日興マーチャント・バンク・シンガポールLTD	(植月 貢)	134
9) シンガポール松下無線機器(株)	(大坪 文雄)	136
10) 田崎グループ、JAC シンガポール	(田崎 忠良)	138

5年ひと昔

アジア松下電器
上席副社長 森 盛顕

今年1990年はシンガポール建国25周年、JCCI創立20周年と全く御同慶の到りである。

早いもので私も当地へ着任して5年余を経過しているのでシンガポール建国後の5分の1、JCCI歴史の4分の1余を共にさせて頂いている事となる。

多かたの会員企業の皆様と同じ様に、毎日多忙の内に又四季の無い区切りのはっきりしない環境で仕事を続けて来て、全くアッと云う間の5年間であったと云える。ただ政府の発表する各種経済指標は着実に年々伸びているし、街の様子も近代都市国家として年毎に立派になって来た。

私共のグループでも5年前は製造6社全従業員数4500人、全アウトプット年間5億ドル(S)強のスケールであったものが現在では製造8社となり従業員数は倍、生産高は3倍以上となっている。その間各製造会社の拡張も進展し、同時に工場内の自動化、製造技術の高度化が急ピッチで進み一部では日本国内と全く異なる生産ラインが見られる様になって来た。各社毎に人、物、技術の現地化の目標の下でその製品の輸出拡大も含めてこの国の経済発展に寄与出来ていると思われる。

街に地下鉄が走り、冷房バスの台数が増えショッピングセンターが明るく美しく変わり、多くのブティックが軒を並べる変化と共に私共の製造現場も変化しているのが事実である。

政府との話も特にここ2～3年は製造投資拡大の話題から、技術やソフト高度化の話題に移って来た。地域本社、I P O R & D、教育トレーニング・センター、情報通信センター金融・物流センター等々次から次へと話題が増えて全く忙がしい事この上ない。

“1990年代に先進国の仲間入りをする”とのターゲットで日本の変化

のある意味では2～3倍のスピードで頑張っている当国と共存共栄で歩く（走る）為には全ての面でスピードが必要となって来る。

特に一昨年からは日本から当地への新規進出企業は製造業中心からサービス業中心へ大きな変化を示しているだけに今後の日星経済関係に又新しい局面が展開される事が考えられる。

本年のシンガポール建国25周年記念行事には多くが予定されている。昨年の年末から本年8月建国記念日迄連続して数々の行事が計画されているし、25年後の又新しいビジョンが国民に示される事になるであろう。シンガポールにとって一つの大きな区切りの年となる事は確かな様である。

その後の5年間、当地がどの様に変化しているか具体的に予想する事は極めて難しいが願わくば現在の良き日星関係が維持拡大された姿であってほしいと思う。

日本で云う“10年ひと昔”は少くともここでは“5年ひと昔”であろう。



SW会、きのう、きょう、あした

キッコーマン・シンガポール(株)

野木 義之

SW会はシンガポールの北端、即ち SENOKO 地区と WOODLANDS 地区に拠点を構えている日系7社が、親睦と労務関係の情報交換を中心に、定例的に会合を持ちましょう、という事で結成され、現在も活動が続けている組織であります。

日系7社とは、SENOKO地区（不二製油、日清食品、キッコーマン）、WOODLANDS地区（セイコー、三菱電機、岡本製作所、ニッコー・トイ）で、設立当初は月1回ゴルフをし、その後お互いに意見交換をし、近隣会社という親しさ及び、異業種の集まりという気安さで和気藹々と会は開催されておりました。幸い、7社中2社が商工会議所の理事に選任されておりましたので、会の冒頭に各理事より商工会議所の動きを簡単に説明してもらうのが常でした。

そのうち、トップが交代したり、幹事が多忙だったりして、会が半年程中断してしまいました。

この間に新会社が当該地区に次々と設立され、又、SW会再開を督促する声が増しに強くなって来て、1988年12月に会則を作り直し、会長、副会長、書記を選任し、再発足し、現在に至っております。

現在の会員企業数は15社で、会は次のように運営されております。

1. 隔月に会員企業の見学会及び定例会
1. 隔月に親善ゴルフ大会及び定例会
1. 年来に1年間の行事・決算報告を兼ねて忘年会

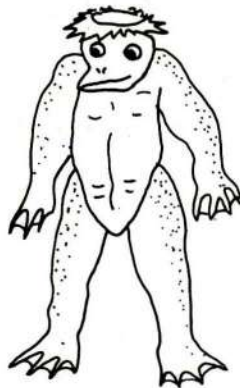
定例会では各企業が具体的に賃上げ、AWS、スターティング・サラリー、雇用状況等順番に発表し、その後意見交換します。

異業種なるが由に発表し易いという事もあり、腹藏なく、フランクに意見交換しますので、知っておきたい情報の入手には、この種の会合は非常に有益であります。

近年、当該地域に進出してくる日系企業は多く、会員企業数は今後益々増えていく事が、予想されます。

会員企業相互の親睦と有益な情報交換がより和やかに、密度濃く出来るよう今後も努力していこうと思っております。

他の地域でもこのような会を作り、お互いに切磋琢磨し、情報交換する事により、商工会議所の各種部会のサブ・コミッティー的な場として、生きた情報の入手源として、活用できるのではないかと思います。



KAPPA, the river boy

マーケット恐怖の日

富士銀行シンガポール支店

市川 舜策

1985年8月下旬、シンガポール・ドル直物為替相場は米ドルに対し軟調の度合いを強めていた。度重なる通貨当局の警告にもかかわらず、市場は米ドル買いリード一色。投機筋も加わって泥沼に沈む石のように、シンガポール・ドルは下落していった。

9月3日午前、市場は完全にオーバーヒート。顧客は先を争ってドル買いに走り「某国大口顧客が数千万米ドル買った」「誰も売り手とならない」「チキショー、どこも電話もテレックスもロイターも取らない」「誰もレートを出さない」と聞こえてくるのはディーラーの悲鳴ばかり。

10時、11時。米ドル買いは止まらない。ようやく昼食時間が来たものの、市場の異様なムードに部屋から出られない。

突然、ウォーという悲鳴とも歓声ともつかぬ叫びが部屋中に響いた。全員が立ち上った。持高はスクエアだが不安が全員の心を過る。「何だ。何が起きた」「介入だ。MAS（シンガポール通貨庁）の介入だ。幾らでも無制限にドルを売ると言っている」「介入点は幾らだ」「市場レートより100ポイント下でドル売りを始めたい」「呼べ。他行をどこでもかまわぬから呼べ」

誰もドルを売れないままに米ドルは暴落した。1日で約600ポイント。翌日はまた500ポイント。2日で約1100ポイント米ドルは暴落した。市場では大損害を被ったディーラーの名前が真しやかた囁かれた。

しかし本当の恐怖はその後に来て来た。シンガポール・ドル建預金銀行間金利が驚くべきスピードで上昇したのである。銀行間金利の目安となるOVER-NIGHT物がそれ迄の1桁の金利から、10%刻みで暴騰した。10%、20%、30%、50%、それでも金利上昇は止まらない。従来、資金の出し手であった政府系機関は市場から完全に退いている。全てのディ

ーラーが資金の取り手となっていた。

金利は系の切れた風のようにもうどこ迄行くのか誰にも分らなかった。

70%、80%。ああ到頭100%を越えた。120%もついた。噂が噂を呼び150%がついたとも聞いた。

市場はシンガポール・ドル資金の大きな不足状態に陥った。資金は全てMASにある。彼等が市場に資金注入する迄は、この混乱は続くだろう。誰もが米ドル売り/シンガポールドル買いをせざるを得ない破目となった。しかし誰も米ドルを買う(シンガポール・ドルを売る)者はいなかった。

パニックだった。誰もが予想すらできなかった状況がやって来たのだった。MASがここまでやるとは思わなかった。

100%を越えてからMASは秘かに資金を注入し始めたとの噂が出た。誰もが信じなかった。200%でも300%でも不思議ではなかった。どこ迄金利は上るのか。全員が知りたがったが、誰も分らなかった。MASを除いては。

3日経過した。為替相場は略々1200ポイント下落していた。シンガポール・ドル金利も概ね元の水準近く迄戻して来た。

しかし市場は全くその姿を変えていた。誰もディーリングを積極的にやろうとしなかった。誰もがMASに従うようになった。MASが米ドルを売れば自分も売り、買えば自分も買った。大損害を被ったディーラーが何人か蹴首されたとの噂も流れた。市場は息の根を止められて誰もが自分の穴から出ようとしなかった。新聞は「MAS勝つ!」と報じた。

それから約3週間後、全く同じことがドル/円為替相場で起るとは予想もできなかった。歴史的なブラザ合意が成立し、為替相場の政府中央銀行による管理の強化が始ったのだ。

あれから4年経過した。為替相場は時々刻々変動している。米ドル/円相場は年初来大幅な円安状態が続いている。或る友人は言った。「もうブラザ以来の管理された為替相場の時代は終わった」

本当にそうだろうか。私には政府中央銀行というお釈迦様の掌の上で、我々ディーラーは飛びはねているに過ぎないのではないかと思われてならない。又仲々この掌から飛び出すことは難しいのではないかとも思っている。

4年前、全てはシンガポールから始った。未だ終局宣言をするには少し早過ぎるように思われる。

円高によるアセアンの電子産業の変貌

MURATA ELECTRONICS (S) PTE LTD

田中 義之

私が当地へ赴任して来たのが、85年の初めシンガポールをはじめ、ASEAN諸国の経済が下降線を辿りはじめた時であった。

80年代に入って、韓国、台湾、香港の電子産業が低賃金を積極的な外資の導入、技術の導入でその規模を拡大して行く中で、高賃金と労働力不足のシンガポール、外資の進出に制限策を取っていたASEANの電子産業は、他のNIESに比べ、大きく差をあけられていた。

85年の景気の後退は、欧米企業の大量のレイオフや、工場閉鎖、日系企業は、生産の大巾縮小等を余儀なくされ、他のNIESとの格差をさらにつけられようとしていた。

このような状況下で、85年のG7以降に起った、急速な円高は、この地域の電子産業の拡大と構造を大きく変えるトリガーとなった。

円高により、日本製のラジオ、ラジカセ、ヘッドホンラジオ、カラーTV等の民生用機器は、その輸出競争力を失い、NIESへの生産シフトを余儀なくされる事になった。

当初は、シンガポールに比べ、競争力を持っていた韓国、台湾、香港への生産シフトが優先され、次いで、増産体制が整ったシンガポールでの生産が拡大していった。86年に、タイとマレーシアが外資に対する規制を大巾に緩和した事により、この両国への日本からの投資が急増することになった。タイへは、電子レンジ、冷蔵庫、炊飯器等の家庭用機器、電話機、ファクシミリ、コンピューターの周辺機器、ローエンドのオーディオ機器、C-TV、電子部品等の投資が行われ、マレーシアは、シンガポールのCOST高と労働力不足の受皿として、AUDIO機器の工場進出と88年からは、カラーTVメーカー、電子部品メーカーの進出が相次ぎ、シンガポール含め、C-TVの大生産基地となった。89年に入って、VTRメーカーのシンガポール、

マレーシアへの進出が始まり、又、台湾、韓国がこの数年間の大巾な貿易黒字による通貨の切り上げ、賃金の大巾上昇、労働力の不足により、競争力を失い、これらの国から、この地域への投資が活発化しており、今後は、さらに、フィリピン、インドネシアの展開が期待される。

ちなみに、カラーTVの89年度の生産予測は約1000万台で、85年の実績の約3倍、AUDIO機器は7600万台である。5倍に達しようとしている。

此の様に、円高は、シンガポール、マレーシア、タイに於ける電子産業をアジアの中で日本に次ぐ地位まで押し上げる要因として作用し、この地域の経済の活性化に貢献している。今後、シンガポールは、この地域のR & D、マネージメント、ハイテック商品の生産センターとして、更にその役割を高めるものと思われる。



私のシンガポール12周年

ALTECO CHEMICAL PTE LTD

佐藤 鉄夫

私は、1977年9月に日立造船シンガポールのエンジニアリング部門の担当として赴任してきたから今年は13年目の在星となる。そして今年、私にとっては大事件であるが、新たに関連会社として設立されたALTECO CHEMICAL PTE LTDの代表として転出し、在星記録を更に伸ばすこととなった。

なぜかくも長く在星し、また当地で転職することにまでなったのか振り返ってみると、この12年間のシンガポールの経済変化とも大いに関係がある。

日立造船シンガポールは、1970年に船舶修繕業を目的として設立され来年90年にはJCCIと同様に20周年を迎えるが、私の赴任当時は2番目の乾ドックが完成し繁忙をきわめ、まさに日の出の勢いであった。私の部門は船舶修繕部門に対し、陸上のプラントの建設とか、鉄骨、製缶製品等を生産する事業であって日本でも実施されているいわゆる経営の多角化の一環として設立されたもので当地ではゼロからの出発であった。

1985年をどん底とするシンガポールの不況は、船舶修繕業には82年頃からすでに影を落とし始め、84年には最盛期の売上の1/3近くまで落ち込むという一大事がおこった。82年から85年までの4年間で我社の正念場となった。この4年間に痛恨の2度にわたるリトレンチで従業員は半数となり、長く我々と従業員に傷を残し、将来への希望を砕いた。当地の新聞は修繕業等の前近代性を叩き、また供給過剰であると論評し、果ては大手私企業一社不要論まで執拗に掲載され、当地の新聞の力が大きいだけに、一同大いに動揺したものである。経営陣は日夜辛苦、呻吟し、生き延びの方策を模索したが、人員縮少と軽薄短小への方向転換しかないと、脱船、脱鉄産業への方向転換をしようということになった。

この脱船、脱鉄、軽薄短小事業の開発は、いきおい私の担当となり、その

後数年に互り東奔西走し色々な畑違いの分野に首を突込むこととなった。それらの中で実際に日の目を見たものは、コンクリート二次製品への参入、ウォーターフロントと空地を利用したの車海老の養殖、軽薄短小型ハイテク企業との合併事業である。もとより我々に技術ノウハウは無く、技術、営業、マーケティングからの勉強が必要であったが、それぞれ人を得て取組むことが出来た。コンクリート事業は折りからシンガポール最大のプロジェクトであったMRTの建設に合致し、またトンネル部分プレハブ式コンクリートセグメントで設計され、千載一遇のチャンスとばかり猛烈に各ゼネコンや当局をアタックし、特に品質保証の面でアピールが成功したのだろうか、夢の様な話しであるが全トンネルの75%を受注することが出来、その後4年間に互り大いに貢献してくれたのである。車海老の養殖は3年目に入るがまだ技術的に未熟でありまだまだ時間が掛りそうである。そしてハイテク企業と合併事業計画は、約2年間かけて合意に達し、今年日の目を見る事になった。業種は瞬間接着剤の製造販売であり、これまた私の過去とは何の関連も無い業種であるが、しかし双方のニーズが合致し、ここにめでたく日立造船シンガポールが異業種に進出できたのである。ところで、新会社を誰が面倒見るかという事になり、ついに私が転職する破目になったのである。

以上、私の在星12年は、シンガポールの経済成長と共に、悪戦苦闘しながら自分を変革してきたことにつきるが、時々ふとこの超繁栄のシンガポールが古戦場に思え、『強者共が夢の後』のように妙にもの悲しく見えることがあるのは、あまりに多くの日本企業戦士達が、あるいは洋々とあるいは失意のうちに、私の前を通り過ぎていったからだろうか。ともあれ明日はまた陽はのぼり闘いは始まる、企業のために、シンガポールのために。

日本的経営？

北陸シンガポール㈱

若林 守光

当社北陸シンガポール（株）は、１９７９年１１月の設立であり、今年でちょうど１０年を経たことになります。

相変らずの人手不足に悩まされながらも、今年９月には工場も増設し、まずは順調に伸びて来ているものと自負しております。

当社の創立以来ずっと勤めつづけている者が十数名おり、これらの人たちのおかげでずいぶん助けられて来ました。

当社は親会社が雪国の富山にありますことから、シンガポールへ赴任しているスタッフもほとんどが富山県人となっています。

一般に富山県人を評して、『まじめ』『忍耐強い』等の美点と、『不器用』『スマートでない』などの欠点が指摘されております。富山に居る時は同類の人間ばかりで目立たないのですが、外国に来て見ると、「やはり富山県人だなあ」と意識させられることが多くなって来ております。

たとえば、当社はお客様に“NO”を言わないことで定評をいただいているようですが、ひたすらお客様の要請に応じて、朝７時から夜１２時まで、休日なしで４ヶ月間連続して日本人スタッフ全員が頑張ったなどという記録ももっております。

ところが、当社の十年選手たちは、私共につきあってくれるのみならず、時には徹夜してまで頑張ってくれております。

富山県人は、スマートではありませんので危機に臨んだ場合、ひとまずは身体を酷使してでもなんとかしようとしします。このあたりは九州男児である当時の社長からよく「もっと頭を使え」と言われたりするのですが、結果としては着実にお客様の要請に応えることにつながって来たと思っています。

このように身体を張ってやるようなことがなんとなくローカルスタッフの間にも浸透し最近では何も言わなくてもやってくれるようなものも増えて、

コミュニケーションのフェーズも合って来たように思われます。

このような富山県人的やり方が日本的経営の範疇に入れられるのかどうか、はなはだ心もとない所ですが、私共にとって、富山でやって来たことをこちらでも一生懸命やるしかなかったわけです。

当社がシンガポールへ進出した動機のひとつは、世界的市場に対応できる企業に脱皮することでありました。10年をふり返りますと、世界市場への浸透は徐々に達成されつつあるように思われますが、この体質だけはなかなか変わらないのではなかろうかというのが実感です。



シンガポール—きのう・きょう・あした

山九新加坡（私人）有限公司

藤井 修身

シンガポールに暮らして17年、まだまだ先輩の方々も多くいらっしゃいますが全般的にみれば駐在日本人としては最長期の部類に入でしょう。

シンガポールのきのうを語れば必然的に昔に帰らざるを得なくなりややピントの外れた語調になるかも知れませんが私なりに企業活動やシンガポールの人情の移り変わりに触れてみたいと思います。

シンガポールもハイテクがすべてに優先しテクノクラートのみが国家を支えるかの様な風潮が強まっております。そして通信、金融、貿易、R & Dその他いろいろな先鋭的な国家発展構想が打ち出され国民皆がそれに邁進するが如く印象を持ちやすい現在ですが私の様に当地建設労働者、職人、又多くの中小企業者と長くつき合っている人間には活力の原因はもっと下の方にもあり全体のバランスをもっとPRすべきだと強く感じます。

何年か前にタイヤの輸入税が廃止されてブリジストン・タイヤ社が撤退し、自動車部品と完成車の輸入税が同一となったためフォードとバンツの組立工場が閉鎖した時、政府は労働集約型産業は不要と言明しそれ以後合板、布等素材産業がどんどん消えていった。競争に勝てない時代の流れがあったにしろ労働集約型は不要となぜ負けおしみを言うのかと当時私は疑問を持ったものです。

社会は一次、二次、三次産業が効率良く配分されて順調に発展し得るという昔習った経済理論を今も信じている訳で人が集まって体を使い物を造るという事業をないがしろにしていたら将来必ず歪を起し産業の空洞化どころかこの国では100万人の人達が仕事よこせ、米よこせの暴動を起すのではないかとやや大袈裟に心配しております。

シンガポールの人達は本来、自立心と助け合いの気質が強くその点何があっても滅亡はせぬでしょうがそれでも近年のシンガポール人は素朴さと人情

を失いつつある様な気がします。

昔は交通事故を見れば何はともあれ駆け寄って何か手伝う事はないかとウロウロする人達が多かった。又私はそんな男達がたまらなく好きだったので今は“オラ知らぬ”という人種が増えて来た様です。

高い教育とアパート暮らしが気質を変えるのかも知れませんが人間はやはり泥くさく自分の都合を度外視して走る気概というものを持ち続けねばならない、そしてそれを忘れた時その社会は活力を失い衰退に向うだろう、と半ばシンガポーリアンとなった私は昨今の状況を見ながらシンガポールの将来をとりとめもなく憂えております。

ともあれ私達在住日本人はシンガポールの発展に加担してそしてその恩恵を得ている訳ですから、シンガポールのあしたを大多数の善良な人々のために健全に保ってゆく社会的な責任もあると、大上段な言い方ですが、心しておかねばならないのではないのでしょうか。



シンガポール—きのう、きょう、あした

日興マーチャント・バンク・シンガポール

植月 貢

日興マーチャント・バンクがMAS（シンガポール通貨庁）より銀行業の免許を受けて駐在員事務所から現在の型に格上げされましたのは1984年の10月でした。

私が香港より赴任して参りましたのは1987年の3月でした。当時の当社の従業員は30名強でした。オフィスも、スタンダード・チャータード・バンク・ビル、28階の半分のフロアーしか使っていませんでした。パン・エレクトリック電機会社の倒産を境にして、不動産市場も証券市場もまだ低迷している時代でしたのでこのビルも借り手が少なく、ガラガラの状態でした。将来の人員増を考え、スタ・チャンからの強い要望もあって、28階の残り半分も借りることにしたのは赴任後間もない時でした。しかし、従業員も65名前後に増加して、グループ企業がシンガポールへ次々と進出したりしている現状では既に手狭まとなって参りました。

87年の10月には「ブラック・マンディ」を迎え、当地も大きな影響を受けました。特に、サイメックスの日経平均株価先物が、我々の想像もつかない5千円という値段をつけた事は、まだ記憶に生々しく残っています。そのサイメックスの「日経フューチャー委員会」の委員長を88年に、MASよりおおせつかったのも、何かのめぐりあわせのような気がいたします。

88年の3月に長女がシンガポール日本人学校の中学部を卒業し、共立女子学園の高等部に入学すると共に、家族も東京へ戻る事になりました。単身生活も一年半余りとなり、やや疲れ気味かなと思う今日この頃です。

シンガポールのオフショア・マーケットも、オンショア・マーケットも急速に拡大し、又近隣のアセアン諸国も急成長をして参りました。当初はローカルの個人、機関投資家に日本の株を買っていただくのが主たる業務でしたが、昨今は日本の投資家に各国のローカル市場に上場されている株式に投資

いただくのも重要度を増して来ています。８８年にはタイに、８９年にはマレーシアにファンドを設立し両国の株式市場に日本の機関投資家を呼び込みましたが、現在のところ大変な成果を得ています。特にタイーグロスファンドは３０％以上の値上りとなりました。日本からの直接投資が続く限り、この地域の成長性は衰えることはないと思われます。まだまだマーケットの規模は小さいのですが、これからの期待は大きいと言えます。

今後は、進出された日系企業の方々へ、各地の証券市場へ株式を上場していただき、進出先で各々資金調達をしていただき、本社からの投資の為替リスクを回避することなどを御提案申し上げたいと思っています。この事は、ちがう角度からみますと、ローカル社員の定着化、福祉、財産形成への手助け、配当による地域社会への利益還元という点からも役立つように思います。

当社の会長の梅村正司が、経済同友会の「アセアン委員会」の委員長をおおせつかっている関係上、私もこの委員会の特別顧問を命ぜられております。この１０月２６日～２７日に、東京において各国からの代表団と日本側との会合が催されます。このような機会に、日本とアセアン各国との関係が、益々深く、強くなっていくものと思います。そのアセアン六ヶ国の中心ともなりつつあるシンガポールとの関係は、更に深くなるものと思われます。

J C C I の役割りも重要度をます事はまちがいないと思います。

創立２０周年のお祝いを申し上げますと共に、益々の御発展をお祈りいたします。

シンガポールと私

シンガポール松下無線機器㈱

社長 大坪 文雄

今を去る10年前の1979年2月が、私とシンガポールとの馴れ初めであった。現シンガポール松下無線の新工場棟の立ち上げ応援に来星したのである。当時私は生産技術担当の主任であり、海外出張も初めて、飛行機に乗るのも初めてということで、女房も、ふ〜んシンガポールねえ……といったあんばいであった。

パヤレバ空港に降り立った時、何ときれいな国かと思ったのも束の間、新工場は沼地の横での建設であったため、毎日泥まみれになって働かねばならなかった。精をつけるためバクテとか亀スープを飲んで頑張ったのを思い出す。3ヶ月の滞在中にいろんな人々とも友達になった。マーシャルアーツの精悍な若者、おみやげ屋の可愛い姉妹小姐^{シヤホチエー}。中国語の歌まで教えてくれたな〜。でもこれ等は、私にとって単なる過去の思い出であった。1988年の12月7日までは……

この日、私は上司に呼ばれ「君イ、シンガポールに赴任するそうやなあ」と言われた。この人はいつもこうである。自分で決めておいて、あたかも人が自発的に決断したような言い方をする。記憶の彼方のシンガポールがまたまた現実の問題として眼前に浮びあがって来た。「行きます」と答えた。

10年前は一担当者であったが、今回はシンガポール松下無線の社長としての赴任である。明確な使命は当然背負わされた。従来の人海戦術路線から脱皮し、超近代工場への大転換を実施せよというのである。シンガポールだから、シンガポールでは、とかいう言い訳は一切無用である。方向が示されたらやらねばならない。

今までも色々やってきた。生産技術から始まって、メカニズムの製造、リアルシステム導入、源泉パーツの生産、経営企画等々、手当たり次第にやってきた。考えてみれば、グローバルは視点が要求される会社責任者としての下準備をはからずもさせて頂いたようなものだ。

なかでも、日本を離れる直前まで私が長をやっていた工場の思い出は忘れられない。この工場は、全社的な合理化政策により職を失った人達を受け入れるのがその役割であった。様々な職場から、様々な経歴、役職の人達が送り込まれてくる。とりまとめるだけでも大変である。しかし工場は工場であり慈善事業ではない。全てを包含しながらかつ効率を追求し利益を生み出さねばならない。シンガポールでは離職率の高さが悩みのタネであるが、離職して頂けないことも涙の出るほどつらいことだってある。

この時も、先述の上司からの大きなビジョンの提示とサポートがあった。最先端の物造りを実現するために、数十億の設備投資を極めて短期間に実践し、徹底的な機械化を推進するとともに、様々な人々の総知を結集し、2年間で世界でも有数のプリント基板組立工場が現出したのである。松下全社で初めての3シフトも実現することができた。

シンがポールに赴任して一年が過ぎ去ろうとしている。この国は努力したら必ず報われるアジアでは数少ない国の一つであると思う。ただひたすら、当然のことを当然の如くやっていきたい。グローバル化、現地化、技術移転、優秀な人材の思い切った登用、心と心との交流、何でもやっていきたい。

若い日にたまたまこの国に立ち寄る機会を得、今、壮年期をこの国とともに過ごそうとしている。きっとできるという信念を持ち、仕事を通して生きがいを実践し、また同時にたとえ小さな一人の力ではあっても、シンガポールへの貢献を実現すべく、シンガポールの人々と心と心を合わせ、手を携えて未来を切り拓いて行きたい。

シンガポール—きのう・きょう・あした

田崎グループ
JACシンガポール
田崎 忠良

初めてシンガポールを訪れ、その後主に冬期に滞在することが、ほとんどルーティン化するまでになり、早や15年となりました。

ロンドンを生活の拠点とする様になり30年を過ぎようとしておりますが、ことさら冬の厳しいロンドンから、当初は避寒だけを目的として冬の1～2週間を過ごしておりました。

毎回訪れる度に正に奇跡と呼ぶにふさわしい著しい経済成長ぶりを目のあたりにし、この“世界の交差点”とも呼べる小さな新しい国にたまらない魅力を感じたものです。元来、家族共々中華料理にはことさら目がないことも手伝って、避寒目的以上のものでこの国に引かれだし、およばずながらも私の力で何かの形でお役に立てることができたらとまでに考える様になりました。

英国に進出された日本企業の方々の為に、不動産・リクルート・日本食レストラン等の面でお手伝いさせて頂く業務に携わっていましたが、特に海外に於ける邦人企業発展には、優秀なLocal Staffが不可欠であることを経験を通じて確認し、そういう形で日本企業の海外での成長進展にわずかながらでも貢献できた事に浴することができましたことは、私にとりまして、至上の喜びでございました。

そこでここシンガポールでも同様に、日本企業の皆様方、又シンガポール経済発展に、少しでもお役にたつことができればと思い、1987年にJACのシンガポール現地法人を設立致しました。

今やシンガポールは、ニューヨーク、ロンドン、東京に次ぐ大きな国際金融都市へ向けて成長しつつあり、私共の使命や責務も増々大きくなろうかと存じますが、特に邦人企業の皆様方のご指導、ご鞭達の上に微力ながら精励努力してまいりたいと存じますので、何卒ご支援下さいます様よろしくお願い申し上げます。

7. シンガポール事情 (パート2)

1) MITSUI OSK LINE	(光川 周治)	139
2) シンガポール郵船航空サービス (株)	(笹渕 誠)	141
3) 栗田シンガポール PTE LTD	(吉田 和矩)	143
4) 伊勢丹 (シンガポール) リミテッド	(稲垣 繁)	145
5) MEIDEN SINGAPORE PTE LTD	(武田 真)	147
6) HITACHI ASIA PTE LTD	(山本 重明)	149
7) 株式会社住友銀行	(市川 敦)	150
8) サンキョー・セイキ・シンガポール	(栗原 正喜)	151
9) 住友商事株式会社	(小佐井 優)	153
10) TOYOTA TSUSHO (S) PTE LTD	(倉知 聖和)	156
11) クラウン・ライン株式会社	(森 幹雄)	159

シンガポールと煙草

Mitsui OSK Lines

光川 周治

9月某日、S I C CでG O L FのP L A Y中に同伴者の一人が私に対して、11月から当地では喫煙者は大変なことになるよ、とニコニコしながらささやいた。(その人はNON-SMOKER)。

私のHEAVY-SMOKING振りを知っている人のBLUFFと思っていたが、間もなく新聞等で発表されると聞き及んで愕然、以后ショットが右に左に微妙にぶれた事は言うまでもない。

私の父親はいつも洋服の左右のポケットに煙草を一箱づつ持ち歩いている程の愛煙家であり、私の幼い頃の父親のにおいは正しく煙草の香りそのものであった。

かくして私も喫煙は永い歴史を持つ。

16才の頃、両親の不在を見すまして"ヒカリ"を買いに走り、庭で一吸、ところがそのショックでフラフラと倒れそうになり、太い柿の木につかまってハハー、そのあと布団かぶって数時間寝込んでしまった事があった。

大学入学と同時にいよいよ本格的に吸う様になり以降ずっと続いている。

結婚後も家内にたしなめられた事数え切れず。数年前に日本で購入したアパートも部屋の壁紙、天井等が黄色くなる程の被害を与えている。

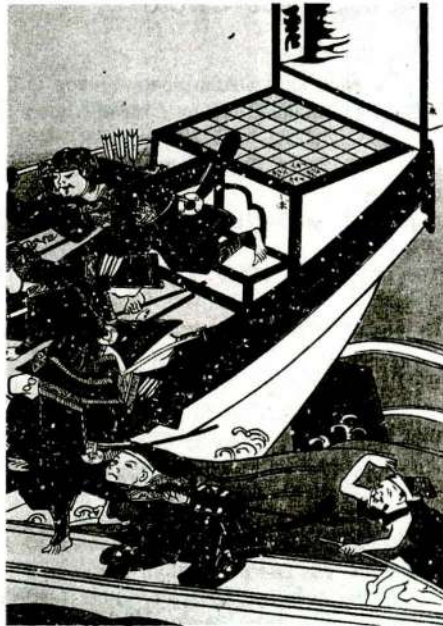
一度、一念発起して禁煙を試みた事がある。正月元旦に念じて4日まで止めた。

4日の会社新年会に出席したが苦しくて苦しくて、そしてガムをかみまくった。これが良くなかった。ガムをかむ内にのどがカラカラに渴き、こうなるともうダメ、つい一本に手が伸び、そうこうする内に4日の晩までに元に戻ってしまった。

私の子供達もボチボチ始めている様であるが親の前科もありたしなめる訳にも行かず放念しているが、斯様な煙草天国に生きる我々にとって今回の政府

方針に今後如何様に対応すべきか全く頭が痛い。

クリーンシティを標榜する当国にとって煙害駆逐は天の声と共鳴する方々も多数居られ様が私の様に、“煙草は仕事の句読点”としつつ永年生きている人間にとって、11月以降、いわゆる“公共の場”でどう喰い、飲み、歌うのか。煙がイケナイのであればカミタバコにするかとも考えるが、あれはアメリカのプロ野球選手がホームベースの前でモグモグ、ペュッペッとやって始めてサマになるものだし、又水タバコにしてもいつも大きなビンとホースを持ち歩かなければならないからこれも不便でダメ、矢張り一本取り出して火を付けて灰を気にしながら吸うのが本流、これなくして今後どう生きて行こうかとおつづく考えると眠れなくなる今日此頃である。



Warrior holding KATANA

空のシルクロード

シンガポール郵船航空サービス(株)

笹渕 誠

シンガポール駐在中に私達は何回チャンギ空港に足を運ぶことでしょう。

御客様の送迎、在星友人の見送り、自分の出張、家族旅行、家族の一時帰国、本社上司や社員のアテンド、時には緊急貨物の引き取り等々……。

ゴルフで100以上たたかない皆様であっても空港通いだけは必ずや100プラスである事は間違いないことと思います。

市中からチャンギ空港まで往復50KMとしても、100回の往復は5000KM以上の大変なドライブをしている事になります。恐らく自宅から職場に通勤する事を除けば、在星中、最も見慣れた景色はイースト・コースト・パークウェイかゴルフ場という事になろうかと思われれます。

これはとりもなおさずチャンギ空港が、空のシルク・ロードの軸となりつつある事を証明していることに他なりません。

世界の地図を見て西洋と東洋とで世界の歴史が作られた過去から、今や南洋の当地、シンガポールは世界の航空網の中心となっています。

東洋のゲートウェイが東京であるならば、

南洋のゲートウェイはもっとオーバーに言えば西洋と東洋のチェンジゲイトはまぎれもなくシンガポールであろうと思います。

現在チャンギ空港への乗り入れ航空会社は50社、週1600のスケジュール便が世界の100都市へと就行しています。

貨物ターミナルの増設は本年3月に完成し、その最大取扱い量は55万トンにもなります。

空港公団(CAAS)は、当初の壮大なコンセプトを発展させながら着々と拡張を重ね世界でも屈指の機能的で美しい空港であるとの評価を得ております。

皆様も空港送迎の途中で御覧いただけます第二旅客ターミナルの建設が佳境に入っていますが、1990年にこれが完成しますと、年間2000万人の旅客利用が可能といわれています。

海外企業の熱心な誘致とASEANへの貿易上の優位性という恩恵と共に、チャンギ空港の完全なオープン・スカイ・ポリシーは、チャンギを旅客、国際航空貨物のハブとしての機能を増々強めさせていっているようです。

1990年2月にJAS、11月にANAの乗り入れも決定しており、現就行のJAL、NCAと共に日本の全航空会社の揃い踏みは世界でもソウルと当地シンガポールだけという事になります。

チャンギ空港の発展と共に、私達駐在員もゴルフの回数をけずってまでの空港通いが増えることになるかも知れませんね。



シロフクロウ (Nyctea scandiaca : スカンジナビアの夜の鳥)

MOTOYAMA Kenji

シンガポールと水

栗田シンガポールPTE LTD

吉田 和矩

水処理の仕事に携わっている関係上、新しく日本から赴任された方からシンガポールの水道水を、直接飲んで大丈夫ですかとよく聞かれます。答えは後回しにするとして、シンガポールの水道水の水源は、(1)マレーシアのジョホール州より供給されている水、(2)島内の各所に設けられた雨水の貯水池の水、の二種類があります。(1)は市街地(大体タングリ地区よりベドックの手前迄)、(2)はその他の地区に配水されています。勿論両方共、沈澱、濾過、滅菌等の処理が施されています。

シンガポールの家庭では、普通生水を直接飲む習慣はありません。この感覚は、日本でも夏休みが始まる前、子供達に先生が生水を飲まないように注意するのと同じです。此処は、毎日が真夏なので、生水を飲む習慣がないのは当然かも知れません。

水質分析をしてみると、軟水で、WHOの飲料水基準を軽くクリアしています。特に、(1)の水は日本のどの大都市の水より良い位です。ただ問題は、アパートによっては屋上のタンクや、配管の管理が悪く、藻類の僅かな臭いがあったり、鉄錆による着色があったりする事がありますがこれとて、日本でもよく聞く話です。

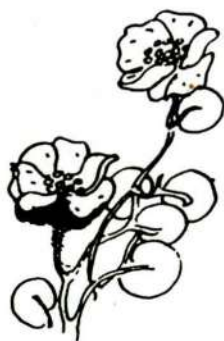
どうも、飲めるか飲めないかは科学の判断だけではないようです。科学を信じる人、シンガポールの生水を飲んで大丈夫です。そうでない人は、最近販売されている高分子膜を利用した、家庭用濾過器を利用することをお勧めします。僅かな臭気も色も取れ、味もよくなります(ご要望により、弊社製品を日本より取り寄せ個人の方に販売して居ります)。

東京の夏期の、一人当たり一日の水の消費量は、約400リットルにもなります。三食を外食で済ませ、あっという間にシャワーを済ませ(使用量は風呂の1/5 - 1/8、旅行中でもホテルでバスタブにつかる事はない様です)、

又洗車しなくともスコールでの自然洗車でそんなに汚れなく、80%の人が高層住宅に住む（庭に散水することがない）生活により、シンガポリアンの水の使用量は、200リットル以下となっています。

今では、誰も資源の消費量の多寡が、文化の発展度を示すなどとは信じてはいませんが、街に噴水や、水のせせらぎ等を造り、もう少し水に親しむ場所が在ってもよさそうにも思います。しかし、時々温泉にゆっくりとつかりたいと思う気持ちと同じで、日本人の勝手な思いに過ぎません。

何事にも実利と実用を第一優先するシンガポリアンに取っては、そんな、勝手な思いは通じません。この独特の生活習慣をさらに磨き上げ、世界中どこにもない独自の文化を造る事が、シンガポリアンに要求されていると思いますし、又この小さな島国で、そうする事によって、シンガポールの明るい将来が開けるものと思います。



食器が語るきのう、きょう、あした

伊勢丹（シンガポール）リミテッド

稲垣 繁

7世紀にスリビジャヤ帝国の貿易センターとなって以来、貿易港として発展してきたシンガポール。その昔西洋の人々は東洋からの白磁器に魅了され、ヨーロッパの各国は競って白い肌の食器を作ろうと研究し、またそれぞれの風土、慣習から独特のイメージの食器を作っていた東洋の人々は西洋の食器のその合理的なスタイルに感動し、取り入れました。歴史的背景は、専門家の手に委ねるとして、このような食器文化は海路を経てシンガポールを往来したことは、間違いありません。

現在76%もの人口比を占める華人、一番に中国食器の文化がここに息づいています。よく日本と比較されますが、個々に供するスタイルが日本式、全体を個々で取り分けるスタイルが中国式。ちなみに西洋はこの中間と言えるでしょう。食器の種類で言えば、レストランで見る中国食器、これがすべての基本です。コロニアル時代からのイメージでは、洋食器が、特にディナーアイテムが中心でしょう。さて一般的シンガポーリアンの必要食器というと、ボール、皿、フォーク、スプーン、箸それにマグカップとされています。これは中国食器と洋食器がミックスした世界、言い換えれば、東洋、西洋食器文化が作った独特のものでしょう。しかし、今日迄そういった食器文化の中から、クォリティの面で食器を考えることは、シンガポーリアンにとって、あまりなかったようです。これは外食文化の影響と大家族の影響が多であったと考えられます。一つの例として、特に先年日本において学校給食で問題とされたメラミン食器がつい最近まで主流であったことや、10年以上前に日本でそのブームをおこした耐熱食器が今ブームをおこしていることから言えます。しかし、今時代の流れが徐々に変わり、若い世代が、結婚を契機として小家族化していることなどにより食器事情が変わりつつあります。モダンなものからトラディショナルなものまで、徐々にクォリティーの高い食

器が若い方を中心に買われているのが現状です。又我々が数年手がけているローゼンタール、リチャード・ジノリのような日本で高級品と言われている食器の顧客の中にも、かなりのシンガポリアン顧客を見出すことができます。当然のこととは言え、貿易港として、世界の食べものが集って来るこのシンガポールに、世界の食器が一堂に会することを近い未来に期待するとともに、クォリティの高い食器の提案を続けて行きたいと思っています。



Eggplant, widely used in Japanese cooking

でんき きのう きょう あした

MEIDEN SINGAPORE PTE LTD

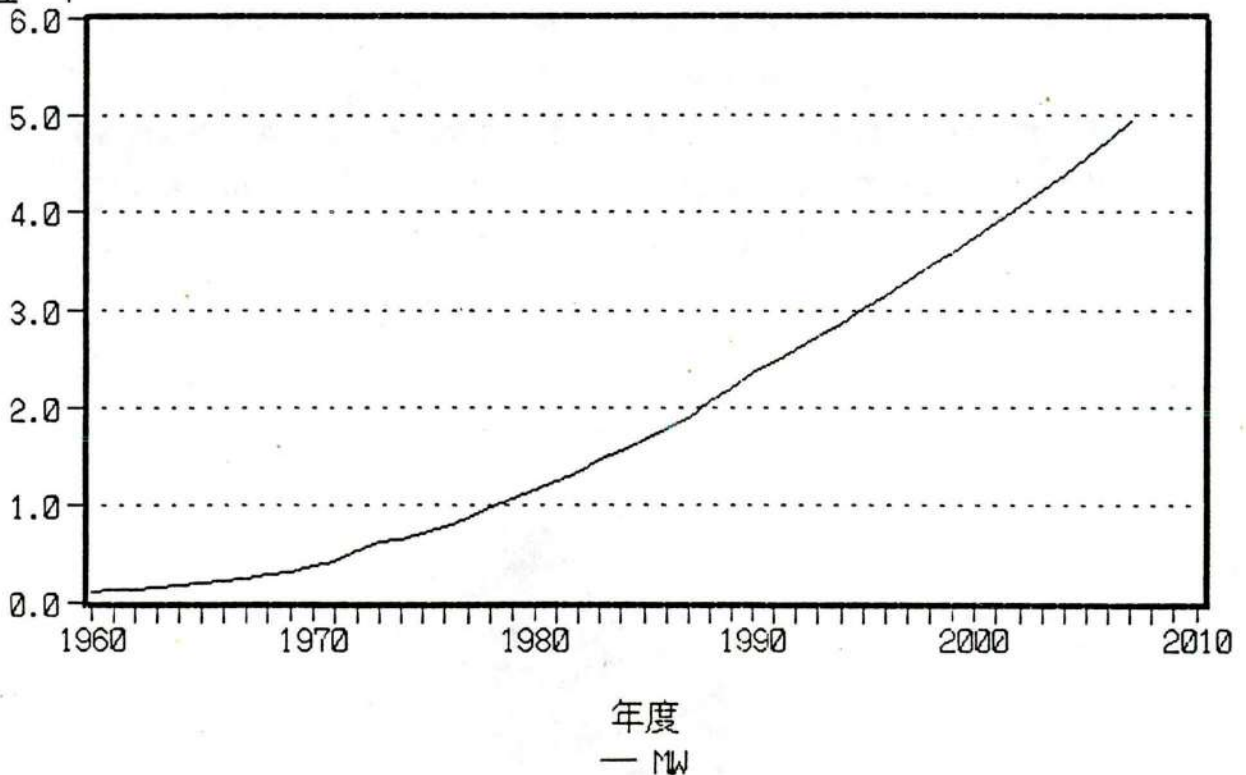
武田 真

午後日本発の便で、シンガポール着陸のアナウンスが聞かれる頃、窓の外を眺めると、まばゆいばかりに輝く、我が“南の樂園”が見えて来ます。着陸して空港内外のきらびやかさの中を通り、整然とした街灯の間のハイウェイを通り、街に近づくと、高層アパート・ホテル、そして街並みのどこもがキラキラと光り輝いております。ところでシンガポールの電力需用量はどのように伸びているのでしょうか。第一図はPUBが発表している最大電力需要

第一図

ELECTRICITY MAX DEMAND

単位・千



量について1960年から1987年までの実績と2007年までの予想です。1960年と1987年の比では約16倍になっております。同年比率

で日本の場合約6倍ですからいかにシンガポールの電力需要が伸びているかがわかります。国民1人当り使用量も日本に近づきつつあり、数年後には日本を追い越すことも予想されます。電力使用量は経済発展のバロメーターであり、それが夜の明るさにも比例することでしょう。チャンギ空港増築も進んでおります。MRTも郊外へ延びて行きます。暮しが豊かになるとクーラーも増えて来ます。従ってこの先も第一図に予想されるペースで電力需要は伸びる事と考えます。その昔、私がシンガポールという国に、いっていたイメージは、椰子の木と椰子の葉で作った家に住み、夜の明りと言えは月の光と、焚火だけ、電灯も勿論、ラジオもない“南の国の小島”を思い浮かべておりました。現実にはこれらのイメージは見事に裏切られてしまいました。しかしながら、この先、10年後、20年後のイメージとしては、24時間活動続ける不夜城国家として、欧米と東洋を結ぶ世界の中心としての機能を持ち、全島すみずみまでがキラキラ輝く光の島になることと考えます。そして国民1人当りの電力需要も世界一になるものと予想致します。電力設備が拡大するにつれて送電機器の信頼性に対する要求も高くなります。瞬時にでも停電を起すと社会的な影響は膨大なものになります。私共は送電機器を供給する立場として信頼性の高い製品を供給し、社会のニーズに応えながら10年後、20年後も長くお役にたって行きたいと考えます。



シンガポール—きのう、きょう、あした

HITACHI ASIA PTE LTD

山本 重明

シンガポールは発展途上国で1人当りGNPは日本の3分の1という。

たしかに統計数字はまさにそのとおりだが。……シンガポールの牛肉の価格は日本の3分の1、米もオーストラリア米なら日本の3分の1だ。タイ米なら5分の1だ。オレンジも日本の3分の1だ。

衣料品も安い。それに1年中夏だから春秋冬物衣料は不要だ。

更に差が大きいのが住宅費だ。

最近ウチの会社のシンガポリアンの女子事務員が結婚した。タンビニスのHDBのアパートに招待してくれた。そのアパートに行って新婚夫婦の部屋を見せてもらった時私は大変ショックを受けた。彼女の給料は私の給料のなん分の1なのにもかかわらず私の東京の家よりはるかに広いのだ。3LDKで専有面積120m²。このHDBのアパートを夫婦のOPFの住宅融資で20年月賦で買ったという。買取り価格換算で500万円。それに内装家具に100万円かけたという。これは私の東京の家の時価の10分の1だ(注:私は7年前時価の3分の1で買った。現在ウチの会社の東京本社勤務の28才の社員が結婚したとして通勤可能圏内にマイホームを買うことは全く不可能である。たぶん一生マジメに働いても家は買えないだろう。

収入は3分の1だが食料費は3分の1、衣料費も3分の1、住宅費は10分の1となれば明らかに実質の生活水準はシンガポールのほうが上だろう。

日本は抜本的な改革が必要だろう。でないと真面目なサラリーマンが勤労意欲を無くしてしまう。

しかし不安定な現在の日本の政治にそれが出来るかな?

日本の政治家や役人はシンガポールの政治家や役人に教えを乞った方がよさそうだ。

シンガポールの政治家は日本に比較して若くして引退するので引退後我々日本人が頭を下げて日本に来てもらい、日本の政治改革の指導をお願いしたらと思う。

シンガポール—きのう、きょう、あした

— 家賃事情 —

株式会社住友銀行

市川 敦

私が、日本からシンガポールに参りましたのが5年前の1984年8月。最初の1ヶ月は、单身でもありホテル住い。

その後、アパート探しを始め、シティーから、ちょっと離れた郊外に、気に入った物件が見つかり最初、2500シンガポール・ドルで契約しました。それ以来、今日まで、同じ場所に住んでいるのですが、部屋の大きさ、内装は、変わらないのですが、大きく変わったのは、家賃とオーナーの態度です。

2年後の1986年9月、突然オーナーから電話が入り、夕食に誘われました。何の用かと思っ行ってみますと『次期更新に当たって家賃を40%引きにしたい。又もし買い替えてほしい家具等あれば言ってほしい』

言われた方としては、特に不満もなかったので、ソファーセット・エアコン等を、新品のものに替えてもらい。すぐ更新しました。日本では考えられなかった現象で、高級アパートが空室だらけ、そのため家賃が大暴落。不況にあえぐシンガポリアンには申し分けないが、われわれにとっては福音。当時の不況の中で、引っ越業者だけは大忙しという状態でした。

そして今年、また何回目かの契約更新期が訪れ、今度は、前回とは全く反対に『契約更新に当たって家賃を現在の50%アップしたい、もし不満なら更新しなくてもよいから、出て行ってほしい。』日本ではとても考えられないことだった。

しかし現実には現実。もちろん家具等は、そのまま。こわれた家具の修理を、たのんでもなかなか、来てくれない。マーケットは、借り手市場から貸し手市場に変わっていた。私が入居した頃、私のアパートの前は草木の生い繁る空地だった。その後、ブルドーザーが走り回り、今では25階建の高層マンションが建っている。

シンガポールは、今、不動産ブーム。最近の不動産分野における需要と供給は、供給がおいつかない状況である。機関投資家及び個人投資家が不動産の買収に積極的に動いている中、家賃の下落は、当分望めそうもないことかもしれない。

シンガポールに住んでみて

サンキョー・セイキ・シンガポール

栗原 正喜

シンガポール日本商工会議所創立20周年本当におめでとうございます。
一口に20年と云っても大変なことであり、シンガポールの独立以来未だ24年ということを見るとこの国の歴史とともに歩んできたと言えます。今後も各種業界のASEANシフト計画を考えれば益々重要な拠点として発展していくことは疑問の余地はありません。この様な状況の中で、本年4月より当地へ赴任してまいりました私にとって全てが興味の対象として映ったことは云うに及びません。過去2度の欧米駐在から今回のアジアの経済の中心たろうとエネルギーを注ぐシンガポールに住んでみて又これまでとは異ったある感概を覚えております。

まずこの混り合い社会の見事な調和はどこから生れてきているのでしょうか。人種、文化、宗教、言葉の違いを巧みに調整し、発展させることの源泉は単に政府の指導とか、法律で律しきることは出来ないのではないのでしょうか。又経済的発展、住み良い社会に成長しているからということで調和が保てるのでもないと思います。これからも色々の面からその秘密を探ってみたいと思っています。

次に感心するのはこの国の若さでしょうか。

政府、学校、産業界の若さ溢れる構成は何にもましてシンガポール発展のエネルギーではないでしょうか。そのダイナミックさが時として私達の常識を越えた活力となっている様に感じております。国自身が若いことは云うまでもないことですが、これからもこの若さを持ち続ける限り世界に先がけて次々と新鮮な手を打ち、発展の原動力となるものと思います。

もうひとつ感じているのは清潔さです。都市としての清潔さもさることながら、政府機関も汚職、収賄等々聞いたこともない。これ即ち国民の信頼を得ている基本であると見てよいと思います。都市の清潔さは最近日本で盛ん

になり、又当地へも導入されている製造業における「3S運動」「5S運動」と同じで社会全体のモラル向上に必須のことと思いますが、これを確実に実行していることが社会全体のモラルが向上していける源泉だと思います。罰金制度その他でやり過ぎと云われる人もおりましょうがこれを進めるのも若さの証明とも云えましょう。

その他にも色々と感じることはありますがこれからシンガポールでの先輩諸氏の力をお借りして勉強していきたいと思っております。

最後に私達日本人はともすれば自分達の常識が最良という前提で考えがちですが、私達はいくまでよそ様の国で仕事をさせて頂き、住まわせてもらっていることを忘れずに、この国が混り合いを調和させている様に、私達も調和を保つための謙虚さを失うことなく行動したいと思っております。



シンガポールの繁栄を支えた力

住友商事株式会社

小佐井 優

仕事柄、近隣の国々に出張の機会が多い。仕事を終え近代的なチャンギ空港に戻って来る度にほっとする。安堵感と同時に素朴な疑問が湧いてくる。なぜ狭隘なこの島だけが貧困にあえぐアジア諸国の中にあり、一国だけとび抜けた経済発展を遂げたのか。橋一つ隔てたマレーシア・ジョホールは対岸の街であるが、シンガポールとの経済格差は歴然としている。インドネシア・バタム島はシンガポールの南フェリーで僅か三十分、ネシア政府が過去十数年来開発を進めている島である。しかしそこは大部分未開のジャングルであり、マングローブが繁茂し、ラッフルズが一八一九年シンガポールに上陸した当時を彷彿とさせる。バタム島からシンガポールを見ると、高層ビル群が蜃気楼の如く海に浮かび、シンガポールの経済発展を奇跡と呼ぶのもうなずける、と同時に同じ疑問が湧いてくる。何が同じジャングルに今日の繁栄をもたらしたのか。

シンガポール発展の理由として、いろいろなことが言われている。第一に、インド、中国に挟まれアジアのほぼ中心に位置するという地理的好条件、加えて天然の良港。第二に政府の巧みな政策が挙げられる。独立以来、伝統的な中継貿易機能が低下していく中で、人種問題、人口増大、労働問題等を巧みにかわしつつ積極的な外資導入政策により工業化を達成した政府の存在は、シンガポール成功の要因として高く評価されている。これらはいずれも今日の発展に欠かせない条件であり、一般に認められている。

しかし私にはこれだけでは今一つ納得が行かない。マングローブが生い茂る熱帯の小島に高層ビルに象徴される今日の繁栄を築き上げた原動力には、もっと精神的要因も絡んでいるように思える。私はこれに苦力クーリーに遡る華人の活力とリー首相の強い気概を加えたい。

シンガポール華僑は主に十九世紀後半清朝末期、中国華南地区（福建、潮

州、広東等)で地主の徹底的な搾取により過酷な生活を強いられていた貧民がそのルーツである。生きる為新天地を求めてこの常夏の小島まで逃げのびた人々である。彼らは奴隷的に酷使された。^{クーリー}「苦力」という呼称が彼らの生活を如実に語っている。この苦力の特徴とされる忍耐力、勤勉さ、したたかな金銭感覚がシンガポールの繁栄を支える精神的土壌ではあるまいか。土着のマレー人にはない強い生命力、新しい土地で一旗揚げるという意識——私はこれを「苦力スピリット」と呼びたい——を持った人々が集まり初めて発展できた国家であると思う。土着マレー人との違いは日常生活、仕事を通じて充分に感じられる。この違いが今日のシンガポールを支えてきたのではないか。この苦力スピリットは刻苦勤勉、勤儉貯蓄の儒教精神にも繋がり、ひいては日本の経済発展の基となる国民性にも共通するものがあるのではないか。

もう一つの大きな精神的支柱として、私はリー首相の国家建設に対する強い自信と気概を挙げたい。リー首相は言うまでもなく建国の立役者であり、その後の飛躍的發展を導いた指導者である。その功績は広く認められており、ここでその評価を屋上屋的に云々するつもりはない。私がここで述べたいのは、無資源国が生存していくという危機意識から生れた国の舵取りに対する彼の強い気概と、目的実現の為には強圧的な手段も辞さない強気の性格である。住んでみて実感する彼の国造りにおける存在感は、単に辣腕をふるう有能な首相では表現しきれない精神的浸透性を持っている。

シンガポールは建国以来、国の存立をかけたユニークな政策を大胆に提示、果敢に実行してきた。このほとんどはリー首相が推進役といわれる。例えば罰金制度をとってまで街を清潔にする政策(これではまるで幼稚園)、毎年兵役を強制する徴兵制(兵役期間、学校に行けない、仕事ができないどうしてくれる)、幼年期より徹底したふるい分け、能力主義の教育制度(大器晩成型の人はどうなる)、低学歴の母親に対する出産抑制策(頭の悪い人の人権はどうなる)、住宅開発局による高層住宅政策(マレーカンボンが好きだ、ニュータウン団地への強制移住はいやだという自由はない)。これらの政策実施に当っては通常の民主国家では相当の反対、困難が予想され、実現が難しい。しかし、シンガポールには国家利益になることは多少の犠牲を払っ

てでも推進する強力な意志がある。この強権的措置をとってでも押し進める原動力の裏にリー首相の自信と気概があり、また国民の大部分を納得させるだけの説得力と合理性がある。だからこそ少々過激な政策、発案であっても国民は「リー首相がいうことなら」との信奉を抱いているのではあるまいか。我々外国人にとっては政府の一方的、押しつけ的正義のように見えるものが、実はシンガポール繁栄の源にあると考えるのは私一人ではないと思う。

最近、経済的繁栄にどっぷりつかり、華僑も二世代、三世代に移行した結果、西欧的デカダンスも一部若者の中に見られる価値感の多様化に伴い、国家発展の為にすべてを優先する政府に息苦しさをを感じ始めている人も出てこよう。しかし、国民の大半を占める華人に苦カスピリットが生き続け、これをうまくリードする提導者が存在する限り、発展の培地は失われないと思う。

SINGAPORE



シンガポール—きのう、きょう、あした

TOYOTA TSUSHO (S) PTE LTD

倉知 聖和

シンガポールは、さまざまな困難な条件の中で、1965年のマレーシアからの分離以後、小都市国家として独立を維持し、アジア新興工業国の一角を占めるほどの経済的繁栄を達成してきた。

困難な条件としては

- ①日本の淡路島程度の小さな島国で、260万人程度の人口と地理的に東南アジアの中心的位置を占め、天然の良港を持つことを除けば資源と呼べるようなものが存在しない。
- ②中国系、マレー系、インド系等で構成される複合社会であり、各種族社会は言語、宗教、生活習慣の違いから、結婚等による融合が無いまま並存している。
- ③歴史的に国民のマジョリティを占める中国系住民は当初「故郷に錦を飾る」「いずれは故郷に戻る」等、中国志向が強く、為にシンガポールは歴史的背景や国民統合の社会的基盤を欠いていた。

上記の困難な状況の中で、一貫して政権を担当してきたリー・クワン・ユー首相以下人民行動党は、国家存続の為、周辺諸国のみならず世界全体の変動に目配りをしながら経済開発を進め、独自のアイデンティティ創造に努めてきた。

具体的な施策としては、上述の困難な条件を克服もしくは活用する形で

- ①経済的には外国資本を積極的に導入し、世界市場を目指す多角化が進められた。即ち輸出志向型の工業化、国際金融市場への進出が図られた。その結果ジュロン工業団地に、低賃金、良質の労働力を求める労働集約、組み立て型の産業が誘致された。この点では日系企業は多大の貢献をしているといえる。
- ②教育には力をそそぎ、特に複合民族社会を念頭に置き多言語（マレー語、

英語、中国語、タミール語)による教育がなされ各種族のアイデンティティの維持に努めた。しかし、学習の非効率、教員不足等から暫時二言語必須(英語と種族言語との組み合わせ)に改訂し、国民統合の目的と併せ、国際化に必要なビジネス用語である英語を重視し、国際的視野を広めさせた。

③超過密な居住環境を改善する為、住宅建設開発公団による大量の高層公共住宅の建設に努め、低家賃での賃貸もしくは低価格で分譲を行った。

④種々の政策の実施に当たり、きめ細かな罰則も伴う、上からの強力なキャンペーンの展開を併用し、国民の意識を改革する国民教育も行った。(ゴミ・タバコの投げ捨て、交通違反等々。最近では禁煙場所の拡大)

この様な政策の実施を通じ、シンガポールの経済繁栄を築き、国民意識を高めシンガポール人としてのアイデンティティの確立に成功してきたことは疑問の余地は無いと思われるが、これが今後も継続するか否かについては、既に内在する問題点をシンガポール政府がどの様に把握し、またどの様にカジ取りをして行くかにかかっている。

政府の経済政策の方向づけは、80年代の工業化を基礎に知識情報集約産業に展開し、シンガポールをアジア域内の情報・金融センターに構造調整していくことである。

この構造調整を実施するに当り、下記の内在する問題点を克服する必要がある。

①リー・クアン・ユー首相による強力なリーダーシップが世代交替の時期に差しかかり、従来通りの強力な指導が継続できるか。

②経済成長のひずみとして、従来外資導入の強力な武器となっていた低賃金・良質な労働力が完成雇用の達成に伴い、労働需給の逼迫及び賃金上昇により労働集約型の産業が限界を迎えている。

③又完全雇用の実現は、外国資本に依るところが大きく、地元企業の近代化がまだまだたち遅れている。特に中小企業の大半を占める華人企業は所有と経営の分離による合理化よりも、個人や一族で企業を独占し、小規模ながら一国一城の主となろうとの傾向が強く、経営基盤の脆弱さが解消されていない。

④経済成長の実現により、生活レベルの向上が図られ、国民の過半数が中流意識を持つ程になったが、複合民族社会の特徴である種族社会の連帯の強さは変っていない。言葉を変えれば、各種族間の利益が相剋する可能性は常に潜在化しており、さまざまな分野に規制の網をかけることで、国民統合を推進してきた従来の手法が今後も継続できるか。

⑤教育面では、英語重視の二言語教育の侵透により、国際化は実現したもの、若い世代に個人主義的な考え方と社会的無関心が広まりつつあり、中国語（マンダリン）キャンペーン及び道德教育重視の教育政策を展開している。これは言語教育を通じ、その言語の持つ文化価値観の吸収の結果、若い世代に欧米的考え方が根づく一方、アジア的価値観が失なわれてきている。

いずれにせよ、シンガポールがアジアの中の優等生であることは誰もが認めるところであろうが、これも全てリー・クワン・ユー首相の将来を見通するどい洞察力と、それを支える優秀な官僚群を通じた強力な指導のもと、各種族間の調和を図りながら、独自の華人社会を創り上げる努力と、勤勉な国民の協力に負うところが大きい。

シンガポールの政策の最大の特徴は、機敏な修正を厭わない実利主義であり、強力なキャンペーンの展開を通じての国民の意識改革にあるが、増々複雑化する世界情勢のなかで、更に発展を継続する為には、上述の問題点を踏まえたうえで、どの様にカジ取りを行っていくかが重要課題であろう。

シンガポールに於ける日本の役割は過去そうであった様に、今後も大きな位置を占めるであろう、この意味でもシンガポールに於ける日系企業社会の果たす役割は非常に重要であり、アジアのパートナーとして双方の長所・欠点を自覚したうえで、つき合っていきたいものである。

シンガポール—きのう、きょう、あした

クラウン・ライン株式会社

森 幹雄

当地に来星して、海外引越業務に携わり、早や13年を迎え様としている。

この一昔をふりかえって見る時、来星時より保管している商工会議所のメンバーズ・リストがたいへんに役に立つ。

四季の変化ない当地において、正確になにかを記憶するというのはむずかしく、特に何年何カ月ということになると、どうしようもない。もちろん毎年、才をとり、記憶力というより頭がぼけている事は、まちがいがながいが……。

引越という業種の為、荷物のある人がすべてのお客様で、大手企業の駐在員の皆様からレストランの板前さん、学生さんまで、幅広いおつき合いが必要となってくる。そういう意味で、この10年間を振り返るとみると、企業だけでなく、駐在員の人々にも大きな変化が見られる。

手元にある1977/8年版のメンバーズ・リストを見る時、一冊の推理小説よりもおもしろい。

新規企業進出があれば撤退もあった。繁栄する業種もあれば衰退する業種もあった。合併する企業もあれば倒産する企業もあった。

オイルショックから始まり円高によって、海外へ進出を歩み始めた日本企業の記録でもある。

正に歴史小説にも、匹敵するこの記録と私のつたない記憶と一緒にひと昔のシンガポールをタイムマシンにのって、おつれしましょう。

まず1977/8年版の目次に出てくる企業は、MINING会社である。MITSUI MINING & SMELTING CO LTDで事務所は、今のPLAZA SINGAPURAであった。

このビルの中には、スーパーの八百伴だけでなく、FUJI FILMなどの他の日系企業も入っており、セールスの帰りによく八百伴へ日本食を買いにいった。

そのころ、百貨店は、アポロ・ホテルのとなりのI S E T A Nしかなく、スーパーの八百伴とI S E T A Nが、唯一の買い物場所であった。ロビンソン百貨店は、今のスペシャリストセンター内にあり、今のロビンソンはコールドストレージの古い建物があり、日本人以外の外国人はロビンソンとコールドストレージを利用していた。コールドストレージの前が、車の駐車場で、夜になると夜店、屋台が出て、ニュートン・サーカスより混んでいた。

当地はスズを産出もしないのに昔の資料では輸出の一大産物であった。マレーシアとのつながりある鉱山関係の会社も1981年後メンバーズ・リストよりなくなっている。

次は、建設会社で、20社登録されている88/89年版では43社登録されており進出企業増加グループ別では2位となっている。今も同じ所に事務所があるのは、鹿島建設のJ U R O N G事務所ぐらいで他には同じビル内で移動した清水、日産、大林組ぐらいである。そのころの名物人は清水建設の田村氏でその大物ぶり話しには、事欠かなかった。

建設会社の人だけでなく、そのころの駐在員の人々は、豪快でざっくばらんで野武士みたいな人が多かった。仕事もよくするが、遊びとなると、仕事以上にハリキル人が多かった様に思う。

先発切込隊長という感じであり失敗を失敗とも思わぬ前へ前と進んで行く人ばかりであった。重箱のスキをつつく様なタイプの人、見あたらなかった。

F I B E R 関係は、7社もあったが、今は3社のみで繊維関係が当地ではなりたたなくなった記録である。

その会社が昔くからあるかどうかは電話番号のケタを見ればわかった。

昔のは5ケタで、6ケタの会社が多く、一部の新しい会社は7ケタであった。今の様に7ケタとはっきりしている時はわかりやすいが5、6、7ケタと色々ある為、電話番号を何回も何回も聞いておかないとまちがいをおこすことが多かった。

P U L P & P A P E R 関係ではいずれも古くから3社が出ていた。

その中の岡本は今も同じビルの中の同じ所におられる。そのころは R O O M 1103 で今は R O O M 1203 と1階違っているが、その昔はフロアの呼び方が、英国式で G F が1階にあたり、1階が今の2階にあたる。

11階というのは G F を入れてのことので今の12階となる。又、大きなビルの中には、必ずリフト・アテンダー（オペレーター）がおり、行先をつけるとその階のボタンを押してくれた。人件費の上った今日ではほとんどビルで見なくなって来た。これまたつかしい思い出である。

C H E M I C A L 関係は石原産業があり、この会社は東南アジアにおける歴史的な会社でもある。14社ある内、3社がペンキ関係で資正堂や K A O もあり、今の大型化学プラント関係会社とは違った会社ばかりだった。今は32社と18社増加で増加数は3位であり、この方面に政府が力をもて来た事がよくわかる。

O I L 関係では出光と大協石油のみが会員だったが今は6社となっている。そのころの大協石油の支店長は長井氏で任期をおえ、日本へ帰国なされたが後任の支店長が、セントサのゴルフ場で亡くなられ、再度当地へ戻ってこられた。しかし、つかの間、単身赴任されている間に体調をこわされ、一時帰国された直後に日本で亡くなられた。続けて2人の支店長が亡くなるという不幸が続いた。その大協石油は今は合併してコスモ石油となっていまはもうない。

R U B B E R 関係では B R I D G E S T O N E T I R E のみで J U R O N G に大きな工場があり、タイヤを製造していた。その後、政府がタイヤに輸入関税をかけていたのを撤廃した為、当地で製造するメリットがなくなり、工場をクローズした。今は工業用ゴム・ベルト関係の会社が主体となっている。

S T E E L

大手高炉メーカーは早くから進出しており“鉄は国家なり”ではないがそ

のころ駐在されていたMR SHIMAZAKI氏は商工会議所や日本人会において強い影響力があった。

MACHINERY

光洋製鋼がJURONGでベアリングを製造していた。

岡本製作所の早船氏やシンガポール・フジテックの福田氏は企業家という感じの人であった。

15社から25社と10社増加で増加数ののびで5位となっている。

ELECTRIC MACHINE & APPARATUS

24社あった企業が今はなんと97社と73社も増加し、いちじるしく増加した部門である。

日立、松下、三洋などの大手企業の他にOMRON(立石電気)が今の松下電子部門のある工場ですべての製造をしていた。

業種じたいが景気に左右されやすい為か進出、撤退という出入の激しい部門でもある。

商工会議所の名のとおり、商業と工業とに区別されるがその昔は一番多かった部門はTRADING関係で37社、次に多いのがELECTRIC、MACHINE & APPARATUSで24社、3位がCONSTRUCTIONで20社、4位がFINANCEの19社、5位が14社のCHEMICALとなっていた。

それが今は1位はELECTRIC MACHINE & APPARATUSの97社、2位は首位逆転のTRADING、3位はCONSTRUCTIONと変わらず、4位にはFINANCEとCHEMICALが同数となっている。5位はMACHINERYとなっている。

増加数でなく増加率で見るとNo.1はRUBBERの5倍、2位はSERVICES部門のOTHERSで4.6倍。(RUBBER1社なかった為でSERVICES部門のHOTEL & RESTAURANT、TRAVEL AGENTを入れるともちろんNo.1となる)、3位はELECTRIC、MACHINE & APPARATUSで4位はFOODとMETAL PRODUCTS関係、5位にはCHEMICALとなっている。

工業関係が大きく昇びた事がよくわかる。

TRANSPORTATION MACHINE & EQUIPMENT

その昔はほとんどが造船関係が主体であった。三菱重工業がJURONGに大きなドックを持ち、たくさんの人が働いていたがその折、資材部長をされていた松田氏は新規設備の購入を担当されていたが一度、日本へ帰国され、再び赴任された折には過去、自らの手でネゴして購入した機械、設備の売却業務を担当するとは思ってもよらなかったとの事。もう少しまてば今、会社が高い利益を上げていられたかも……

OTHER PRODUCTS 関係では印刷関係は昔からあり、DAINIPPON PRINTINGの鉄村氏は2回目の赴任をされている。

3回目赴任という人もおられたりその人の引越をシンガポール内の引越、海外引越、日本国内引越さらに海外引越がくりかえし、くりかえしあったという上得意のお客様もおられる。

MORITA SINGAPOREにはポンプの会社でJURONGでゴミ回収車を製造されていたが撤退された。

同じくCOPALも今のJVCのある所でたくさんの人をやとっておられたがやもなく撤退された。

COMMERCE の TRADING 関係では安宅産業があった。伊藤忠と合併になり鉄鋼部門のみの人が残られた。

加商は本当に古くからあり、大阪鋼材というのもあった。

各商社は、重工業、機械関係を主体にプラン、各社しのぎを削っていた。

大手商社、ゴム、木材、専門商社などが主体であった。

DEPARTMENT STORE

越後屋の福田さんがおられ、この人なくして日本人社会はないといっても今のまちがいはない。たいへん記憶力のすばらしい人で何年の何月に誰れと合って何をしたとかそのころはどうだったのこうだったの昔の事をよく覚えておられた。

高齢になられ、一度移民局がVISAの発給をしぶった事があり、移民局が大学を卒業していないとか、なんとか言った時、自分の子供みたいなメガ

ネをかけた青白い担当者に私は日本とシンガポールの青空大学を卒業したから、これ以上の高い学問を習った人間はいないと言ったそうである。

柏崎に帰られる事になり、引越業務をさせていただいたが、その時始めて福田さんの記憶力のすぐれている秘密を知った。荷物は日記の山と、いままで発給されたパスポートと大切に保管されていた。

FINANCEは邦銀以外にも外国系の銀行内に日本人担当としてこのころからたくさんおられた。(CITI BANK, CHASE MANHATTEN)

リース会社はオリエンタリースとシンガポール・リースの2社しかなかった。

INSURANCE部門では日本火災、大正、日産、住友、東京、安田火災があった。

SERVICE部門ではAPOLLO HOTELの内山氏が高名で長期滞在の人はアポロかキングスもしくはオーキッド・インに宿泊する事が多かった。

TRAVEL AGENTとも、JAPAN TOURとKAIGAI TRAVELの2社しか入会していなかった。

OTHERSでは電通の戸田さんが1年に200回飛行場へ行ったとか言っておられ、その多忙さには驚かされた。

静岡谷島屋という本屋があったが。日本で社長がなくなったりして急にシンガポール店をCLOSEDされた。

INLAND TRANSPORTATION & WARE HOUSE関係は日通、渋沢、山九、上組、日立、宇徳で現地法人となっていたのは日通と渋沢、日立のみで引越専門、まして、戸口から戸口へと海外引越をやる会社はどこもなかった。

パイオニアとしての誇りと責任を感じるこのごろである。

当地に根をはやして10数年シンガポール人の妻をもらい子供も5人(4男1女)いる現在、ちょっとシンガポールにアンカーをしずつめておくつもりが、たぐれども、たぐれどもアンカーはなく陸に上ってしまった船みたいなもので

この先10年いや、もっと長くいることになるかも知れない。

越後屋の福田氏みたいに日星間の交流に寄与したいと思っている私であるが事無精の私では記憶力がもたないと思い、この記念ある日に寄稿させていただきたい次第です。

なにせ、昔のことなので、何かの勘違いやまちがいがあった場合は当地の暑さのせいとさせて下さい。



歴 代 会 頭

1969年8月～1970年6月	佐藤 周輔 氏 (三井物産)
1970年6月～1971年6月	石垣 次郎 氏 (三菱商事)
1971年6月～1972年6月	大槻 信治 氏 (三井物産)
1972年6月～1973年6月	長友 和夫 氏 (三菱商事)
1973年6月～1974年6月	長友 和夫 氏 (三菱商事)
1974年6月～1975年6月	磯辺 卓司 氏 (三井物産)
1975年6月～1976年6月	林 勝夫 氏 (東京銀行)
1976年6月～1977年6月	磯辺 卓司 氏 (三井物産)
1977年6月～1978年6月	島崎 弘 氏 (新日本製鉄)
1978年6月～1979年6月	島崎 弘 氏 (新日本製鉄)
1979年6月～1980年12月	太田 晴之 氏 (三井物産)
1980年12月～1981年6月	水戸 清 氏 (日立造船ロビン・ ドックヤード)
1981年6月～1982年6月	水戸 清 氏 (")
1982年6月～1983年6月	水戸 清 氏 (")
1983年6月～1984年6月	水戸 清 氏 (")
1984年6月～1985年6月	水戸 清 氏 (")
1985年6月～1986年3月	榊原 輝典 氏 (丸 紅)
1986年3月～1986年6月	田本 耕三 氏 (住友商事) { 会頭代行 }
1986年6月～1987年6月	古新居 康 氏 (ジュロン・ エンジニアリング)
1987年6月～1988年6月	古新居 康 氏 (ジュロン・ エンジニアリング)
1988年6月～1989年6月	菊池 巖 氏 (住友銀行)
1989年6月～	野口 滋 氏 (住友商事)

シンガポール日本商工会議所、会員数の推移

1. 登記日

1969年7月19日

2. 創立総会

1969年8月22日

3. 会員数

1969年9月	69社
1970年4月1日	69社
1971年4月1日	96社
1972年4月1日	111社
1973年4月1日	133社
1974年4月1日	151社
1975年4月1日	193社
1976年4月1日	216社
1977年4月1日	254社
1978年4月1日	279社
1979年4月1日	308社
1980年4月1日	340社
1981年4月1日	365社
1982年4月1日	407社
1983年4月1日	432社
1984年4月1日	438社
1985年4月1日	466社
1986年4月1日	464社
1987年4月1日	469社
1988年4月1日	487社
1989年4月1日	517社
1990年2月現在	559社

シンガポールの経済指数

APPENDIX 1

POPULATION AND VITAL STATISTICS 1969-1988

Year	Mid-Year Population ('000)			Rate of Population Increase (%)	Density (persons per sq km)	Mid-Year Population ('000)			
	Persons	Males	Females			Malay	Chinese	Indian	Others
1969	2,042.5	1,046.9	995.6	1.5	3,490	306.0	1,555.0	139.7	41.8
1970 (Census)	2,074.5	1,062.1	1,012.4	1.7	3,538	311.4	1,579.9	145.1	38.1
1971	2,112.9	1,081.2	1,031.7	1.8	3,599	316.3	1,611.1	146.3	39.2
1972	2,152.4	1,101.1	1,051.3	1.9	3,662	321.2	1,643.4	147.3	40.5
1973	2,193.0	1,121.4	1,071.6	1.8	3,726	326.1	1,676.8	148.4	41.7
1974	2,229.8	1,139.7	1,090.1	1.6	3,777	330.2	1,707.1	149.4	43.1
1975	2,262.6	1,156.1	1,106.5	1.4	3,770	334.1	1,733.7	150.2	44.6
1976	2,293.3	1,171.3	1,122.0	1.4	3,784	337.4	1,758.8	151.1	46.0
1977	2,325.3	1,187.3	1,138.0	1.3	3,745	340.7	1,785.3	151.9	47.4
1978	2,353.6	1,201.4	1,151.2	1.2	3,819	344.1	1,808.2	152.7	48.6
1979	2,383.5	1,216.3	1,167.2	1.3	3,858	347.6	1,832.4	153.5	50.0
1980 (Census)	2,413.9	1,231.7	1,182.2	1.2	3,907	351.5	1,856.2	154.6	51.6
1981	2,443.3	1,246.3	1,197.0	1.2	3,954	357.0	1,876.9	156.5	52.9
1982	2,471.8	1,260.4	1,211.4	1.2	3,999	362.4	1,896.7	158.3	54.4
1983	2,502.0	1,275.5	1,226.5	1.1	4,048	368.5	1,917.1	160.6	55.8
1984	2,529.1	1,288.7	1,240.4	1.1	4,078	374.4	1,935.0	162.6	57.1
1985	2,558.0	1,302.9	1,255.1	1.1	4,122	380.8	1,953.9	164.7	58.6
1986	2,586.2	1,316.9	1,269.3	1.0	4,160	387.4	1,972.0	166.8	60.0
1987	2,612.8	1,330.2	1,282.6	1.2	4,197	393.8	1,988.6	169.1	61.3
1988	2,647.1	1,347.4	1,299.7	1.5	4,231	401.2	2,011.3	171.8	62.8

Source: Department of Statistics

APPENDIX 2

INDIGENOUS GROSS NATIONAL PRODUCT, 1969-1988

(AT CURRENT MARKET PRICES)

	PER CAPITA INDIGENEOUS GNP (S\$)	TOTAL GROSS DOMESTIC PRODUCT (\$ MILLION)
1969	2, 189	5, 020
1970	2, 404	5, 805
71	2, 761	6, 823
72	3, 206	8, 156
73	3, 849	10, 205
74	4, 491	12, 543
75	4, 798	13, 373
76	5, 087	14, 575
77	5, 525	15, 974
78	6, 303	17, 830
79	6, 892	20, 523
80	8, 343	25, 091
81	9, 869	29, 339
82	11, 120	32, 670
83	12, 584	36, 733
84	13, 671	40, 048
85	13, 547	38, 924
86	13, 061	38, 217
87	14, 253	42, 038
88	15, 999	48, 046

Source: Department of Statistics

APPENDIX 3A

GROSS DOMESTIC PRODUCT BY INDUSTRY

(\$ Million)

Industry	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977
At Current Market Prices									
TOTAL	5, 019.9	5, 804.9	6, 823.3	8, 155.8	10, 205.1	12, 543.2	13, 373.0	14, 575.2	15, 974.3
Agriculture & Fishing	128.6	134.6	158.8	160.6	214.3	229.9	254.2	256.8	283.1
Quarrying	17.5	19.8	24.5	28.5	28.8	33.6	47.1	56.2	49.1
Manufacturing	956.1	1, 186.5	1, 460.6	1, 853.5	2, 429.0	3, 084.6	3, 226.2	3, 611.5	4, 018.7
Utilities	127.5	149.1	163.9	185.0	218.2	231.6	250.2	273.7	301.0
Construction	293.6	397.0	508.6	692.0	725.9	929.3	1, 084.0	1, 205.1	1, 199.8
Trade	1, 511.3	1, 639.2	1, 850.4	2, 067.2	2, 771.8	3, 588.3	3, 608.0	3, 815.2	4, 224.2
Transport & Communications	544.9	629.8	750.8	924.8	1, 127.9	1, 338.0	1, 517.6	1, 795.5	2, 111.6
Financial & Business Services	688.7	815.8	998.4	1, 232.3	1, 543.3	1, 833.8	1, 957.3	2, 088.8	2, 242.9
Other Services	695.2	767.9	872.8	971.3	1, 125.8	1, 392.2	1, 576.1	1, 679.4	1, 746.2
Less: Imputed Bank Service Charge	87.2	110.2	128.2	155.1	218.3	341.2	375.8	467.4	506.4
Add: Import Duties	143.7	175.4	162.7	195.7	238.4	223.1	228.1	260.4	304.1

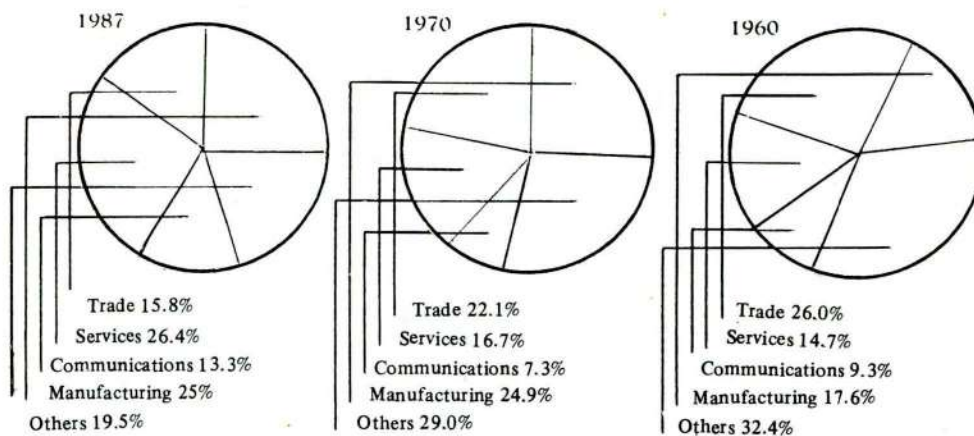
(\$ Million)

Industry	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988
At Current Market Prices											
TOTAL	17, 830.0	20, 523.0	25, 090.7	29, 339.4	32, 669.9	36, 732.8	40, 047.9	38, 923.5	38, 217.0	42, 038.0	48, 045.8
Agriculture & Fishing	273.7	295.2	322.0	356.2	349.1	330.91	339.7	292.3	244.5	221.5	203.3
Quarrying	37.5	42.1	82.2	104.7	128.1	140.6	132.2	111.3	75.6	57.3	51.2
Manufacturing	4, 575.9	5, 702.5	7, 312.7	8, 361.5	8, 153.5	8, 907.9	9, 863.4	9, 184.3	10, 185.5	12, 090.6	14, 509.7
Utilities	351.5	422.1	555.0	477.5	600.9	702.7	773.0	796.0	1, 056.9	943.1	1, 135.2
Construction	1, 118.8	1, 236.6	1, 613.2	2, 163.7	3, 146.1	4, 202.5	4, 943.7	4, 167.9	3, 149.1	2, 868.7	2, 755.9
Commerce	4, 283.3	4, 844.8	5, 435.1	5, 840.0	6, 387.5	6, 667.4	6, 885.5	6, 636.3	6, 516.3	7, 354.9	8, 826.8
Transport & Communications	2, 554.7	2, 852.5	3, 522.2	4, 063.0	4, 435.8	4, 891.9	5, 222.3	5, 234.5	5, 297.0	5, 769.8	6, 625.0
Financial & Business Services	3, 165.6	3, 708.1	4, 906.1	6, 608.4	7, 697.6	8, 803.9	9, 879.6	10, 552.7	10, 573.9	12, 001.4	13, 111.4
Other Services	1, 867.2	2, 088.6	2, 326.3	2, 715.1	3, 399.7	3, 880.8	4, 321.8	4, 676.6	4, 594.1	4, 721.4	5, 221.0
Less: Imputed Bank Service Charge	737.6	1, 039.2	1, 410.9	1, 778.6	2, 109.9	2, 306.8	2, 827.4	3, 196.5	3, 869.5	4, 444.5	4, 990.0
Add: Import Duties	340.2	369.7	426.8	427.9	481.5	511.0	514.1	468.1	393.6	453.8	596.3

Source: Department of Statistics

APPENDIX 3B

GROSS DOMESTIC PRODUCT BY INDUSTRY (AT 1985 MARKET PRICE)



Source: EDB Annual Report 1987-88

APPENDIX 4 **CONSUMER PRICE INDEX, 1969-1988**

(JUNE 1977 ~ May 1978=100)

ALL ITEMS		FOOD	CLOTHING	HOUSING	TRANSPORT & COMMUNICATION	MISCELLANEOUS
1969	61.3	55.2	72.5	69.0	66.6	69.7
70	61.5	54.9	73.0	69.8	66.6	71.6
71	62.7	56.0	74.4	71.1	66.5	72.2
72	64.0	57.5	75.8	72.2	66.6	74.0
73	76.5	76.7	88.4	76.0	66.8	78.9
74	93.6	96.4	97.4	86.7	91.9	90.0
75	96.0	97.4	96.0	91.7	95.7	95.2
76	94.2	91.5	96.7	97.1	99.6	96.3
77	97.2	96.0	98.2	98.6	100.1	97.6
78	101.9	101.7	101.1	99.8	104.6	102.9
(JUNE 1982 ~ MAY 1983=100)						
79	106.0	104.5	104.6	104.7	114.0	106.3
80	115.0	112.6	106.6	116.4	128.8	113.8
81	124.4	123.4	108.6	121.5	141.0	123.6
82	129.3	129.5	109.0	124.2	144.4	129.0
83	100.6	100.4	100.1	99.7	100.6	102.0
84	103.2	101.9	99.7	101.8	104.4	107.7
85	103.7	100.7	97.1	104.3	107.9	109.0
86	102.3	99.3	94.9	102.4	103.8	110.3
87	102.8	99.1	95.2	101.3	104.9	113.4
88	104.4	100.4	98.5	101.6	105.8	116.4

Source: Department of Statistics

APPENDIX 5
EXTERNAL TRADE, 1969-1988

\$ Million

Region/Country	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982
Total	10,984.3	12,289.6	14,035.3	15,687.4	21,419.7	34,559.5	32,028.3	38,670.4	45,612.2	52,586.8	69,274.5	92,797.1	102,538.8	104,717.4
South East Asia	3,474.6	3,316.0	3,723.0	3,860.6	4,845.3	7,004.0	6,089.4	7,424.2	8,651.8	10,103.1	14,169.1	18,485.2	19,709.8	21,454.3
Malaysia	2,484.0	2,443.2	2,672.1	2,785.2	3,652.6	5,033.5	4,426.7	5,685.1	6,340.0	6,987.1	9,820.8	13,333.6	14,116.2	15,924.5
Thailand	345.7	306.2	334.0	483.7	513.3	885.8	851.7	1,002.3	1,133.1	1,708.8	2,406.8	2,828.3	2,862.2	2,839.8
Brunei	68.6	79.9	122.9	113.3	123.8	156.9	285.6	291.9	438.1	585.2	834.9	1,016.0	1,373.7	1,246.7
Philippines	34.3	40.0	84.7	69.3	114.2	170.9	203.8	219.0	455.1	484.3	676.1	746.3	807.4	911.0
North East Asia	2,456.6	2,918.2	3,310.1	3,719.9	5,182.0	8,284.1	7,329.1	8,970.4	10,831.3	13,080.4	16,150.2	21,959.9	25,679.9	26,429.3
Japan	1,355.2	1,819.5	2,079.8	2,266.9	3,008.8	5,264.4	4,367.2	5,259.6	6,392.1	7,894.2	9,498.2	12,500.7	15,445.0	15,634.9
Hongkong	502.2	550.0	489.9	616.2	840.3	1,372.3	1,364.8	1,803.3	2,125.2	2,361.8	2,924.9	4,251.0	4,974.4	5,002.3
Taiwan	112.9	164.3	192.4	296.3	440.1	519.7	514.7	703.6	876.1	1,081.8	1,434.8	1,918.3	1,881.7	1,885.7
People's Rep of China	593.3	454.9	453.3	456.5	701.6	769.7	780.5	754.4	815.1	906.2	1,263.7	1,990.0	2,007.1	2,397.7
Republic of Korea	71.2	74.7	80.3	75.8	156.4	288.2	251.8	389.4	573.9	734.7	924.3	1,206.6	1,282.8	1,422.2
South Asia	214.1	214.8	218.3	251.9	409.9	548.2	541.6	602.2	923.8	1,515.0	1,807.5	2,836.6	3,118.9	3,336.6
India	94.5	99.7	111.0	108.4	169.9	237.5	236.5	295.0	536.2	809.7	708.9	1,208.1	1,474.3	1,559.8
Pakistan	88.0	79.1	68.5	71.5	117.1	109.4	97.9	122.5	142.0	181.8	413.7	534.2	373.9	311.8
Sri Lanka	22.0	25.7	26.4	25.2	52.4	82.1	95.8	67.7	111.1	218.8	316.3	371.8	412.3	678.5
Bangladesh				25.0	46.3	69.1	68.7	81.0	81.7	234.8	284.6	576.7	625.9	589.7
West Asia	735.7	801.1	1,047.3	1,232.4	1,542.4	4,859.7	4,480.7	6,367.9	7,060.7	7,689.9	10,265.8	14,207.1	18,554.8	17,450.1
Saudi Arabia	56.2	91.6	233.5	271.0	420.0	1,275.0	1,880.8	3,737.8	4,074.9	4,282.4	4,722.8	7,236.9	11,836.1	10,683.8
Kuwait	354.3	368.9	401.4	435.2	373.2	1,241.1	637.7	406.7	391.5	458.5	1,870.5	3,026.3	2,248.9	1,169.0
Iraq	16.5	9.6	15.1	41.9	52.9	259.6	290.0	330.7	584.1	828.9	1,505.2	589.6	153.3	51.6
Iran	190.4	180.9	201.4	277.7	326.9	1,119.2	1,065.6	891.7	1,086.1	1,001.5	620.8	674.6	961.8	2,480.9
United Arab Emirates	10.7	7.2	13.7	22.2	143.4	271.4	312.1	255.1	313.0	353.2	513.7	1,090.6	1,623.1	1,165.5
Bahrain	31.4	66.9	86.0	87.4	88.5	186.7	148.5	311.0	314.8	308.2	490.8	735.7	746.5	981.1
EEC	1,553.5	1,912.4	2,127.7	2,344.0	3,333.9	4,537.9	4,291.2	4,851.9	5,666.2	6,356.3	8,582.1	10,648.0	10,360.4	10,349.1
Fed Rep of Germany	326.8	389.4	453.6	540.0	800.4	1,140.5	1,117.7	1,385.9	1,649.4	1,877.3	2,473.2	2,924.1	2,736.6	2,887.0
United Kingdom	695.0	893.6	967.0	975.3	1,245.2	1,570.8	1,495.8	1,447.1	1,603.3	1,841.6	2,311.1	2,840.4	2,793.5	2,613.1
France	169.1	181.8	180.5	242.5	402.3	497.1	491.5	686.1	755.6	889.9	1,156.0	1,605.1	1,764.0	1,795.8
Netherlands	139.4	165.6	212.7	227.4	335.5	506.3	523.4	493.4	641.1	694.2	1,093.3	1,304.8	1,194.9	1,211.3
Italy	125.0	161.0	176.3	189.8	292.3	414.9	335.1	396.4	486.8	575.9	840.7	1,017.2	957.4	951.1
EFTA	172.5	204.8	229.5	242.6	384.8	569.1	523.8	692.1	792.2	847.1	1,190.0	1,670.9	1,518.6	1,569.6
Switzerland	63.8	75.6	76.9	94.7	134.3	182.7	196.6	226.4	267.5	344.2	406.9	554.1	496.7	515.0
Other Western Europe	97.2	123.9	74.4	70.2	115.0	154.2	119.0	188.2	269.0	316.9	383.9	429.2	336.1	391.7
Socialist Countries of Eastern Europe	289.6	301.8	241.3	221.1	358.5	466.3	288.2	431.3	451.6	563.6	743.7	904.8	727.7	853.2
USSR	164.5	174.8	147.8	125.6	197.7	262.2	144.2	208.4	259.4	311.9	447.2	558.1	440.0	640.3
North America	1,083.2	1,439.9	1,849.0	2,398.6	3,542.1	5,212.4	5,030.8	5,664.7	6,682.2	7,814.6	10,205.3	13,065.1	13,870.2	13,873.8
United States	1,002.7	1,342.1	1,737.1	2,288.9	3,400.9	4,958.8	4,799.4	5,354.0	6,348.0	7,456.3	9,755.4	12,509.2	13,205.2	13,368.7
Canada	80.5	97.9	111.9	109.6	141.3	253.5	231.3	310.7	334.2	358.2	449.9	555.9	665.1	505.1
LAFTA	123.4	94.4	95.2	108.7	196.0	323.8	259.3	357.2	548.6	542.1	771.0	762.0	639.1	649.8
Brazil	20.7	16.5	27.4	32.4	73.2	153.2	93.7	168.5	228.9	285.6	381.4	330.2	250.7	306.5
Oceania	467.3	614.1	754.1	850.4	967.0	1,793.4	1,913.1	2,046.6	2,340.0	2,306.6	3,314.6	4,635.5	4,725.0	4,954.2
Australia	364.3	500.5	624.9	680.7	771.3	1,258.7	1,298.7	1,409.2	1,635.2	1,526.0	1,992.9	2,833.1	2,978.0	3,172.4
New Zealand	63.1	61.6	65.4	94.6	120.4	250.8	299.8	258.3	281.6	328.5	560.8	939.1	794.8	891.8
Rest of the World	316.6	348.2	365.4	387.0	542.8	806.4	802.3	1,073.7	1,394.9	1,451.2	1,871.3	3,192.8	3,298.3	3,405.7

Source: Trade Development Board

APPENDIX 5 (Continued)
EXTERNAL TRADE, 1969-1988

(\$ Million)

Region/Country	1983	1984	1985	1986	1987	1988
TOTAL	105,659.1	112,473.6	107,996.3	104,530.9	128,680.9	167,278.0
South East Asia	22,666.8	23,774.6	22,222.4	20,752.3	25,909.3	34,272.8
Malaysia	16,760.1	17,503.9	16,087.7	14,647.2	18,037.0	23,649.8
Thailand	3,062.9	3,809.0	3,288.7	3,394.5	4,690.0	6,697.5
Philippines	1,161.0	836.0	916.1	940.9	1,252.9	1,573.5
Brunei	1,150.4	1,042.5	1,174.7	981.7	984.1	1,058.2
North East Asia	25,770.4	28,375.3	28,987.5	29,529.8	37,350.5	49,934.6
Japan	14,968.4	16,024.6	14,591.9	15,256.6	19,478.5	26,192.3
HongKong	4,400.9	4,457.5	4,279.9	4,493.0	5,616.7	7,375.2
Taiwan	2,289.0	2,827.4	2,777.3	3,341.4	4,780.2	6,231.6
China, People's Rep	2,197.0	3,400.4	5,701.8	4,353.4	4,522.6	5,754.2
Rep of Korea	1,868.6	1,598.2	1,549.9	1,991.6	2,832.2	4,093.9
South Asia	3,346.1	3,579.8	3,599.2	2,880.1	3,384.8	4,035.9
India	1,656.9	1,883.7	1,557.9	1,376.3	1,695.7	2,014.2
Sri Lanka	658.1	405.1	519.6	414.4	460.2	555.0
Bangladesh	538.3	617.0	716.7	535.6	550.4	659.1
Pakistan	306.4	516.2	593.3	308.2	359.0	413.9
West Asia	15,216.7	14,601.8	10,672.1	9,211.8	10,048.4	10,285.5
Saudi Arabia	7,482.3	7,051.0	2,622.8	1,852.5	3,414.3	4,428.8
Iran	2,029.9	1,457.8	3,348.2	2,826.4	1,125.9	1,019.9
United Arab Emirates	1,845.5	1,849.6	1,984.3	1,078.5	1,566.5	1,797.4
Kuwait	1,687.5	2,192.5	1,252.0	2,183.0	1,680.4	1,095.1
Bahrain	577.3	528.3	276.4	459.1	579.3	553.2
European Economic Community	10,678.9	11,510.2	11,858.2	11,923.5	15,590.9	20,865.7
United Kingdom	2,697.9	2,968.9	3,067.5	3,170.3	3,888.2	4,863.5
Germany, Fed Rep	2,691.4	2,894.2	2,700.4	3,367.8	4,311.9	6,012.7
France	1,712.1	1,660.3	2,091.7	1,685.2	2,336.3	2,898.4
Italy	1,210.6	1,437.0	1,378.7	1,239.2	1,616.9	2,459.9
Netherlands	1,043.9	1,121.3	1,189.4	1,247.6	1,627.6	2,044.7
European Free Trade Association	1,336.4	1,512.2	1,603.4	1,896.4	2,197.3	3,054.5
Switzerland	555.4	555.2	516.3	641.7	852.4	1,188.0
Other Western Europe	82.5	70.6	174.0	121.0	226.3	256.5
Socialist Countries of Eastern Europe	889.6	1,226.7	872.8	667.3	847.8	1,098.5
USSR	477.8	846.6	560.6	362.1	477.5	445.9
North America	17,943.6	19,918.3	19,947.7	20,355.5	25,596.5	33,823.1
United States ¹	17,379.2	19,214.6	19,394.4	19,750.7	24,731.0	32,544.5
Canada	564.3	703.6	553.3	590.5	839.3	1,252.4
Latin American Free Trade Association	573.6	669.3	571.5	608.7	807.3	1,407.2
Brazil	250.5	331.5	301.7	288.5	382.7	690.7
Oceania	3,962.8	4,727.2	4,900.8	3,723.4	4,097.4	5,094.8
Australia including Christmas Island	2,502.7	3,278.9	3,185.2	2,483.6	2,963.0	3,885.7
New Zealand	607.1	621.9	857.7	543.5	460.1	576.3
Rest of the World	3,191.7	2,507.6	2,586.7	2,861.1	2,624.4	3,148.9

Source: Trade Development Board

APPENDIX 6

NET INVESTMENT COMMITMENTS IN MANUFACTURING BY INDUSTRY, 1972-1988 (EXCLUDING PETROCHEMICALS)

\$ Million

	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988
Total	194.5	295.9	291.9	306.3	303.3	396.4	812.4	943.6	1,413.5	1,863.0	1,705.0	1,775.8	1,828.4	1,120.4	1,443.0	1,743.0	2,015.5
Food & Beverages	3.4	2.0	0.0	2.6	14.4	27.4	8.5	40.8	99.4	90.7	101.5	185.9	154.6	55.5	83.3	156.6	168.4
Textiles	2.2	14.5	20.9	.9	6.5	1.7	11.0	14.2	32.6	18.1	8.9	7.3	.3	3.2	5.6	3.0	10.6
Wearing Apparel	6.4	0.0	0.0	0.0	1.5	3.0	2.7	1.4	8.0	8.3	10.4	2.8	6.7	.7	0.0	6.8	.9
Leather & Rubber			1.1	1.5	1.7	17.9	7.3	1.5	15.8	3.6	5.3	22.9	8.1	4.9	.4	8.5	5.6
Food Products	14.2	9.3	6.9	1.4	8.3	5.3	9.8	33.2	30.8	16.8	8.8	8.0	15.8	21.3	11.4	14.7	0.0
Paper Products & Printing	0.0	6.3	1.0	0.0	1.0	4.2	0.0	8.0	27.2	161.8	109.2	22.1	111.3	32.3	36.2	25.1	72.0
Industrial Chemicals	2.1	5.1	26.0	7.5	5.0	4.9	13.9	5.4	76.8	63.8	16.9	52.1	8.1	34.5	37.7	32.9	106.2
Plastic Products	6.7	6.3	0.0	4.3	11.8	8.6	13.4	34.0	66.8	41.9	47.5	27.7	33.4	19.4	42.6	115.9	53.5
Other Chemical Products	.9	2.4	15.0	2.0	.4	1.2	14.5	31.0	101.1	95.7	47.4	106.2	30.7	18.2	144.9	11.0	44.2
Petroleum	0.0	0.0	0.0	135.0	16.0	66.2	330.0	224.5	200.0	162.0	387.7	367.1	358.8	190.0	116.0	122.4	0.0
Non-Metallic Mineral Products	9.4	7.0	19.0	0.0	.7	0.0	0.0	7.1	65.7	55.6	40.5	136.0	24.6	88.4	9.3	6.2	133.8
Basic Metals	1.3	4.0	24.0	1.4	15.4	1.0	2.5	0.0	0.0	16.3	53.5	36.8	18.1	2.9	8.3	5.2	15.3
Fabricated Metal Products	2.4	1.2	5.2	17.3	16.8	6.8	13.8	56.2	75.6	96.1	121.0	167.4	71.5	39.5	82.0	104.3	109.9
Machinery Except Electrical	50.7	86.0	41.8	70.7	51.4	77.9	45.5	151.9	121.3	300.9	162.2	84.5	225.9	125.0	205.6	93.5	180.5
Electrical Machinery & Appliances	92.0	34.4	4.9	13.3	142.3	120.3	292.4	253.9	392.2	406.8	321.8	351.6	655.8	376.1	522.0	838.4	943.6
Transport Equipment	.7	62.5	105.0	42.0	.7	36.1	0.0	18.5	58.4	273.3	162.5	92.7	72.5	88.3	64.0	61.7	110.4
Precision Equipment	0.0	0.0	18.1	1.3	6.4	7.7	33.9	31.5	29.0	24.3	66.6	65.8	17.0	2.0	53.8	116.6	44.0
Servicing/Engineering	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.5	26.8	27.8	38.9	13.8	14.7	19.9	8.4	15.9

Source: Economic Development Board

APPENDIX 7

INVESTMENT COMMITMENTS BY COUNTRY OF ORIGIN, 1973-1988 (EXCLUDING PETROCHEMICALS)

\$ million

Country	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988
USA	8.8	64.5	45.6	92.9	153.5	146.9	259.9	505.7	674.4	533.3	571.7	805.9	427.3	443.4	543.5	594.7
JAPAN	151.4	44.6	23.6	76.1	129.4	158.4	319.4	135.3	212.1	73.7	166.6	166.6	244.1	492.8	601.1	693.2
EUROPE, of which	43.9	28.0	167.5	50.1	47.7	418.6	161.3	360.4	228.7	421.9	394.1	325.1	201.0	218.8	285.8	358.1
EC*	20.9	25.8	158.9	45.7	36.7	408.1	132.3	269.9	166.3	386.9	338.8	318.9	180.9	204.8	241.0	345.1
Sweden	21.0	1.0	2.1	1.0	4.5	—	5.7	53.6	38.3	11.1	12.5	0.3	14.9	5.4	8.7	—
Switzerland	—	0.6	—	2.4	6.5	8.4	12.1	35.8	17.0	22.0	15.4	2.7	4.7	7.7	27.8	10.1
Other European Countries	2.0	0.7	6.5	1.0	—	2.1	11.2	1.1	7.2	1.8	27.4	3.3	0.5	0.9	8.3	2.9
OTHERS	20.0	31.7	10.1	41.4	32.0	41.8	82.9	187.7	106.2	134.1	137.4	37.1	15.6	34.5	17.6	21.7
TOTAL FOREIGN	224.1	168.8	246.8	260.4	362.6	765.7	823.4	1,189.1	1,221.4	1,163.0	1,269.8	1,334.7	888.0	1,189.6	1,448.0	1,667.7
TOTAL LOCAL	71.8	123.1	59.5	42.8	33.8	46.6	120.2	224.4	641.6	542.0	506.0	493.7	232.4	253.4	295.0	347.8
TOTAL FOREIGN + LOCAL	295.9	291.9	306.3	303.3	396.4	812.4	943.6	1,413.5	1,863.0	1,705.0	1,775.8	1,828.4	1,120.4	1,443.0	1,743.0	2,015.5
*EC, of which	20.9	25.8	158.9	45.7	36.7	408.1	132.3	269.9	166.3	386.9	338.8	318.9	180.9	204.8	241.0	345.1
UK	1.9	25.8	56.2	14.8	21.4	156.2	91.9	129.5	83.1	283.1	207.5	186.6	69.4	93.4	42.4	56.6
Netherlands	0.6	—	81.4	20.0	—	200.0	4.5	1.0	1.2	62.8	99.2	70.3	75.2	57.1	70.9	82.9
Germany	18.4	—	16.5	7.1	8.9	38.3	25.3	69.2	11.5	31.4	12.8	14.3	20.1	16.7	90.3	46.7
France	—	0.1	2.4	1.8	1.1	11.1	5.0	18.8	1.7	1.3	6.8	—	15.1	27.8	15.2	18.6
Italy	—	—	2.3	2.0	5.3	1.1	2.5	45.4	62.5	2.4	5.1	44.8	—	5.1	22.0	135.4
Other EC Countries	—	—	—	—	—	1.4	3.2	6.0	6.3	5.9	7.4	2.9	1.1	4.7	0.2	4.9

Source: Economic Development Board

広報委員会リスト

(順不同)

	氏	名	会 社 名
担当理事	加藤	武彦 氏	日 本 航 空
幹 事 長	松谷	英史 氏	東 京 銀 行
委 員	八木	隆志 氏	時 事 通 信
	小田	郷司 氏	松 下 電 器
	倉田	大作 氏	伊 勢 丹
	山野井	政敏 氏	博 報 堂
	戸頃	照恵 氏	J E T R O
	瀬下	靖彦 氏	三 菱 倉 庫
	重盛	慎太郎 氏	凸 版 印 刷
	村田	隆史 氏	伊 藤 忠 商 事
	岡田	悟 氏	村 田 製 作 所
	松沢	孝郎 氏	東京海上火災保険
	国松	博 氏	日 本 交 通 公 社
	門伝	好司 氏	サンケン・シンガポール
	白川	耕三 氏	竹 中 工 務 店
	野木	義之 氏	キッコーマン・シンガポール
	百瀬	健昭 氏	日本石油 (アジア)
	伊東	善之 氏	国際電信電話
オブザーバー	成宮	治 氏	日 本 大 使 館
	山田	秀樹 氏	日 本 大 使 館
	杉野	一夫 氏	日 本 人 会

20周年記念特集号に寄せて

シンガポール日本商工会議所が20周年を迎え、記念特集号を編集するに当っては、不断の苦勞を忘れ、この記念すべき月報特集号に携さわれる喜びも感じつつ、編集に当りましたが、過去20年亘り、一度も休むことなく編集された諸先輩広報委員のご苦勞に感謝し、更なる月報、いや、シンガポール日本商工会議所及び会員の皆様方の発展の為に広報委員一同精一杯努力して参りますので、皆様も何卒宜しくご支援ご協力の程、お願い申し上げます。

さて、ちょっと長くなりますが下の数字何んだか判りますか？

1987	77	7,631	99.1
1988	81	8,202	93.2
1989	76	7,038	92.6
	234	22,871	97.7

そうです、これは私が当地に赴任以来まる3年間のゴルフの年別プレイ回数、ストローク数及び平均スコアーです。2〜3回スコアーを記録していないケースがあったと思われませんが、何んと3年間で234回プレイし、22,871回もクラブを振った訳です。（勿論もパター入っていますが）

日本ではせいぜい年間10回位のプレイ回数でしたから、この3年間でもう日本の23年分をプレイしたことになります。（よくやりました。）

そしてこれは私の推測ですが、仕事柄色々な方々とゴルフをする機会が多い為、多分200人近くの方々とゴルフをご一緒させて頂いたと思います。

これらの方々及びこれからご一緒させて頂ける方々との出合いを大切にし、残された当地在任期間中、大いにゴルフをしたいと思っています。

いつでも声を掛けて下さい。そして、今、腰を痛めていますので、良い医者との紹介と、年間アベレージで90を切れる様なゴルフに関するアドバイスを宜しくお願いします。

広報委員会 幹事長
東京銀行 松谷 英史

「盆栽国家」

シンガポールは緑豊かなガーデン・シティの呼び声が高い。しかし、一面では、余りにも人工的な都市国家づくりのため、私には「盆栽国家」のようにも思われる。リー・クアンユー首相が手塩にかけつくった「盆栽」に似た国で、ちょっぴり変わった枝が出てくると切られてしまう。

今年は、シンガポールが独立して25周年記念を迎える。同国が「盆栽国家」から脱皮して、もっと自然を取り入れた国づくりを目指すことを願わざるを得ない。

特派員の任務は、赴任地の姿を本国に伝えることだが、その一つとして赴任地に進出している日系企業の活躍ぶりを伝えることも含まれている。マスコミの一人として、商工会議所の広報委員会の末席をけがしているが、いろいろな企業の人の意思が出され、非常に参考になることが多い。任期まで精一杯がんばりたいと思っている。

時事通信社

八木 隆志

昨年末、前任者よりこの広報委員を引継ぎ、この20周年記念号が、私の初めての原稿となりました。先輩が築いてこられた伝統をこわさぬように、がんばりたいと思っています。

さて、当社でも円高以降の大きな経済環境の変化により海外拠点の位置づけが、大きく変わってきています。なかでもシンガポールは、東南アジア各国の総括拠点として日本の持っていた機能に移管させていく方針が決まり、実施され初めています。

次の25周年記念号が刊行される頃には、日本の本社・事業部に依存しない真に自主独立した企業となっていることと思います。

大きな変革の中で仕事ができるのを、うれしく思っている今日、この頃です。

シンガポール松下無線機器㈱

小田 郷司

私のトライアル IN 1989

シンガポールに駐在している間に、この地を自分の足で歩いてみたいというのが私の念願だったが、昨年ようやく怠け心にムチ打ち実践してみたが、足で体得したシンガポールは、決して小さくなかった。

1) チャンギ空港→オーチャード (伊勢丹) 5.5 時間

チャンギ空港を出て2時間、イースト・コーストの海岸を歩くうちに足がつる。シティーはまだ遠い。ふだんの運動不足を身をもって感じさせられる。途中、大休止をはさんでやっとの思いでオーチャードにたどりつく。

2) オーチャード→ジョホール・バル、6 時間

ブキティマ、ウッドランド・ロードを歩きコース・ウェイのイミグレーションでパスポートに判を押してもらいゴールイン。帰途はマレー鉄道で一路シンガポールへ。途中で放し飼いの犬とにらめっこをしてひや汗をかく。

3) トアス→オーチャード 6.5 時間

ラッフルズ・カントリー・クラブのゴルファーを横目に、バードパーク前を歩き A Y E 経由でオーチャードを目指した。一時は傘をさしたりの天気で、涼しく長距離歩行には絶好の天気。

4) オーチャード→ポンゴル 4 時間

シンガポールを対角線で歩き通すには、総仕上げのコースだ。オーチャードからリトル・インディアを突切り、セラングーン、ポンゴル・ロードを歩き続ける。ここでも犬が吠えたてる。田舎の犬はどこでも放し飼いなのでとてもやっかいだ。

5) M T ブキティマ

シンガポールの平地を歩いた後、次には当地最高峰の M T ブキティマに登ってみた。ルートは何本も入り組んでおり、組み合わせ次第で所要時間は大きく異なる。日曜日の早朝は頂上で体操をするグループも

あり、かなりの人手だが、この日は平日で静かなものであり、山中では3組のハイカーにしか会わなかった。ルートそのものはよく踏まれており、道を見失なう心配は不要と思う。

伊勢丹（シンガポール）リミテッド
倉田 大作

シンガポール日本商工会議所創立20周年記念号発行のこの時期に広報メンバーの一員として関係できたことを大変名誉に思っております。これからより役に立つ広報誌作りに努力していきますので、ご愛読お願いいたします。

博報堂シンガポール
山野井 正敏

世界が目まぐるしく変化し、特にアジアの重要性が高まっている折、ここシンガポールに駐在でき、また20周年を迎えるシンガポール日本商工会議所の広報委員会のメンバーに加えていただいたことを大変うれしく思っています。

「月報は、いろいろな業界の方々の寄稿により幅広い内容となっています。これからも多くの方々に寄稿をお願いし、ますます充実した月報としていきますので、御協力の程よろしくお願いいたします。

ジェトロ・シンガポール・センター
戸 頃 照 恵

今年はシンガポール日本商工会議所の20周年、シンガポールの建国25周年を迎えます。そして私はシンガポール滞在4周年を迎えます。アッと言う間の4年間でしたが、会議所と共に20パーセントもの歴史を歩んだことになります。この月報の広報委員を務め多少なりとも自分の仕事が月報に残されたことは私にとって大へん意義のあることだと感じています。

南国シンガポールに、シンガポールの我社に、仕事を通じ、遊びを通じ知り合えたたくさんの友人たちに、多少に拘らず何かを残して、それから日本へ帰りたいと思います。そして30周年を迎える頃、40周年を迎える頃、自分の残したものが、まだ残っていたらきっと感動することでしょう。

三菱倉庫㈱ (ダイヤトランス)

瀬下 靖彦

月報20周年に寄せて

記念号の表紙を見ると見覚えのある絵柄がいっぱいあり懐しい。

自分の在星中に何冊の異なる表紙を見たか数えてみた。74年～81年までの8冊、そして再赴任の84年～現在に至るまでの6冊。20冊のうち14冊、さらにこの記念号と合せると15冊を読んだことになる。88年度版からは広報委員会で表紙の担当もしており月報はより一層身近なものとなっている。

それぞれの表紙が物語る歴史の重みと在星中の自分の歴史や想出が重なり大変興味深い。月報の限らない永続と発展を心より望みます。

凸版印刷 (株)

重盛 慎太郎

ビジネスの世界にあってビジネスライクでない感覚が要求される広報委員会です。

ますますバラエティーに富んだ「月報」にするため各界の皆様からの寄稿をお願い致します。

伊藤忠商事 (株)

村田 隆史

20周年記念特集号に寄せて

父母の住んだことのあるシンガポールに赴任の命を受け因縁めいたものを
感じた時から、早や2年が過ぎました。四季のない当地にあって月日の流れ
が早く感じられるところですが、人いわく年のせいかも知れません。

20年という長きに渡り発行されている「月報」の担当に前任者に引き続き
加えていただき、何とかこれ迄こられたのも執筆者・メンバー諸兄の御支援
の賜物と感謝する次第です。

実際のところ、日頃外部との接触が少ない身にあって、委員会に参加する
ことはタイムリーな情報を得、見聞を深める有意義なものとなっています。
月報の編集を担当する月はテーマの選定に始まって完成に至る迄、頭の痛い
ものですが、今後も微力ながら充実した「月報」となるよう努力していきたい
と思います。

ムラタ・エレクトロニクス・シンガポール・プライベート・リミテッド
岡田 悟

20周年記念号・編集委員随想

たまたま昨年6月にシンガポールへ駐在することになり、たまたま商工会
議所月報の編集委員を仰せつかることになり、たまたま創立20周年号に委
員として名前を載せて頂けることになり、光栄に思っている次第であります。

この20年間に、シンガポール日本商工会議所としては、会員会社が増え
るにつれ、在星日本人が増えるにつれ、さまざまな局面でシンガポール社会
との関わりを深めてきたことかと思えます。

将来、創立30周年、40周年記念号が出る頃には、シンガポール日本商
工会議所も、さらに開かれたものとして、「月報」にも日本人による執筆に
とどまらずに、広くシンガポールのローカルの人々からも原稿が寄せられる
ようなオープンなものになればホンモノだな、などと考えております。

東京海上火災保険
松沢 孝郎

20周年記念特集号の広報委員の一言

「広報委員会は加藤理事、松谷幹事長以下各業界の16名の委員、日本大使館より2名と杉野日本人会事務局長の3名のオブザーバー、そして商工会議所の石川事務局長とMR. WONGの総勢23名が、原則的に毎月第一金曜日に月報の編集の為に会合している。もちろん、全員が顔を揃える事は無いに等しい。この様な大所帯を構えるに至る以前、掲載テーマ選び、原稿依頼先の決定等の様々な難作業を約そ半分の委員でこなしていたとの事。現在、年一度の担当が回ってくるだけでさえも、小生などは悩み込んでしまうことがあるのに、数倍の努力とバイタリティーをもって現在を築き上げた諸先輩の尽力とはどれ程であったのだろうか。素晴らしい実績に改めて感慨を深めると共に、これからも永く続くこの月報発行の為に、惜越ながら広く皆様のご協力をお願いする次第である。」

サンケン・シンガポール
門伝 好司

商工会議所20周年特集号編集に当って

20年といえば、人間であれば、成人を迎えたということでもあります。

この間のシンガポールの変貌ぶりは、巻末の経済指標を見る事により、手に取るように理解できます。

会員企業の皆様方の企業は、シンガポールの政治、経済の動きに大なり小なり影響を受け乍ら、独自の歴史を積み重ねているわけです。その意味で、自社の歴史をシンガポールの歴史にダブらせて見てみると面白い相似性があるように思います。

自分の会社が20周年を迎えた時、会社はどうなっていて、従業員はどうなり、そして自分はどうか、と思いながらシンガポール、きのう、きょう、あしたを読ませて頂きました。

キッコーマン・シンガポール(株)
野木 義之

20周年記念特集号編集後記

早いもので、日本商工会議所広報委員会のメンバーに名を連ねてから1年半を経過しました。それまでは、毎月配布されて来る月報にろくに目を通さないことも多々ありましたが、この月報が作成されるまでの苦労を身にしみて分かってからは、必ず目を通すようにしています。20周年記念号発行という節目に広報委員会の末席に名を連ねることができたのも幸せです。

本月報に対する皆様からの辛評、アドバイス並びに御意見を御待ち致しております。掲載テーマの発掘に委員会の全員が苦勞しています。皆様の御知恵を貸して下さい。

国際電信電話
伊東 善元

「国会待機」という言葉が遠いものになって、8ヶ月。その他の面でも、明らかに東京とは違うパターンの日常。かえって日本にいた時よりも忙しい、ほとんど変わらないといった意見の方もおられるでしょうが、私自身は、よりメリハリのきいた暮らしを楽しませてもらっている感じがします。

経済大国なら、それに見合ったゆとりのある豊かな生活をおくる——それが日本にいる日本人のためにも、また世界の人々の理解を得るためにも、今、求められているのではないのでしょうか。庶民に手の届かない高地価とか、当地には及ばないインフラとか、いろいろ問題はありますが、まずは日本人の意識の持ち方が肝要です。徐々に変化はしてきているとは思いますが、シンガポールで生活した者が帰国した際には、日本の現状に埋没するのではなく、新風を吹き込んでいく——これが我々のささやかな役目かな、とちょっと考える次第です。

日本大使館
山田 秀樹

今から11年前に、私はシンガポール日本商工会議所（JCCCI）の広報委員会に仲間入りさせて戴きました。当時私は、日本在外企業協会シンガポール相談所という社団法人に勤めており、日本からお越しになった方々の投資相談に応じておりました。とは言っても大それた事をしていたわけではなく、当地の風俗・習慣とか労働慣行とか言ったことの相談にのって、おりました。そんな時に当時の徳山JCCCI事務局長のご配慮で広報委員会のメンバーに加えて戴いたわけです。

広報委員というのは、私にとって初めての公のポストで、晴やかで、緊張した面持で初回の会議に出席したことを今でも覚えています。

それから暫くして、JCCCIは設立10周年を迎えました。確か、マンダリン・ホテルだったと記憶していますが、日本から、永野重雄・日商会頭をお迎えして、華やかなパーティを催しました。

あれから又、10年が過ぎました。この間に、シンガポールは、経済不況を乗り切って、大きな発展を遂げました。ラッフルズ・プレイス周辺、マリーナ・センター、オーチャード通り周辺の変貌振りは著しいものがあります。

さて、90年代はシンガポールにとってどんな時代になるのでしょうか。先進国の仲間入りを果しているか、政治、経済、社会それぞれの分野でどのような変化があるか。それらを見届けるのが今から楽しみです。

シンガポール日本人会
杉野 一夫

編集後記にかえて

20周年記念号編集担当

JTBシンガポール 国松 博

世界地図の小さな点、人口270万人の小さな国、独立25周年の若い国。

JCCI 20周年記念特集号によせられた、76編の原稿を拝読し、シンガポールには様々な仕事があり、様々な日本人が住んでおり。

実に、様々なシンガポール観があり、シンガポール人と接しているのに驚きました。ある人は、この国を単調であると云い、又、世界でもっともたいくつな都市とも云う。しかし、この76編、76人に関する限り、不思議な魅力のある国を感じました。20周年記念号の編集委員となった好運に感謝すると同時に、おかげさまで、シンガポールの過去、現在、未来……すっかりエキスパートになりました。

この特集号をお読みになれば、滞在の短い方でも、SIN通になり、又これからSINへ来られる人の格好の教材となるでしょう。

皆、SIN-SIN家（親日家と対比して）になることでしょう。

最後に、原稿をいただいた76人の云々、ありがとうございました。

76編を読み“SINのきのう、きょう、あした”を一言で要約すれば……

「暑いけど、結構、魅力のある国」でした。

日本石油（株） 百瀬 健昭

シンガポールは今年建国二十五周年を迎え、同じ年に商工会議所は二十周年を迎える。この記念すべき年の、記念すべき号を、広報委員の一人として担当できたことに心から感激しております。

全七十六編の編集・校正も、各原稿の奥の深さ、多岐に渡る内容に触れ、（一冊の物語りを読むが如くに）時の経つのも忘れ、全く苦にならずに行うことができました。間違いなくシンガポール駐在時代の永久保存版となることでしょう。この記念号を度々読み返し、新たな気持ちでシンガポールと日本（人）について考えてみたいと思っています。

編集を私達の独断で行ないましたことには、心からおわび申し上げます。

また御多忙にもかかわらず寄稿して下さった方々に心より御礼申し上げます。

これを機にシンガポールと当商工会議所がより一層発展しますよう祈っております。

MONTHLY REVIEW

STRICTLY MEMBERS ONLY



Dendrobium (Ceaser Pink)

M. C. I. (P) No. 76 / 4 / 89

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY SINGAPORE

10 SHENTON WAY #12-04/05/06 (12th Storey) MAS BUILDING SINGAPORE 0207

COVER : PRINTED BY
TOPPAN PRINTING CO., (S) PTE., LTD.
TEXT : PRINTED BY
GREEN MOUNT PUBLICATION & PRINTING CO
155 Kallang Way #02-11/12
Singapore 1334. TEL : 2923831